

仮面ライダーレクイエム

リョウギ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生と死を掴みかけた世界

生の白と死の黒

そこから生まれ出る「灰色」

灰色の生と死の溢れる世界に下ろされるギロチンは

正義か、悪か

今、仮面の為す鎮魂歌が響きゆく

目次

第1話「13の逆位置・その名はレクイエム」	1
第2話「10の正位置・鎮魂歌の意味」	30
第3話「15の逆位置・くくり様の裁くもの」	62
第4話「15の逆位置・『悪魔』の証明」	91
第5話「14の逆位置・『節制』と解放の狼煙」	131
第6話「14の逆位置・木器用な親娘を繋ぐもの」	167
第7話「6の正位置・暴走、パニックトレイン!!？」	206
第8話「6の正位置・キミのくれた名前」	241
ライダーデータfile1	284
ノーワンデータfile1	291
第9話「12の正位置・エレクトリック・アイドル」	295
第10話「12の正位置・グレイトフル・ワンナイト」	334
第11話「8の正位置・泉の友達大作戦」	379

第1話 「13の逆位置：その名はレクイエム」

燃え盛る研究所の中で男は呆然と立ち尽くしていた

―ねえ、じゅうぞう 十二

その目前に立つ傷だらけの女性が口を開く

その体には所々から灰色の炎が上がっていた

―私が、私でなくなったら……

弱々しく吐息をこぼしながら女性は微笑む

―あなたが、私を殺してね



2022年

ある研究が発表され世界がザワついていたのは記憶に新しい

生と死、その概念の固定化

プラズマ学などの研究からたどり着いたその研究成果により、人々の体の中には魂と

呼べる概念結晶が見出された

白くゆらめく炎のようなそれは「アニマ」と名付けられた

生の概念があるのなら、死の概念ももちろん存在した

白いアニマに鏡合わせになる形で存在した黒いアニマ

人が死ぬその一瞬に顕在化する「死の概念結晶」

そこで研究者はある仮説にたどり着いた

『生の概念と死の概念。混ざり合わされば、生と死の概念境界を無くして永遠に生きる

ことができるのではないかと』と

その研究の結果は――



ひつぎのみや
棺ノ宮市のシヨツピングモール

休日である故に多くの人に溢れ、楽しげに会話したりシヨツピングを楽しんでいた

そんな中突如大きな爆発が起き、人々が驚き立ち止まる

『ヒハハハハハハハハハハッ!!ショウウターイム!!』

爆発の中心部から爆煙を払い、異形が姿を現した

一人は抉れたカボチャに刺さった灰色の炎揺らめくロウソクのような装飾がついた

大きな錫杖を手にしたスーツを纏う男のような異形

一人はどこかの令嬢を思わせる短いスカートドレスを着て全身にアクセサリーのように小さいキヤンドル台を身につけた小柄な異形

一人は崩れた塔のような大柄な鎧に身を包む大筒じみた巨大な左腕を持つ背の高い異形

それぞれの異形たちは体のどこかしらにある口ウソクのような装飾や瞳の中に灰色の炎を揺らめかせていた

響き渡る悲鳴

逃げ出す人々を見渡し、肩を竦める異形が一人

『ダッサイヤツらばーっか。あたし好みの死ここにはいないじゃーん』

令嬢のような異形ージャクリーン・シャンデリアがそう呟き、退屈そうに髪のような装飾をいじいじと指に絡ませて体を揺らす

『……貴様の嗜好など知らん。ただ死を作ればいいだけだ』

大柄な異形ージャック・トーチはそう呟くと大筒型の左腕から灰色の火球をそこかしこに放ち始める

派手な音を響かせ、シヨップینگモールが崩れていく

「きゃあああああああああああ!!」

崩れた瓦礫の下敷きになる人々、爆発に巻き込まれる人々

さまざまな形で死に向かう人々が溢れ出していく

「……………あ…死に……………たく…ない……………」

瓦礫の下敷きになった女性がか細い声を漏らす

『おんやああ？』

そこをスーツ姿の異形ージャック・ランタンが覗き込む

目前に現れた異形に思わず「ひっ」と息を呑む

『素晴らしい！「死にたく無い」！そりゃ当然だ。いつまでも生きていたいのには人間の永

遠の夢だ!!!』

天を仰ぎ、芝居がかった様子でランタンが立ち上がる

そしてぐりんツと首を後ろに回し女性を見下ろして微笑みを溢す

『だから、一足先にそれを叶えたワタシがその夢を叶えてあげまシヨウ、マドモアゼル

♪』

踊るように振り返ったランタンが手にした錫杖をくるくると回しながら女性の鼻先

に突きつける

ーバァン!!!

『Oh!?!』

が、その肩口に銃弾が突き刺さりランタンが女性から離れながらよろめく

異形たちの目の前には深い青色のプロテクターを装備した特殊部隊のような集団が現れ、一同に銃を向けていた

その右肩のプロテクターには一様に棺桶のようなマークが刻印されている

『……………埋葬部隊か』

肩口を押さえわざとらしく痛がるランタンにトーチとシャンデリアが並び、部隊と相対する

その先頭に立つ硝煙のくすぶる小銃を構えた青年が異形たちを睨む

「ージョンドウ、今度こそ貴様らを《埋葬》するー」

青年の言葉を号令とし、部隊が手にした小銃を乱射する

が、それはランタンが振り翳した錫杖から溢れ出した灰色の炎の障壁に全て弾かれる

「ーチツ!!?」

『クヒヒヒ、キミたちも飽きないねえ。そんなアニマ干渉^{オモ}弾^モで倒せるのはせいぜいノーワンまで。その上にいるワタシたちには届きもしないのわかってるでしょう?』

芝居めかした仕草で肩を竦めるランタンを青年は再び睨む

『あーあ、興が冷めちった。シャンデリア、トーチ、帰ろうか』

「!!? 待て!!」

『待たない♪んじゃ、サリユー♪』

トン、とランタンが錫杖で地面を突くと三人の異形の姿が陽炎に揺らめくかのようにして消失する

それを見た青年は一つ、大きな舌打ちをするとインカムに指を当てる

「こちら十一宮といみや。ジョンドウたちは逃走。補修班と医療班を頼む」

通信を終えた青年十一宮といみや 正義せいぎは固く拳を握りしめる

「ジョンドウめ…!!?」



少女十一つなしり 輪音りんねはあまりの人の多さに目を回していた

どこに目を向けても人、人、人

さらに目につく建物も大きく高い

「な、なんてとこななの…いい、息が詰まる…」

目を回しながらもなんとか人ゴミを掻き分け進んでいく

どうにか歩みを進めてきた輪音はふと、人の気配がほとんどしない場所に来ているこ

とに気づく

街路樹の並木が続く道

木々の葉が日差しを遮り、柔らかな灯りに包まれた静かな場所

「……………」

その場所の雰囲気不思議に思いつながらふと、街路樹の向こうに見えるものに気づき、少し心音が早まる

「お墓……」

街路樹と鉄柵を挟んだ向こうには花崗岩の白や灰色の墓標が並んでいた

霊園に続く道だったのか……と少し気味悪く思いつながらふと、そのお墓の違和感に気づき、思わず柵に近づいてジッと見始める

そこに並ぶお墓たちは、何故か皆装飾が施されていたのだ

あのよく見る灰色の墓石、その周りにごちやごちやと花以外にも色んなものが並べられているのだ

あるお墓には色んなお菓子の袋が

あるお墓には様々な洋服やそれを着たマネキンが

あるお墓には超合金のロボットフアギアがたくさん

「な、何のお墓……」

思わず輪音は首を傾げる

海外のお墓にはこんな感じに飾り付ける文化があると聞いたことあるような気もするが、日本で、しかも全てのお墓がここまで飾り付けられているのは見たことも聞いたことも無かった

「気になる？……このお墓」

あまりにも怪しい光景に首を捻っているとふと背後から声がかけられる

ビクツと肩を揺らしながら振り返った輪音の目前には不思議な雰囲気的女性がいた

高くも低くもない身長でタイトスカートに革のブーツ、ヘソを出した赤のキャミソールと扇状的な格好に黒いロングコートを着た女性だった

肩口をくすぐるくらい長さの燻んだ灰色の髪に灰色の瞳がどこか人間ではないような雰囲気を感じさせる

女性は髪を少しかき上げ、右耳に付けられた炎の形をした紅いピアスを揺らすとこちらに歩み寄ってくる

「あ、あ、えつとその……？ わ、わたし……ただ、道に迷つて……？」

お墓を覗いていたことを咎められる、と勘違いした輪音は泡を食って手を振るが、その肩を掴みながら顔を寄せた女性は形のいい唇に指を一本当てながら「しー……つ」と囁く

「大丈夫、怒りやしないよ。私も、あいつも」

とそれだけ告げ、悪戯っぽく笑うと女性は輪音の手を掴みどこかへと引つ張っていく
一瞬、握られた女性の手がゾツとするほど冷たいことにぎよつとした輪音だが、すぐさま慌てて女性に引つ張られる形についていく

「ほら、ここだよ」

連れてこられた先は墓地の中にぽつんと立つ小さな小屋だった

「え、えーつと……ここは？」

と振り返る輪音

だが、そこに先ほどまでの女性の姿はなく、ぽつんと墓地に一人取り残される

「……なんでこんなことに……」

涙目になりながらも帰る勇氣も、というかそもそも帰り道がわからなくなっていたので小屋の扉に近づきノックする

「あ、あの……誰かいませんか？」

か細い声で尋ねる

しばらく静寂が広まり、耐えかねた輪音が離れようとした時にその扉がガチャリと開く

「はい、どちらさま？」

そこから現れた人物を見て輪音は安堵し、同時に戦慄する

現れた青年は頬や服にべつたりと真つ赤な液体が付着していたのだ

「……キミはー」

「くッ!!!」

青年の問いかけも終わらぬうちに輪音はスマホを取り出し、110番をコールして通報を始める

「ちよつ、待っー」

サイレンの音と共に急行した警察官たち

だが、青年の顔を見てからはあとため息を吐く

「またキミか…困るよ何度も何度も」

「いやあ、スイマセン……」

警察官と青年のやりとりを見た輪音は二人の顔を見比べ、目を白黒させる

「え、え!?」

「キミは…彼とは初対面だね?びつくりしただろ」

呑気なことを言いながら警官が見知った風に青年の背中をバシンツと叩き、青年が咳き込む

「こいつはここらでは有名な変人なんだよ。まあいいヤツだし、嫌われるようなヤツではないけど誤解されるようなことよく言うから見知らぬヤツには通報される時がたまにあるんだよ」

「こほつ、こほつ……そのおかげで淡島あわしまさんとは顔見知りになつちまつたくらいだからね」

「警察が犯罪者でもないヤツの顔を覚えるなんてよつぽどなんだぞお前……少しはフツに暮らしてみたらどうだ？」

「善処しますよ……」

やりとりを聞いていると、どうやら青年は悪い人ではないらしいと察した輪音はほう、と安堵の息を零す

手を振りながら去っていく淡島を見送り、青年が頬についた赤い液体を拭う

「これ、油絵具。ちよいと仕上げなきゃならない作品があつてついつい夢中になつちやつてね」

とはにかみながら青年がこちらに向き直る

「あ、そうだったんですね……」

「悪いね、怖がらせちゃつて。でも来客とか予約客とかではないだろうし……そんな子がここにどうしてー」

と、青年の瞳がスツと鋭くなる

「ーお前か、キャンドル」

少し低くなった声で凄みながら小屋の側の木陰を睨む

と、堪えきれなくなったかのような笑いが聞こえてくる

木に寄りかかっていたのは、輪音をここまで引つ張つてきたあの黒コートの女性だった。悪戯つぽく腹を抱えて大笑いしている

「ハハハッ、さっきの驚きよう。偶然だったとはいえ面白いじゃないか。退屈がいい具合に紛れたよ」

「妙な真似はやめろつて言っただろ」

「退屈な日常が悪いんだ、仕方ないだろう。そこまで言うならー」

カツ、カツとブーツを鳴らしながらキャンドルと呼ばれた女性が青年に歩み寄り、艶つぽい仕草でその頬を撫でる

「ー今すぐ私の退屈を、お前が晴らしてくれればいいだろう？十三」
じゅうぞう

十三と呼ばれた青年はその手を強く払い除ける

「その顔で……俺の名前を呼ぶなとも言ったはずだ…!!？」

突然の剣幕にオロオロと狼狽える輪音を背景にキャンドルはフツツ、と妖艶に微笑む

「まあ、期待しないで待つておくよ。《レクイエム》」

ヒラヒラと手を振りながらキャンドルは何処かへと去っていく

しばらくその背を睨んでいた十三

「……ごめん、びっくりさせちゃったかな？」

「いえ…あの、さっきの人は…？」

「何でもないよ。ただの居候みたいなものだ」

十三はそう返答する

その顔はどこか寂しそうな、後悔しているような顔をしていた

「……ところで、キミはどうしてここに？」

十三が輪音に問うてきて輪音がハッ、と肩を揺らす

「じ、実はここに越してきたのですが…道に迷ってしまいました…」

申し訳無さそうに告げる輪音

それを見た十三は少し不思議そうな顔をしていたが、微笑みを浮かべる

「この辺りは迷いやすいからね。送っていくよ」

「い、いえ!? そんなことまでしてもらうわけには…」

「驚かせちゃったお詫びと思ってくれ。俺は十三、平坂ひらさか 十三じゅうぞうだ。キミの名前は？」

「あ、えつと…十 輪音と言います！ さっきはすみませんでした…」

互いに名乗った二人は十三の道案内に従って墓地を後にした

墓標の側に立てられた風車が一つ、くるくる回っていた



警察官・淡島はパトカーに乗り十三の管理する墓地から帰っていた

「十三のヤツ、いいヤツなんだが誤解されやすいのはホント損してるよなあ…」
はあとため息を零す

なんだかんだ付き合いの長い淡島は度々こうして誤解される十三を気にかけている
一人だった

十三のことを人のいいヤツとは言うが、彼もまたお人好しなのだ

日も翳る夕暮れ時、人通りの少ない薄暗い道を行くパトカー

その前に小さな黒い影が飛び出してきたのを淡島は目撃する

「な」

パトカーの前に飛び出したのは小さな黒猫だった

「チクシヨウツ!?!」

淡島は慌ててハンドルをきる

それが不味かった

ハンドルをきり、バランスを崩した車体は電柱に激突。運転席に大きな衝撃と砕けた
フロントガラスが襲いかかる

しばらくして目を覚ました淡島は薄れゆく意識の中で車の外を駆けていく黒猫を見

る

(ああ…無事だったんだな…よかったよかった)

ピーポーピーポーと救急車のサイレンが響く

ざわざわとまばらなざわつきも、微かながら聞こえる

(ドジつちまつたな…あいつのこと、俺も言えねえや…)

朦朧とする意識の中で腐れ縁の十三のことを思い出し、自嘲気味に笑う

その脳裏に、愛する妻と娘の顔がよぎる

(……優子^{ゆうこ}……彩芽^{あやめ}……)

手放しかけた意識の中で愛しい家族の名前を反復する

(……死にたく、ねえなあ……)

『おや？おやおやあ？』

半壊したパトカーのボンネットの上に現れたスーツ姿の異形が身をかがめ、運転席で正に死に瀕している淡島を愉快そうに覗き込む

突如現れた怪人に周囲の野次馬が悲鳴を上げ、散り散りになっていく

『死にたくない、アナタ今、死にたくないと思いましたがね？』

答える力のない淡島を放置し、異形ジャケット・ランタンが愉快そうに含み笑いを漏らす

『クフフ…!!? アナタはとても運がいい。ワタシには、アナタを「死なせない」ようにできるのだからあ♪』

ランタンはピン、と指で残ったフロントガラスを弾く

その一撃でフロントガラスは残らず吹き飛び、淡島とランタンを遮るものがなくなる

『ーイツツ・シヨウターーーイム♪』

ランタンは手にした錫杖を振り、淡島をトンと杖先で叩く

それに合わせて淡島の体から黒い炎と白い炎が飛び出す

ぐるぐるとかき混ぜるようにランタンが錫杖を回すと二つの炎は混じり合い、灰色の炎を形成する

灰色の炎は淡島ごとパトカーを包み、大きな炎を挙げて燃え上がり、その形を徐々に収束させていく

【あ、ああああ……】

収束した炎の中から現れたのは異形の怪人だった

人間の骨格を筋肉のように赤い蠟が覆い、体の各部にはパトカーのパーツがバラバラに組み込まれており、右腕先はボール状になって砕けたガラス片が無造作に突き刺さつ

ている

頭部である骸骨の中では灰色の炎がゆらめき、眼窩からは赤い蠟が滴り続けていた『ハロー、トラフィック・ノーワン♪いい体に生まれ変わったじゃないかあ!!キミもその方がイケメンだよクフフフ♪』

【ああ、あああああああ……!!?】

淡島だった怪人ートラフィック・ノーワンは苦しむように頭を抱え呻くと、肥大化した右腕を振り回し、逃げ遅れた野次馬を一人叩き潰した

ーきやあああああああ!!

それを皮切りにまばらな人混みにパニックが伝染していく

トラフィック・ノーワンは雄叫びを上げると無差別に辺りの人々を叩き潰していく

叩き潰された人々の血は蠟へと変質

そこからごぼり、と蠟を人型に固めたような怪人が起き上がり、ゾンビのよううめき声を漏らす

それを見たランタンは帽子を押さえながら踊るように回り、笑う

『クヒヒヒヒヒいいよ、いいよ。その調子でじゃんじゃんローワンを生み出しちゃつてよ!それがキミの苦しみと渴きを癒す方法なんだもんねえ!!』

『約束が違う? オイオイ契約文は最後まで読みたまえよ。ワタシは死なせないし生きれ

ない体にしてあげると契約したんだよお？」

ランタンが無邪気に、悪辣に微笑む

『まあ、全文は読まなかったけどさア♪クヒヒヒハハハッ♪』



「存外近くに住んでたんだ、輪音さん」

「私も驚きました…まさかこんな新居が近かったなんて…」

輪音に新居の住所を教えられて十三が案内した先は十三たちのいた墓地からかなり近いマンションだった

二人並んで歩きながら輪音が口を開く

「……十三さんは、あの墓地の管理人さん…なんですか？」

「ん、まあそうだね。墓守ってヤツ。亡くなった人の埋葬と警備・管理をしてる感じ。儲かる仕事じゃないからバイトとかもしてるけどね」

頬をかきながら十三が答える

「あのお墓…なんであんなに飾り付けられてるんですか？」

「…あれはまあ、死んだ人が忘れられないように、向こうで笑っていられるようにって思ってるから、かな。遺族に飾ってもらったり、俺が飾ったり、管理は毎日欠かさずしてる」

十三はその表情を曇らせる

「輪音さん……人はいつ、死ぬと思う？」

「?……死んだ時じゃないんですか？」

「それは、一度目の……生物的な死だ。その人の物語が終わる瞬間みたいなもの」

十三は首から下げたペンダントを掌に乗せ、それを握る

どこか悲しそうな、それでいて決意を感じる不思議な表情だった

「人は、忘れられたら本当に死ぬ。全くの無になってしまう」

「だから俺は、死を弔うと共に二度と死なさない為に墓守を続けてるんだ」

十三はそう言って微笑んだ

「ーカッコつけてるとこ悪いけど」

突然、キャンドルの声が響きビクツと輪音が道路の方を見る

そこには奇妙な形状のバイクが停車しており、そのシートにキャンドルが腰掛けていた

(いつの間に……!!?)

キャンドルは右耳のピアスを指で弾いて鳴らしながら十三に告げる

「ヤツらが出たよ。すぐその道路で暴れてる」

(ヤツら…?)

その言葉を聞いて十三は真剣な表情になる

それを見たキャンドルはフツと微笑み、その胸に何やら複雑な機構のデバイスのようなものを渡す

「さあ、行くといい《死神》」

「一言われなくても、それが俺の仕事だ」

バイクからヘルメットを取り出し装着した十三は停めてあったバイクにまたがる

「すまない、輪音さん。急用ができた。あとはその道をまつすぐ行けば辿り着くはずだから」

「は、はい！ありがとうございます！」

ぺこり、と頭を下げる輪音に手を振り、十三はバイクを走らせていく

取り残された輪音の肩に手を置き、キャンドルが囁く

「気になるのか？あいつのことが」

悪戯っぽく囁くその言葉に輪音はすぐに頷けなかった

その反応を見たキャンドルは有無を言わさず輪音を持ち上げ、お姫様抱っこ形で抱き上げる

「ふえっ!? えっ!?」

「残念、時間切れだ」

トン、と軽く地面を蹴るとキャンドルの体が高く跳び上がり、近くの民家の屋根に着地する

「さあ、愉快的なショーの時間だ。いつも一人で観戦するのも飽きていたところだから、今夜は付き合いたまえ」

月下の妖艶な怪人は、悪魔のように微笑んだ



【ああああああああああ!!!】

トラフィック・ノーワンはもはや意志の欠片も感じない咆哮を上げながら辺りを破壊し、見かけた人間を見境なく潰していく

ーニー……

廃墟と化していく街並の中、小さな黒猫が声を上げてしまう

トラフィック・ノーワンは空っぽになった眼窩から揺らめかせる灰色の炎でその猫を見つけ、それを見下ろす

そして、肥大化した右腕が振り上げられー

ーブウンツ!!

振り下ろされる寸前で怪人の体は大きく吹き飛ばされた

大型バイクがその巨体を吹き飛ばしたのだ

バイクから降り、ヘルメットを脱いだ人物は側の黒猫を掴み上げ逃す

【ああ……ああああああああ……】

トラフィック・ノーワンの前に青年―平坂 十三が立ちほだかる

「苦しいだろう。待つてな」

十三はキャンドルから渡された機構を取り出し、腰に当てる

ベルトが出現し、機構をバックルとしたメカニカルなベルトがその腰に装着される

《デスサイズドライバー・ギロチン》

トラフィック・ノーワンを睨みながら十三はその手に一枚のカード型のデバイスア

ニマ・アルカナを取り出し、その下部のボタンに親指を押し付ける

《サーティーン：デス》

押し付けられた親指から十三の心電図を読み取ったアニマ・アルカナの黒い表面に心

電図が脈を打ち始める

それをくると上下反転させ、デスサイズドライバーのバックルに装填、そのまま右

手を体の左側に伸ばしサムズアップを作つてそれを下に向ける

【ああああああ……!!?】

トラフィック・ノーワンが迫り来るが、その突撃はドライバーから噴出した黒い炎で遮られる

十三はその腕をまるで自身の首を刎ねるように、十字を切る神父のように、スツと横に引く

「変身」

《エクスキューション・アップ》

十三の親指がそのまま下され、ドライバーのレバーを下げる

同時にバックルに裝飾されたギロチンが落下、アニマ・アルカナに描かれた心電図を断ち切る

それと共に十三の首を固定するギロチン台のようなものが出現し、無慈悲にその首に下ろされる

ーガシャンツ!!!

派手な音と共に十三の首と胴体が分離、転げ落ちた首を十三はサッカーボールのように脚でキヤツチする

切り離された断面から広がる黒い炎が残された胴体を包み込む

【あああああ!!!】

トラフィック・ノーワンの巨腕が燃え上がる体に襲いかかる

が、それは燃え盛る左手に止められた

そこから炎が徐々に晴れていき、その下から黒いスーツの上にコートを纏い、プロテクターを装着したような姿が露わになっていく

「ハッ!!」

頭部を無くした胴体は鋭い蹴りを放ち、トラフィック・ノーワンを吹き飛ばす

同時に蹴り上げた頭部だったものもまた炎に包まれており、それを右手でキャッチし、あるべき場所にそれを乗せ、ヘルメットのバイザーを下ろすようになぞると共に骸骨を模したヘルメット状の「仮面」が現れ、右目を隠すようにギロチンの刃のようなバイザーが降りる

《リバース・デス》

そこに現れたのは夜闇を溶かし込んだような漆黒の怪人

蠟と骨でできたノーワンとは違う

灰色の炎を揺らめかせるジョンドウたちとも違う

純然たる「黒」を纏う怪人が首から漏れた黒い炎をマフラー代わりにたなびかせ、立っていた

ドライバーのカードは旗を持つ死神のようなイラストを表示している
十三だった怪人はトラフィック・ノーワンを指差し告げる

「灰色の生も、死も、ここで終わりだ」

「さあ、白黒きつちりつけようか」

「あああああああ!!!」

トラフィック・ノーワンが雄叫びを上げる

それに触発されたのか、辺りを彷徨っていたローワンたちが一斉に怪人に襲いかかる
怪人はドライバーのレバーを一回下ろす

《スリー：カウントダウン》

それと共に怪人の腕や脚に刃のように研ぎ澄まされた黒い炎が纏われる

一つ、近づいてきたローワンに撃ち込まれた拳が斬り裂き

二つ、次のローワンをハイキックが引き裂き

三つ、最後に纏めてきた数体のローワンを踊るような回し蹴りが両断していく

数いたローワンたちは難なく怪人に切り裂かれ、黒い炎に焼かれて灰になっていく

「こいつは後が大変だな」

【ああああああ!!!!】

ふう、と一息つく怪人に迫る巨腕

黒炎の刃がそれを防ぐ

【ああああああ…!!?】

「慌てんな。すぐに眠らせてやる!」

ギインツと腕刃を弾き、巨腕を吹き飛ばした怪人は返す刀でトラフィック・ノーワンの胸に蹴りを撃ち込み吹き飛ばす

トラフィック・ノーワンは力任せに両腕を振り回しながら怪人に襲いかかるが、怪人はそれをいなしながらドライバーのレバーを押し込んでいく

《スリー》

《ツ》

渾身のアームハンマーを怪人は受け止め、真正面からトラフィック・ノーワンの顔を、赤い蠟を流す空っぽの眼窩を見据える

「憎らしいだろう、恨めしいだろう、許せないだろう」

「―それでいい。お前の「黒い」モノは全部俺が引き受ける」

「―俺が、お前を覚えて生きていく」

《ワン：カウントアップ》

怪人がトラフィック・ノーワンの腕を弾き上げると共にトラフィック・ノーワンの首にギロチンの固定具が嵌められ、そこから断頭台が伸びていき、その地に向かう端が路面に突き刺さり固定される

身を翻した怪人が天に伸びる断頭台の端に飛び乗り、自身の右脚を断頭台へ嵌め込む脚のプロテクターが展開し、ギロチンの刃へと変貌する

「俺の名はレクイエム」

「ーお前の最期を、まっさらに染め直す「鎮魂歌」だ」

《ラスト・エクスキューション》

刃と化した怪人が断頭台を滑走、そのままトラフィック・ノーワンの首を切り落とし、路面を抉って着地する

倒れふすトラフィック・ノーワンはぼろぼろと崩れ、灰の山に変貌する

そしてその灰の山から黒と白の炎が飛び出し、白の炎が人影を形作る

「淡島さん……?」

変身した姿のまま、十三が驚愕の声を漏らす

ゆらゆらと陽炎のような状態で遺る淡島の意志はその声を聞いて同じく驚く

『お前……十三か?…なんだその格好…』

驚いていた淡島だが、自分の手や体を見て得心がいったような顔を見せた

『そうか…俺は死んで…怪物になって……』

もう一度十三を見据え、淡島は力無く微笑む

『……お前が、終わらせてくれたんだな……』

「……………」

十三は力無く頷く

『……ありがとう、十三』

「……淡島さん。何か遺すことは、遺したい言葉はないか？」

十三の問いに淡島はバツの悪そうに微笑む

『妻と娘に、すまないとだけ伝えてくれ』

そうとだけ告げると淡島だった白い炎アニマは空気に溶けるように崩れ、残った黒

いアニマは地へと帰っていった

十三はどこからか手のひらに収まるサイズの立方体型のツボを取り出し、その蓋を開

けて淡島だった灰の山に向ける

残った遺灰はツボの中に吸い込まれ、全ての遺灰を吸い込んだことを確認した十三は

丁寧に蓋をする

「淡島 大吾^{だいご}。俺はあんたを忘れない。遺言も、必ず伝えるよ」

第2話 「10の正位置：鎮魂歌の意味」

デスサイズドライバーからセットされていたアニマ・アルカナを抜き放つと、レクイエムの姿が白い炎に包まれた後に一瞬にして十三の姿に戻る

「ーいるんだろ、出てこいよ」

振り返らずに告げた十三の背後にキャンドルに抱えられた輪音が下され、キャンドルが隣に並ぶ

振り返った十三の怒りを滲ませた険しく怖い表情に輪音が思わず肩をすくませ、身を縮める

つかつかと歩み寄ってくる十三に殴られると錯覚した輪音が思わずギョツと目をつむるが、衝撃や痛みはやってこない

「どういふつもりだ…キャンドル!!?」

恐る恐る目を開けたそこには、キャンドルの胸倉を掴み上げる十三の姿があった

「どういふつもり、と言われても…私はまだ、いつも通り観戦してただけだよ。いつも通りね」

「何がいつも通りだ!?」 一般人にアレを見せてどうする気だ!?」

キャンドルは怒鳴りつける十三の手を掴み、退屈そうに睨めあげる
 「一分かりきった話だ」

キャンドルがニツと妖艶に微笑むとその姿が灰色の炎に包まれ、人間のものから人外の怪人の姿へと変貌する

頭部から伸びたキャンドルの蠟が髪のようになった頭部に白衣のようなぼろぼろの装飾を纏う、どこか科学者を思わせる容姿の灰色の炎を揺らめかせる怪人の姿に

『ー私の「退屈」を紛らわせるため、だ』

「ーッ!??!」

怪人の姿に変貌したキャンドルを見て輪音が息を呑み、尻餅をつく

それを見たキャンドルはフツツと愉快そうに笑うと十三から手を離し、輪音に向けて手を伸ばす

「やめろッ!!!」

《エクスキューション・アップ》

《リバース・デス》

レクイエムの姿に変身した十三が輪音の前に割り込み、その腕を捻り上げる

『ハハッ、冗談じゃないか。私は人間を襲うなんて退屈なことはいらないよ。わかってい
るだろう?』

「貴様のことなど、信用できるか…ッ!!?」

レクイエムがキャンドルを引き寄せ、その顔を睨みつける

「撃てえッ!!」

そこに突然の音が響くが早い、大量の銃声が響く

反射的に頭を庇った輪音の前にレクイエムとキャンドルが割り込み、弾丸の雨を弾く

「1非死者0号、非死者1号。その民間人から離れろ」

新たに現れたのは棺桶のマークが刻まれた青いプロテクターを纏う特殊部隊のよう
な姿をした一団

その先頭に立つ厳しい顔の青年がアサルトライフルを構えたままレクイエムとキャ
ンドルを睨む

「……埋葬部隊」

レクイエムが舌打ち混じりに一団を睨む

「あの研究所の事故から逃走した貴様らは討伐対象であると同時に情報源だ。今度こそ

部屋の隅の一角

ぼろぼろの暗幕のようなカーテンを垂らした隙間から顔を覗かせたキャンドルがニヤニヤと笑う

「元はといえば、お前が煽るからだろうが」

「煽るのは当然だろう？」

薄目を開けた十三の目前にはキャンドルのニヤけた顔があつた

机の上に膝を突き身を乗り出し、目と鼻の先まで顔を近づけたキャンドルの灰色の瞳が十三を反射する

「私は、「面白い」からお前と共にいてやってるんだ。お前が退屈なことばかりしているなら……」

チリン、と右耳のピアスを揺らす

「少しくらいは、目移りしてしまっても仕方ないだろう？」

妖艶な仕草からんべ、と舌を出しながらキャンドルが笑う

そのキャンドルから椅子を回して背を向け、十三が顎に手を当てる

「輪音ちゃんを巻き込んでしまったのはまずかった…というか、あのままだと間違いな

く埋葬部隊の取り調べ行きだ……」

無視されてつまらなそうな様子でキャンドルが髪先をいじる

「……巻き込んだ以上、説明は必要……か……」

十一宮 正義と名乗る青年に連れられ、待機していた特殊車両にまで招かれた輪音は内

部のコンテナ室ーキャンピングカーのようになった室内に待機させられていた

色々な計器類が並び、中には特殊部隊らしい人々が持っていたものと同じ武装やプロテクターなども並んでいる

「ごめんなさいね、彼顔怖かったでしょ」

不安そうに車内に視線を巡らせていた輪音に待機していた女性が声をかけてくる

先程の正義という青年よりも穏やかそうな様子で柔らかな印象を受ける垂れ目が眼鏡の奥から見えている

「顔が怖いは余計だ。九留美」

と、そこに正義が戻ってくる

「事実でしょ？あまり一般人の子を怖がらせちゃダメよ正義」

「……怖がらせているつもりはない」

正義が少しムツとした様子で九留美と呼ばれた女性に反論し、輪音に向き直る

「……不安がらせてしまったならすまない、改めて自己紹介をしよう。俺は十一宮^{とみや}正義^{せいぎ}。警視庁特務局『埋葬部隊』の行動隊長をやっている」

「埋葬部隊……警察の方だったんですね」

「ああ。尤も、パニックを避けるために極秘に活動している部隊ではあるがな」

正義は襟元を整えながら輪音^{りんね}の向かいのシートに座り、話を続ける

「我々の行動理念は先程の怪物……非死者^{ひししゃ}と呼称される存在の討伐だ」

「非死者……」

「半年ほど前、魂の物質化という研究を行なっていた研究所にてある発見があった……」

正義は懐から小さなカード型デバイスを取り出す

十三が持っていた黒いものよりも小ぶりなそのデバイスのスイッチを入れる

《イレブン：ジャステイス》

起動されたデバイス表面に心電図の波形が走り、白い炎が表示される

「それがこのアニマ……炎の形で物質化された魂の概念だ」

正義^{せいぎ}がデバイスをしまう

「その研究の途中、研究所で大きな事故が起こった……」

その表情を険しくさせ、拳を握りしめる

「その結果、白や黒とは異なる特異な状態になった《灰色のアニマ》を宿した怪物が生まれた。それがあの非死者……ノーワンたちだ」

その話を聞き、輪音が息を呑む

「ノーワンは死者であつて死者でなく、生者であつて生者でない。死んでいないから活動するし、生きていないから殺すことができない」

「そんな怪物が、事故で野に放たれた。戒厳令を敷いて一般市民には秘匿されているがな……」

正義がはあとため息混じりに告げ終わる

「殺すことができない……それならどうして、皆さんみたいな機関が？」
輪音の問いに正義が答える

「殺すことはできない。だが、『死に直させる』ことならできる。研究により生まれたのは何も怪物だけではなかったというわけだ」

正義は一つの弾倉を取り出して見せる

「アニマ干渉弾。着弾した対象のアニマに干渉波を撃ち込み、そのアニマの炎を掻き消

す特殊弾丸だ。アニマ研究の延長として生み出されていたこれのなら、ノーワンたちの灰色のアニマを消して消滅させることが可能になる」

弾倉をしまい正義が輪音を見据える

「……そう、ノーワンを……ひいてはヤツらを生み出すジヨンドウを葬り去るのは我々の仕事であり使命。だからこそ、勝手を許せぬこともある」

「一単刀直入に聞く。十輪音、お前はあの黒い怪人……非死者0号の関係者か、否か？」

「非死者……0号……」

一瞬間われた意味の理解が遅れる

すぐにそれが十三ー彼の変身した『レクイエム』のことだと理解し、輪音は思わず口を開く

「……あの、黒い人は……何者なんですか？」

正義はその問いにすぐ答える

「ヤツは、事故のあったその日……燃え盛る研究所で初めて確認されている。ジヨンドウと称される統率個体の2号ージャック・ランタンよりも早く」

目元からは溶けた蠟が涙のように溢れ出している

トーチはその様を見ながらため息で灰色の灯を揺らす

『心にも無いことで騒ぐな。貴様が同胞と認めるのは決まって我々ジョンドウの域に到達した者だけだろうが』

ランタンはスツと立ち上がると微かに肩を震わせる

『いやいや、悲しいのは事実だとも。いつ我々の友になるかわからないのがノーワンだからネエ』

ちーん、と鼻をかむような動作をするとポイツとハンカチを捨てて振り返る

『サア、気を取り直して今日も新鮮な死を探しにいこうカ!!?』

投げ捨てたハンカチは灰色の炎に包まれて燃え落ちた

輪音りんねはとぼとぼと1人道を歩いていた

埋葬部隊からの事情聴取が終わって解放された後、自宅まで送られてその後は疲れて眠ってしまった

バタバタで予定していた日取りから1日遅れてしまったが、輪音りんねはある場所に向かっていた

「えっと、棺ひつぎのみやノ宮総合病院は…あった、ここだ」

目的地である大きな病院―棺ひつぎのみやノ宮総合病院を見つけ輪音りんねが中央玄関から中に入り、受付で要件を伝えるとある病室を案内される

案内された病室を院内マップから見つけた輪音りんねは2階のその病室に向かいノックをして入る

「おはよう輪音りんね。無事に引越し終わったのね」

狭い病室の中、ベッドから体を起こした女性が輪音りんねを見て微笑む

「うん、色々あつて大変だったけどね…」

「こんな都会に来ることなんか初めてだもんね」

あはは、と朗らかに笑うその女性は十つなし 優香ゆうか。輪音りんねの母親だ

優香ゆうかは心臓の病を抱えており、長らく入院生活が続いていた

十家つなしの実家は所謂田舎に辺り近隣に医療設備が十分に無いため、この総合病院に入院する形になっているのだ

「でも本当によかったの？こっちに引越してきて」

「うん、大丈夫。ここの近くの学校の方が進学にも有利そうだから」

輪音りんねは高校受験にあたり、この総合病院近くの学校を受験していた

優香ゆうかに話した通りの理由が一番だが、やはり母のいる病院に通いやすくなるという理由も大きかった

「それはよかった。高校生活も元気だね。怪我とかしないように」

優しく告げる優香ゆうかに微笑みながらふと輪音りんねが表情を曇らせる

「？輪音？」

その表情の変化を見た優香ゆうかが首を傾げる

「どうかしたの？」

「…いや、ちよつとその…嘘、吐いちゃったというか…」

前日

「えつと…あの人のことは、よく知りません…通りがかった道で、出会っただけなので

…」

輪音りんねは正義せいぎの問いに咄嗟じゆざうにそう答えた

十三じゆうぞうやキャンドルと出会って間なんてなかった

でも、何故だか彼らの言うような事件の犯人だとはどうしても思えなかったのだ。

十三じゆうぞうやキャンドルのあの姿を見たとしても

あの場にいた自分を、埋葬部隊が放った弾丸から庇ってくれた2人の背中を思い出し

ながら、輪音りんねは「嘘」を答えた

「…そうか、わかった。協力感謝する」

新居であるアパートに足を運びながら十三たちのことを思い返す

『だから俺は、死を弔うと共に二度と死なさない為に墓守を続けてるんだ』

同時に埋葬部隊と い み や十一宮 正義せ い ぎの言葉も思い出す

『ノーワンを、ひいてはヤツらを生み出すジョンドウを葬り去るのは我らの仕事であり
使命』

『ヤツこそが非死者の生みの親と判断し、最優先撃破対象として追っている』

(私は、どうしたらよかったのかな……)

はあ、と輪音りんねが大きなため息を吐く

一般人の自分が考えても仕方のない話、そんなことはわかっている
でも、どうしても

考えるのをやめる気だけは起きなかった

キキイイイイッ!! ドンッ!!

突然の甲高いブレーキ音と鈍い衝撃音

ビクツと体を揺らしながら思わず輪音りんねが立ち止まる

目の前の道路で転がっていたのは横転した一台のバイクと倒れたドライバー

そして、頭から血を流し倒れた1人の女性だった

「た、大変!!?」

泡を食って輪音りんねはスマホを取り出し、救急に電話しようとしてロックを開いて―思わずその手を止めた

そこに、新たな怪人物が現れたからだ

「おかあさん…!!? おかあさん!!?」

頭から血を流し横たわる女性を、娘らしい少女が揺さぶる

『よ・よ・よ…:…なんたる悲劇!!? 最愛のお母様が死んでしまうなんて!!?』

そこに場違いな芝居がかった声が響く

少女は声の主人を、傍にどこからか現れた怪人を見上げた

『安心して、マドモアゼル。貴女のだーいすきなママは死なないと。ワタシがここに
来てラッキーだったねえ!!?』

怪人ージャック・ランタンは少女を錫杖で押し退けると倒れる彼女の母の胸元に錫杖
を当て、かき混ぜるように回す

「あ、あああ…ツッ?」

息絶えていたはずの母親の体がのけ反り、悲痛そうな声が漏れると共にその胸から灰
色の炎が飛び出し、母親の体を包み込む

「おかあさん!!?」

叫ぶ少女の目の前でそれは立ち上がり、炎の中から異形のシルエットを顕にする

砕けた骨や金属パーツを無理矢理に蟻で固めたような人型

頭部があるべき場所には骸骨が収まり、その眼窩には灰色の炎が揺らめいている

【アア、アアアアアアアアアア…!!?】

現れた怪人ートラフィック・ノーワンIIを目にした野次馬たちが悲鳴を上げ、蜘蛛の
子を散らすように逃げていく

『あーらら…この前のとほぼ同じノーワンになっちゃったかー。まあ交通事故死だから
当然かあ』

つまらなそうに錫杖で肩を叩きながらランタンがため息を吐く

「お、かあさん…!!?」

変わり果てた姿となり苦悶の声を上げる母親だったトラフィック・ノーワンIIを目にして腰を抜かしている少女を一瞥し、半壊したバイクのドライバーを見つけたランタンはヒラヒラと手を振る

『じゃあ、ワタシはもう一人も助けなきやだからバイ♪ 親子水入らずで楽しみたまえ』

離れていくランタンの代わりに歩み寄ってくるトラフィック・ノーワンIIに怯える少女に輪音が駆け寄り、その体を抱き上げる

「大丈夫、大丈夫だから…!!?」

少女に、そして自分に言い聞かせるように呟く輪音にトラフィック・ノーワンIIが迫る

「撃て!!?」

が、迫り来るトラフィック・ノーワンIIの体に輪音たちの後方から放たれた弾丸の雨が突き刺さり、トラフィック・ノーワンIIが僅かに退く

輪音たちの後方から現れた武装した特殊部隊―埋葬部隊が2人の前に並び立ち、トラフィック・ノーワンIIに機関銃を向ける

「つくづく巻き込まれて体質だなキミは…」

部隊の指揮をしていた1人が振り返る

「正義せいぎさん…!!?」

【アアアアアアアアアアアア!!】

トラフィック・ノーワンIIは腕を振り回し、鎖に繋がれた金属塊を投げつける

部隊員たちは金属製の盾を構えて並び立ち、その金属塊の一撃を危なげなく受け止め弾く

「対象非死者1名、攻撃開始!!?」

正義せいぎの命令に従い部隊員たちが機関銃を構え直し、アニマ干涉弾を乱れ撃つ

トラフィック・ノーワンIIの体にアニマ干涉弾が直撃し、白いスパークを放出していく

【アアアアアアアア…!!?】

苦悶の声を上げてもがいていたトラフィック・ノーワンIIは膝からくずおれ、灰を散らすようにぼろぼろと崩れ去る

(倒した…!!? 本当に倒せるんだ…)

「埋葬完了」

正義せいぎの言葉と共に機関銃を下げる隊員たち

『あー………ツ!?ちよつとちよつとなーにしてくれちやつてんのせつかくワタシが救つてあげた命にイ!!?』

その場から離れていたランタンがトラフィック・ノーワンIIの撃破に気づき抗議の声を上げる

「非死者2号……!!?」

『だっさー……その名前やめてヨ。ワタシにはジャック・ランタンって名前があるんだからサあ〜』

「ふざけるな。化け物が……!!?」

部隊員が再び機関銃を構えるのをつまらなそうに眺めるランタンの背後から新たな灰色の炎が立ち上がる

【アアアアアア!!!アチイイイイ!!!】

新たに現れたのはバラバラになったバイクのパーツを無理矢理蠟で繋ぎ合わせ人型にしたような怪人

両腕と脚先にはタイヤも備わっている

【オレ、は……まだ死ニたくねエ……マだ、走り足りネえ!!】

バイク怪人は右肩から伸びたマフラーパーツから灰色の炎を噴き上げ、叫びながら腕を振り回し刃りに手当たり次第灰色の火炎弾をぶち撒ける

『おおいねエ、バイク・ノーワン♪ 一人轢き殺しといてまだ走りたいから生きたいとかア、めつちや生き汚くてトレビアン♪』

「意識を保っている…フェーズか?!？」

正義たちが構え直す前でバイク・ノーワンは体をバキボキと変形させ、手の生えた歪な形状のバイクとなる

【走り、足りねエエエ!!】

バイク・ノーワンはそのまま爆走し、道路に灰色の炎を轍として残しながら走り去っていく

『ま、そういうことでご機嫌よう、埋葬部隊の諸君♪』

ランタンはヒラヒラと手を振ると錫杖の先を地面に叩きつけ、その姿を消す

正義は舌打ちすると共に部隊員に指示を下す

「フェーズ・非死者が逃亡中!!? そちらの対処を優先する!!?」

部隊員たちが近くに停めていた装甲車に乗り込む中、携帯端末で何かを入力した正義は輪音を見下ろしながら告げる

「その少女は一旦頼む」

「へ、あ、はい!?」

思わず返事をした輪音りんねに頷くと、どこからか走ってきた大型の白バイに正義が跨り、エンジンを吹かしてバイク・ノーワンを追跡。装甲車もそれに続き輪音りんねと少女が残される

「えつと…大丈夫? 怪我とかはない?」

近くの公園まで避難した輪音りんねが少女をベンチに座らせ、肩をさすりながら問う

何故かぼーっとしていた少女は気がついたように隣に座る輪音りんねを見上げ、首を傾げる

「……お姉ちゃん、誰?」

「あ、えつと私は…そう!!? あなたのお母さんが事故で怪我しちゃって、今お医者さんたちが見てるから、付き添いというか…」

事実を伝えるわけにもいかず、言葉をなんとか取り繕って伝える輪音りんね

そんな彼女を見上げる少女はさらに首を傾げながら問う

「ーおかあさん、って…誰?」

「……………え?」

少女の予想外の問いに間の抜けた声が漏れる

「……いや、お母さんはお母さんだよ？さつきまで一緒に……」

「……そんな人知らないよ？」

少女の顔を見て輪音は血の気が引くのを覚えた

先程、母親に泣き縋り懸命に母を呼んでいた少女

そんな少女の顔に、今は涙の一つも無いのだ

まるで悲しいことなんて、なかったかのよう

「なん、で……!?？」

「それが埋葬部隊のやり方の代償ってワケさ」

カツカツと響くヒールの音に気がつく

輪音の前に現れたのは、キャンドルだった

「代償……？」

「アニメ干涉弾でノーワンのアニメを破壊する。それは即ち混ざり合って曖昧になった生のアニメと死のアニメをまとめて揉み消しているに等しい」

続けて現れた十三じゅうさんが告げながら少女の頭を撫でる

「それはつまり、ノーワンだった人間が『生きた証明』もまとめて消してしまおうということ。埋葬部隊が葬ったノーワンに一般人が気づかないには、あまりにも便利な『代償』」

十三は公園の外に停めていた自身のバイクーグレイブスターに跨る

「待つて…!!?じゃあ、あなたがノーワンを倒しても…!!?」

十三はヘルメット越しに輪音をまつすぐ見据える

「そうならない為に、俺がいる」

「え…?」

「俺は誰も死に直させない。正しく弔い、その死に白黒付ける」

「それが俺の、『鎮魂歌』の意味だ」

十三はヘルメットのバイザーを下ろし、バイクを走らせる

それを輪音はただ見送るしかなかった



「走ル、走る、走るウウウウウウ!!!」

灰色の炎を噴き上げながらバイク・ノーワンは駆け、道路を走る一般車両を吹き飛ばしていく

撒き散らす火の弾に埋葬部隊の車両も思うように近づけない
そのさらに後方に十三は追いついていた

デスサイズドライバーギロチンを腰に巻き、アニマルカナを取り出して起動する

《サーティーン：デス》

ドライバーにアニマルカナを装填し、右親指を下に向けて自身の首をなぞるよう
に、祈りを捧げるように横に引く

「変身」

デスサイズドライバーギロチンのレバーを親指で下ろす

《エクスキュージョン・アップ》

《リバース・デス》

十三の首元にギロチン台が現れ、その首に刃を下ろす

落ちた首を右手でキャッチすると共に首が黒い炎に包まれ、首元から漏れた黒い炎が
全身を包み漆黒のコートを纏うような怪人に変質させる

落ちた首をヘルメットを被るように戻し、バイザーを下ろすようになると髑髏型の仮面が出現しつつギロチン型のバイザーが下りる

ブオンツ!!

激しいエンジンのいななきと共に十三一仮面ライダーレクイエムが大ジャンプし、埋葬部隊の車両を飛び越す

「な、非死者0号!?!」

驚く正義にレクイエムは手を振る

「お先に失礼」

レクイエムはベルトのスロットから鈍い銀に輝くライターを取り出し、蓋を開くとそのイグナイターを指で擦り上げる

《イグニツション：デス》

ガイド音声が流れたライターアニマライターをバイクの後方に放り投げると路面とイグナイターが擦過し、黒い炎を大きく噴き上げながらライター自体が巨大化する

巨大化したライターは空中で分解され、バイクの後部座席に突き刺さり、新たなエン

ジンとマフラーユニットに変形して黒い大きな炎を噴き上げる

ハンドルを引き絞ると同時に黒炎が更に噴き上がり、超加速したバイクが疾駆する

【アアアアアア!?!】

バイク・ノーワンは後方から接近する黒いバイクに気づき、早速火炎弾での反撃に移る

レクイエムはその火炎弾を見切り、スピードを落とさずにその火炎弾を回避しながらバイクノーワンに迫っていく

ベルトからもう一つ金のアニマライターを取り出したレクイエムはイグナイターに指を押し当て擦り、黒い炎を点火すると並走するバイク・ノーワンに振りかぶり薙ぎ払う

黒い炎の斬撃がバイク・ノーワンを捉え、その車体のバランスを大きく崩壊させる

【ガアアアア!!】

バイク・ノーワンは腕をレクイエムに伸ばし、掴もうとするがバイクを起点にした回し蹴りで払われ、返す刀の蹴りで吹き飛ばされる

【グウアアアア!!?!】

バランスを崩したバイク・ノーワンが大きく滑りながら怪人形態に戻っていく

「ーまだまだ走りたいたか。だがお前のツアーはここで終わりだ」
「罪も死も、ここで白黒付けてやる」

目前に転がり出たバイク・ノーワンを捉え、レクイエムがシートの上に直立して踵を打ち合わせると、エンジン部分と合体したライターの点火部が回転して直立する

ドライバーのレバーを3回下ろし、引いた片足を巨大化したイグナイターにかけ、引き絞る

バイクが黒い炎に包まれ、フロントに炎のギロチン刃が形成される

「ー俺の名はレクイエム。お前の『鎮魂歌』だ」

《ラスト・エクスキューション》

レクイエムが跳躍

「はあああああああああッ!!!」

バイク・ノーワンに炎を纏う右脚での飛び蹴りをぶち当てる

直撃と共にバイク・ノーワンの体を黒い炎が包み、その体を固定

「俺が使うこのカーデスサイズシステムはジョンドウによってかき混ぜられたアニマを断裁して正しく生を残して死を与える。六美^{むつみ}：俺の知り合いが作り出したアニマを使うシステムの、ある意味でのセーフティだ」

ある墓石の前にしやがみ込みながら十三^{じゅうぞう}が告げる

隣にしやがむ輪音はそれを静かに聞いていた

「…あのバイクの人は…」

「ちゃんと死ねたよ。俺が見届けた」

十三^{じゅうぞう}の答えを聞いて輪音^{りんね}は俯く

「でも、あの子のお母さんは…」

あの後少女は埋葬部隊に保護された

不思議な顔をしたまま連れていかれる少女の様子を見た輪音^{りんね}は、胸が張り裂けそうなほどに悲しかった

「……たしかに彼女がどう生きていたか覚えている人はいなくなった。でも、彼女がいたことは俺たちが覚えて残していける」

十三^{じゅうぞう}は目の前の墓石を撫でる

他の墓石とは違う、昨日の日付だけ掘られた墓石

名前すら聞けずに消えてしまった、一人の母親の墓標

並んだ輪音りんねもそれを見据え頷く

「俺が『レクイエム』である理由だ。二度と誰も、『二度目の死』に至らせない。俺が絶
対忘れさせないし、俺は絶対忘れない」

「俺はその為に、戦い続ける」

その手に握るアニマルカナを握りしめながら十三じゅうぞうは呟いた

「ククク、お前も大概悪人じゃないか十三じゅうぞう」

木に寄りかかり2人を遠巻きに眺めながらキャンドルが笑う

「レクイエムである理由が『二度目の死』に至らせないこと、ねえ。とんだ大嘘を吐く」

コートのポケットから取り出したものを弄び、日光に翳しながらキャンドルは目を細
める

「忘れたなんて言わせないぞ、十三じゅうぞう。お前がその死神の鎌を取った理由はそんなありき
たりな正義じゃない」

逆さに翳したアニマルカナはひび割れ、普段は暗転しているはずのディスプレイに
絵柄が表示されたままだった

描かれた絵柄は―6番《恋人》ラブ・ス

「お前は、愛しい恋人―誘波いざなみ 六美むつみを殺すことが目的だろうか？」

「この、私を―」

第3話 「15の逆位置：くくり様の裁くもの」

ひつぎのみや
棺ノ宮中央学園

夕闇がさす廊下を気怠げにスマホを弄りながら女子生徒が歩く
ふと、ゴムが焼けるような鼻を突く臭いを感じた生徒は顔をしかめ、辺りを見回す

【網代^{あじろ} 佳奈^{かな} お前は罪人だ】

突如響く声に生徒―網代^{あじろ} 佳奈^{かな}が振り向き、驚きながら尻餅をつく

彼女に歩み寄ってきていたのは異形の怪人

ドロドロに溶けた蠟を固めたようなあちこちに縄が絡まったような造形の大柄な胴体。そこから伸びる腕はしめ縄のような太い布が螺旋に絡まりゴリラの腕のような歪な大腕を形成している

「何…!!? なんなのよあんたア!!?」

【お前は生きるに値しない。罰を受けろ!!?】

怪人が腕を振るうと、そこから解けた縄が一本佳奈^{かな}の方に伸び、その細い首にきつく

巻きつく

「か、あ……!!?」

首が絞まる苦しみにもがく佳奈を気にも留めず、怪人はその縄を担ぎ引きずっていく

「あ……!!? た、す……け……!!?」

助けを求めもがく

手を伸ばすがどこにも届かない

怪人が引き摺っていった先は校庭の隅に立つ一本の木

怪人は佳奈を牽引する腕を木に向かつて振り、佳奈ごと軽々と縄を振り回して木の枝に縄を絡ませ、強く引く

「ひ、があ……あ……!!?」

首吊りの形となった佳奈の首がギリギリと締まり、喉から空気が漏れる

バタバタと脚を動かし、首に巻き付いた縄を引つ掻き足掻くが、縄は解ける気配は無い

【死ぬまで噛みしめろ……それがお前の……】

言いかけた怪人が何かに気づき振り返りざまに腕を振るい、飛来してきた黒炎の刃を

払う

「そこまでだ、ノーワン!!?」

目前に現れていたのは黒い炎をマフラーのように揺らめかせる骸骨のマスクを被る黒い怪人ー仮面ライダーレクイエムだった

レクイエムは怪人の背後で木から吊り下げられバタバタともがく女子生徒を確認し、手にしたアニマライターを構え直して駆ける

ノーワンを避け、生徒の方に駆けるレクイエムの脚にノーワンが放った縄が絡まり、転倒させられる

「くっ!?!」

レクイエムを手繰り寄せながらノーワンは叫ぶ

【行かせるか…!!?あの女への罰の邪魔はさせない!!?】

「明確な意志が残っている…!!?フェーズ2ノーワンか…!!?」

体を捻りながらアニマライターから伸ばした黒炎で縄を焼き切り離脱すると、ノーワンを蹴りながら跳躍して身を翻し構え直す

『バーンッ!!?』

そこにどこからか響いた声と共に爆発が発生、レクイエムは思わず顔を覆う

『アツハハア♪ご機嫌よう、レクイエム』

カツカツとヒールを鳴らしながら現れたのは溶けた灰色の蝋をドレスのように纏い、その上からシャンデリアのような金属装飾を纏う怪人

その手には灰色の巻物が握られている

「シャンデリア…!!?」

『あら?あたしのごとご存知なんて嬉しいわね。まあ、仲良くする気は無いけどツ!!?』
シャンデリアが巻物を振り抜き、広がったそれを鞭のようにしならせてレクイエムへと叩きつける

いくつかは回避するが、何度かの鞭撃が直撃し甲高い鞭音を鳴らしながらレクイエムを後退させる

「ぐっ!!?」

『ほらほらほらほら!!?もつと踊ってみなさい!!?』

シャンデリアが巻物を掴み、頭上にアーチ状に広げるとそこから浮かび上がった文字や符号が灰色の炎を帯び、弾丸のようになってレクイエムへと降り注ぐ

「…ツぐ、くひい……ツ」

1ーBの教室に着いた輪音りんねはがやがやと他の生徒が騒ぐ中、窓際の自分の席を見つけると腰を下ろして周囲を見やる

中学も同じだったのか、それとも友達作りが上手いのか多くの生徒が各々グループを作ったり集まったりして談笑している中、上京してきたばかりの輪音りんねはどこかまだ馴染めずにいた

(急ぐことでもないけど……誰とも喋る相手がいなのはなんだか落ち着かないなあ……)

上京してから数日ほど、十三じゅうぞうたちや埋葬機まいそうきかん関の人たちを知り、騒動に巻き込まれていた期間が今では少しありがたく思えてしまう

そうこうしているうちに担任の先生が教室に入ってきて入学式後の簡単なオリエンテーションが始まる

当たり障りない連絡を聞きながらふと窓の外に視線を移す

「……あれ？」

と、窓の外ー校庭を一人歩く人影を見つけ、それが見知った姿に見えて思わず注視する

風に靡く黒色のポニーテール、覗く右耳にぶら下がる独特な炎の意匠のピアス。見間違うような見た目でもない

(あれって……キャンドルさん!??)

ぎよっと見つめているうちにホームルームが終わったらしく、起立の号令に輪音が慌てて立ち上がる

もう一度視線を向けたがそこにはもうキャンドルらしい人物の姿はなかった

オリエンテーションの後はずぐに下校となり、輪音も荷物を纏めて教室を出る

早く下校するように、とは言われていたが気になっていたことがあった。輪音は昇降口に足を向けずに学校内を探索し始める

(……さっきの、キャンドルさんならなんでこんな所に……)

「……………(ハ)、(ど)ハ(…?)」

当然のように迷子になった

登校初日の学校。立地や建物の構造なんてわかりようがなかったのになんとも無謀なことをしてしまった…と頭を抱える輪音

「どうしよう…早いところ昇降口を探さなきゃ…」

ひとまず手近な案内板を探して廊下に行く

ふと、校庭の隅に人だかりができていることに気づく

(なんだろう、あれ……?)

窓の側に歩み寄って人だかりの方を眺める

「誰か自殺したらしいよ。警察の人とか取り調べしてる最中だったはず。人だかりは物珍しい見物人とかだね」

側からかけられた声に気づき振り向く

いつの間に現れたのかそこには一人の長身な女子生徒が立っていた

「自殺……?」

告げられた恐ろしい事実には驚き、側に現れた驚きを忘れ声が漏れる

「あれ? HRとかで言われなかった? 新入生とかも連絡されると思うけど……早く下校するように言われてなかった?」

「あー……………」

ぱしつ、と頭を叩く

キャンドルのような人物を見たことでぼーっとしていて話を聞いてなかったのだ

「そういう理由だったんですね……」

「まあ、自殺するような子じゃなかったから事件性を疑われてるみたいだけだね。だから全校生徒早下校」

短く纏めたポニーテールを揺らし、こちらに向き直って女子生徒がニツと悪戯っぽく笑う

「そんな時に学校にまだ残ってるボクたちは随分と悪いことしてるって感じだねえ」

「あ…!? いや、えつと私はその…道に迷って…!?」

女子生徒がぷつと吹き出す

「ごめんごめん、意地悪な言い方しちゃったね。どこに行きたいのかな？」

「とりあえず昇降口はここからどう行ったら…」

「昇降口ね。1年と2、3年で別だからわかりづらいよね。こっちだよ」

案内に従ってたどり着いた昇降口は案外近い位置にあった

「こんな近くだったなんて…」

「まあ初登校だと迷いやすいよ。うち結構デカイ学校だし」

案内してくれた先輩に頭を下げているとぼたぼたと新たな足音が聞こえてきた

「御津里さん、今日は早く下校しないとダメだよ」

「あ、いやその…ちよつと気になる本探してて…」

御津里と呼ばれた先輩にかけられた声に聞き覚えを感じて輪音が振り返る

「キミも今日は早く…って!?」

「え、十三さん!？」

なんとそこに立っていたのは平坂ひらさか 十三じゅうぞう。あの霊園の管理人であり、仮面ライダーレクイエムでもあるあの人だった

「…え、まさかヒラさんと知り合い…?」

「ヒラさん…?」

御津里みつりが驚いたように目を丸くする

十三じゅうぞうが頬を掻きながら答える

「知り合いというか…一昨日くらいに知り合ったばかりだけどね。俺の管理してる霊園に迷い込んで」

「うわ、まさかの偶然…!??こんなことあるんだ…」

驚いたまま固まっていた輪音りんねに御津里みつりが手を差し出す

「ボク、御津里みつり 鼎かなえ 2年生で、ヒラさんが顧問やってる部活の部長。よろしくね、えーつと…」

「あ、私は、十つなし 輪音りんねです」

慌つなしてて輪音りんねが鼎かなえの手を取る

「十つなしさん…珍しい苗字だね。よろしく〜」

にこやかに手を握ると鼎かなえが思い出したようにチラシのようなものを取り出して輪音りんね

に渡す

「これ、ボクらの部活の紹介。今日配るつもりだったんだけど早帰りになっちゃって…興味あつたら来てね」

チラシを輪音りんねに渡すと鼎かなえは2人から離れる

「じゃあ、流石に私も帰るよ。またね十つなさん、ヒラさん!!?」

「気をつけて帰りなよ、御津里みつりさん」

鼎かなえを見送った十三じゅうぞうは輪音りんねに振り返る

「十三じゅうぞうさん、この学校の教師だったんですか…!!?」

「いや、流石に霊園の管理人と兼職はできないよ。俺は外部委託で頼まれてる部活の顧

問もんだけやってる臨時講師みたいなものだよ」

輪音りんねが思い出したようにチラシを見る

そこには鮮やかなフォントで「描きたいならうちで!!?」とだけ書かれた思っていた

よりもシンプルなチラシがあつた

「……えっと、何部なんですか?」

チラシを覗き込んだ十三じゅうぞうが頭を抱える

「……全く…ちゃんとした募集しないから部員が増えないってあんだけ言ってるのに…」

多数のモニターが並ぶ部屋

正義せいぎがコンソール前に座る一人ー隠岐津おきつ 九留美くるみに声をかける

「見つからないわ。昨日の深夜に活性化反応があったのだけど…」

「……これだけ見つからないということとは…」

「じ、十中八九…フェーズ2に覚醒した個体…だとお、思われます」

ボソボソと呟きながら新たな人物が現れる

ボサボサの髪の毛の隙間から丸い眼鏡をかけた顔が辛うじて伺える白衣を纏うその人物はタブレットの情報をチェックしながらおどおどと正義せいぎたちの間に視線を泳がせる

「プロフェッサー・ジュナ…貴女もそうお考えですか」

「あ、あ、アニマの異常反応が…なくなったり、あ、現れたりを繰り返すなんて…いい、意志の薄いフェーズ1以下では…ふ、不可能ですから……」

ジュナの言葉に正義せいぎが眉根を寄せる

「プロフェッサー。開発中のアレはまだ出来上がらないのですか？」

正義せいぎの問いにジュナはタブレットから視線を動かすことなくボソボソと答える

「ま、まだ、まだまだ不完全で、す…ライブアクティブシステムの、せ、せ、制御がまだあ、安定しなくて…です…」

「………そうですか」

げていたものがあることに気づく

「首吊り自殺だったらしいよ、その生徒」

同じく木を見上げていた男子生徒が口を開く

おとなしそうでどこにでもいる平凡な雰囲気男子生徒だ

「何でも、誰かをいじめていたことを後悔して死んだとか」

男子生徒はそれだけ告げると興味を失ったかのように木から離れていく

「いい気味だよ。本当に」

小声で男子生徒が漏らした言葉に輪音りんねが首を傾げているとその背中が軽く叩かれる

「やあ、輪音ちゃん」

「キャンドルさん!」

そこに現れていたのは黒色のポニーテールを揺らす白衣を羽織った女性―窓から見

たキャンドルらしい女性だった

「んー?よくわかったわね。髪色も違うのに」

悪戯つぼく笑いながらキャンドルがポニーテールに纏めた髪に指を通していくと、黒

かった髪色が以前見たものと同じ灰色に変わっていく

「いや…ピアスとか独特でしたし…そんな気はして」

「あーなるほどね」

チン、と右耳のピアスを鳴らして頷く

「キャンドルさんは、ここで一体何をー」

キャンドルが輪音りんねの口に人差し指を当てる

「ーここではその名前はだーめ。誘波いざなみ 六黒むくろ、って呼んで」

「む、六黒さん……」

キャンドルはニマツと笑うと纏う白衣を広げて見せる

「私はこの保険医ってヤツ。医師免許なら、生前持ってたし技能はここにあるから、ちやうど良く入れたワケ」

トントンとこめかみをつつく

「生前……やっぱりキャンドルさー六黒むくろさんは……」

「そうよ？ 私はジヨンドウ。前に見たランタンとかと同じ、ノーワンを生み出す『非死者』ってヤツよ」

ベーっと舌を出しながら答える

その灰色の瞳を見据える

「まあ化け物だけど、ランタンとかみたいに人間に手は出さないわよ。つまらないし」

「ジヨンドウは……なんで人間をノーワンにするんですか？」

「そりゃあ、お裾分けでしょ。不死の力の幸福のお裾分け」

キャンドルの言葉に輪音^{りんね}が息を呑む

「まあ、大体がただの死の苦しみを繰り返すゾンビになるんだけどもねえ、残念ながら」
幽霊のように手を垂らしておどけてみせる

「……でも、意識がすっかり残ったままノーワンになるヤツもいる。生きてる時の執念とか、そういうもんをそのまま持ち越すヤツらね」

「そんなノーワンもいるんですか……?!？」

キャンドルは事件現場となった木を見上げる

「今回ののは正にそういう、面倒なタイプって感じねえ」

廃墟の中、大柄な人影が揺らりと現れ腰を下ろす

灰色の髪を短く刈り上げた大男はつまらなそうに手にした鉄パイプを弄ぶ

「〜♪」

その向かいの瓦礫の山に腰掛けた灰色の長い髪を持つ小柄な少女が鼻歌混じりに爪を弄っている

「……随分と余裕な様子だな。シャンデリア」

少女ージャクリーン・シャンデリアはニマツと笑う

「もちろん。今回のノーワンはあたしのお気に入り。とーつてもイカした死から生み出

したかわいい子ちゃんだもの」

「……イカした死、か。相変わらず貴様の美学は分からん」

シャンデリアが立ち上がり、フフンと鼻を鳴らす

「頭でつかちのトーチには分からなくていいわよ。わかってもらう必要も無いし」

男一ジャック・トーチを見下ろしながら啞う

「ランタンみたいな無策じゃない。意志とクールさがある死からしかあたしはノーワンを作らない。だって、この力は選ばれた者に与えられるべきでしょう?」

カーテシーのようにスカート裾をつまみ上げて首を傾げるシャンデリアの胸元に灰色のアニマアルカナに似たカードが炎の中から現れ、胸元に入り込む

《ツー：ハイプリエステス》

少女の姿だったシャンデリアの体が灰色の炎に包まれ、ジヨンドウたる怪人の姿へと変貌する

『まあ見てなさいな。ハング・ノーワンはただイカす死を振りまくだけじゃないのよ』

上機嫌に手を振りながらシャンデリアがトーチの前から姿を消した



棺ひつぎのみやノ宮中央学園

その裏手にある雑木林のある木の下

木に何かを括りつけ、眼鏡をかけた女子生徒は手を合わせる

「くくり様、くくり様…どうか、どうかお願いします…」

「あいつに…羽柴はしば 悠美ゆみに罰をお与えください…!!？」

怨嗟のこもった声が響く

その目で、木からぶら下がったロープが揺れていた

その先に「羽柴はしば 悠美ゆみ」と名前が書かれたぬいぐるみが揺れていた

「くくり様という棺ひつぎのみやノ宮中央学園の七不思議があるんだ」

「くくり様…？」

キャンドルに送ってもらう道すがら、キャンドルは突然そんなことを輪音りんねに告げる

「七不思議と言っても最近になって生徒たちの間で流行りだした話ではあるがねえ」

やれやれと肩を竦めながらキャンドルは続ける

「罰して欲しい相手の名前を書いて、ぬいぐるみをロープで木から吊るして『くくり様お

願います』と呟いたらくくり様が罰してくれる」

「その相手に、首吊り自殺をさせることで」

首に指を当てながら舌を出すキャンドルの言葉に輪音は血の気が引いていくのを感じた

「それって……!?？」

「ヒビ、呪いなんてものはありはしないよ輪音ちゃん。実際、そんなわかりやすい儀式の跡が残るはずなのにそんなものは学園内で見つかって無い」

「……それなら……」

スツと、キャンドルの瞳が細められる

「―あるのは事実としての死。それだけさ」

その言葉に輪音の頬を冷や汗が伝う

「何も死の形は一つじゃない。よくあるように生命活動が停止するだけが死じゃないの
ヤ」

キャンドルがふと足を止め、隣の輪音を制止する

「―珍しい客人だね」

その目前にいつの間にか眼鏡をかけた細身の男が立っていることによろやく輪音も
 気づく

ニヤニヤと笑みを浮かべた灰色の髪の男

キャンドルのものにも似た着古した白衣を羽織っている

「キヒヒ、久しぶりだネエ〜キャンドル♪」

「ああ、久しぶりだな。ランタン」

キャンドルが告げた名に輪音は驚く

男ージャック・ランタンは肩を震わせながら笑うと両手を広げ、目を見開く

それに合わせてその胸元に灰色のアルカナが現れ、炎と共にその身に吸い込まれる

《ゼロ：ザ・フール》

男の姿が灰色の炎に飲み込まれ、のっぼな怪人ージャック・ランタンの姿へと変貌す
 る

『キヒヒ♪ 今はシャンデリアのターンで少し暇してるんだア』

ランタンは錫杖を振り回しながらキャンドルに杖先を向ける

『ーシヤル・ウィ・ダァンス…？』

佳奈が自殺なんてあり得ない。そんな理由ないのだから

『自殺』の理由などなくても

『殺される』理由ならー

【一羽柴 悠美】

ひつ、と足がもつれながらも立ち止まる

目前に巨大な両腕を垂らす怪人ーハング・ノーワンが現れたのだ

【お前は罪人だ…生きるに値しない】

巨大な腕からロープを伸ばし、もう片方の腕で掴みパシンツ!!?と音を鳴らしてロープを張る

「な、なんなんだよ…!!?なんで、なんで殺されなきゃならないんだよ!!?謝るから、あいつには謝るから…!!?」

悠美の言葉にハング・ノーワンはロープをギリリと握りしめる

【謝る…?それで済むと思うのか…ツ!!?】

ハング・ノーワンはジリジリと悠美に迫り、逃げ出した悠美の足がもつれて倒れ伏す
【お前の罪は、死によってしか贖えない】

【苦しみ抜いて、罪を悔いながら、死ねッ!!】

ハング・ノーワンはロープを打ち鳴らしながら悠美に放つ
ーブルンツ!!

放たれたロープが悠美の前に走り込んできた黒いバイクの後輪に弾かれ、ハング・ノーワンの手元に戻る

悠美の前に現れたバイクに跨る男一十三はバイザーを上げてハング・ノーワンを睨みながら悠美に告げる

「逃げる!!?」

悠美はパニックになりながらも這う這うの体で逃亡する

「キャンドルのやつめ…!!? どういうつもりだ!!?」

【お前…!!?】

ハング・ノーワンにバイクを向けながら十三はデスサイズドライバークロチンを腰に巻き、アニマアルカナを起動する

《サーティーン：デス》

デスサイズドライバークロチンにアルカナをはめ、下に向けた右親指を首の前で祈る

ように引く

「変身!!?」

《エクスキューション・アップ》

《リバース・デス》

十三の姿じゅうぞうが黒い炎に包まれ、現れたギロチンで落ちた首を戻すと共にその姿が仮面ライ
ダーレクイエムに変わる

「ーお前の死も生も、ここで白黒きつちり終わらせる!!?」

「黙れ!!?まだ終われない!!?終わるわけにはいかない!!?」

ハング・ノーワンが振り回すロープを逆ワイリーしながら回転して弾くと、ハンドル
を引き絞りエンジンを吹かす

ーブオンツ!!

嘶いななくくグレイブスターは黒い炎を噴き上げながらハング・ノーワンに突進する

それを見たハング・ノーワンが巨腕を振り上げる

ーその腕が更に巨大化する

ーガギユイイインツ!!!

「何ッ!?!」

レクイエムが驚愕の声を上げる

レクイエムのグレイブスターによる突進

それをハング・ノーワンは真正面から受け止めていたのだ

膨張し、血管が筋繊維のように脈動するロープが蠢く巨腕が前輪を挟み込み、金属音と焦げた擦過臭を振り撒いている

「アアアアアアアアアアアア!!」

ハング・ノーワンは力任せに前輪を持ち上げ、バイクごとレクイエムを持ち上げるとそのまま振り回し、大通りのガードレールへと放り投げる

「かはッ…!?!」

グレイブスターごとガードレールに叩きつけられ、ガードレールをひしゃげさせながらレクイエムが呻く

バイクをどかし、よろめきながら立ち上がるレクイエムに突撃してきたハング・ノーワンの巨腕に咄嗟に受け身を取るレクイエムだがその一撃は凄まじいパワーでレクイ

エムのスーツに火花を散らしよろめかせ、更にもう一撃はその体を浮かび上がらせる

【邪魔をするなあ!!!】

ハング・ノーワンの拳が浮かんだレクイエムを捉え、大きく吹き飛ばす

「かはっ!!」

乗り捨てられた車に叩きつけられ、レクイエムがのけぞる

「くっ…そ…っ!?? なんて力だ…!??」

『キャハハハ!!? クールでしょう? ハングのパワー』

逃げ回る人々を見下ろしながらそこらの車のボンネットに腰掛け、シャンデリアがからからと笑う

『あたしが選んだサイコーの死から生まれたのだもの。あんたが倒してきたランタンの雑魚とはワケが違うのよ♪』

ハング・ノーワンの拳をいくつかくらいながらもなんとか受け身を取りながら身を翻すレクイエムだが、そのダメージの前に膝を突く

【邪魔をするお前も罪人…死の裁きを…!!?】

「……そんなのはごめんだ」

レクイエムは迫るハング・ノーワンを睨みながら一枚のアニマアルカナを取り出す

先日

平坂霊園にて

「これをお前に渡しておこう」

墓地の清掃をしていた十三にキャンドルが一枚のアニマアルカナを手渡す

「……アニマアルカナ？」

「レクイエムの機能拡張用のアニマアルカナだ。ランタンどもが作り出すノーワンも、次第に手強くなるだろうからな」

カカツと笑うキャンドルを睨みながら十三はアルカナを受け取り、黒いディスプレイを覗き込む

「ただ、そのアルカナは恐らくそのままでは使えんぞ」

「…何だと？」

「アニマアルカナは持ち主自身のアニマに共鳴して起動する」

キャンドルが十三の胸に人差し指を当て笑う

「お前の内の内をよく見なければ、アルカナは微笑まない」

キャンドルの発言を思い出しながらもレクイエムは起動ボタンに指をかける

「知ったことか…!!?」

レクイエムがボタンを押し込む

が、アニマアルカナの起動音は鳴らなかった

ディスプレイにも変化は無い

「何…ツ!?!」

驚愕するレクイエムにハング・ノーワンのパンチが突き刺さり、その体を吹き飛ばす

苛立たしげに何度もボタンを押すがアルカナは反応しない

【消えろオオ!!】

「くっ!?!」

振り回された巨腕を受け止めたレクイエムにもう片方の拳が何度も叩きつけられる

あまりのダメージによるめくレクイエムを、ハング・ノーワンのアツパーが打ち上げ

た

「ぐあああああああッ!!!」

第4話 「15の逆位置：『悪魔』の証明」

ハング・ノーワンの拳の一撃で吹き飛ばされたレクイエムが地面に叩きつけられ思わず仰反る

「コレで終わりだアアアアアア!!!」

ハング・ノーワンが両腕を解き、一つに纏めて巨大な拳を作り出す

振り下ろされんとするそれを見上げたレクイエムはなんとか懐から取り出したスマホ端末を起動し、画面に指を走らせる

ーブオンツ!!!

ガードレールにめり込んだまま動きを止めていたグレイブースターのエンジンが再点火し、ハング・ノーワンに突進し、何度もその車体をぶつける

「ぐっ、くっ、このオオ!!!」

グレイブースターの攻撃にハング・ノーワンが気を取られた隙を見てレクイエムはよろよろと立ち上がり、手にしたアニマライターを点火して黒炎の弾丸を周囲に放つ

たまらず腕を戻して防御したハング・ノーワンが視界を取り戻すと、そこにはグレイブースターもレクイエムもいなかった

び上がるアルカナが灰色の炎に包まれる

《シックス：ラバーズ》

アルカナが胸に沈み込むと共にキャンドルの姿が怪人のもに変貌する

『キヒヒ♪ そのお嬢さん、この前からずーつと一緒だネエ』

ランタンが不気味に微笑んだかと思うと瞬間、輪音りんねの目前に姿を現し思わず息を呑む

『ーキミをノーワンにしたらア…十三じゅうぞうやキャンドルはどんな顔するかなあ…？』

「あ、あー」

伸ばされる手を前に震えることしかできない輪音りんね

が、その細指が届く前にランタンの腕は掴まれ、捻り上げられる

『ー私の愉しみに、手を出すな…!!？ 《愚者フール》!!』

今までに聞いたことのない底冷えのする声がランタンに浴びせられる

ランタンは体をぐねぐねと動かし脱出するとやれやれと肩を竦めながら捻られた腕をぶらぶらと回す

『ジヨーク、ジヨークよ。怒らないでくれヨ〜』

『お前のジヨーク、死ぬほどつまらないのよ』

『こいつは手厳しい…』

あちやーと額に手を当てながらランタンが大袈裟に仰反る

仰け反った姿勢のままぐりんと首を回し、輪音りんねをランタンが見据える

『ふーん、へー、ほー、キャンドルのお気に入りに入りネエ…』

ランタンは姿勢を戻し、錫杖をトンと突き立てる

『まあじゃあ今日はお暇するヨ。それに、ワタシはシャンデリアやトーチみたいなのー
ワン作らない主義だし』

紳士のように一礼しながら灰色に揺らめく炎が覗く伽藍洞の口を歪ませてランタン
が笑う

『では、アデュー♪』

ランタンが灰色の炎に包まれ、その姿を消す

残されたキャンドルはふう、と息を吐きながら人間体一六黒むくろの姿に戻ると隣に立つ

輪音りんねにウインクを向ける

「災難だったねえ、輪音ちゃん」

「……あれが、ジヨンドウ…」

言葉を失う輪音りんねの頭をぼんぼんと叩くと六黒むくろは伸びを一つする

「さてと、面倒なヤツの足止めのせいでやらかしたけど…多分愛しの十三じゅうぞうがヤバいから私は帰るけどー」

キャンドルの何気ない言葉に輪音りんねは目を見開く

「十三じゅうぞうさんが、大変なんですか!?!」

平坂靈園内の小屋ひらさかにたどり着いたキャンドルが扉を開き、慌てて入った輪音りんねの前には椅子に深く身を沈めた生傷だらけの十三じゅうぞうがいた

「!!?」

見知った人の大怪我を見たシヨツクに思わず輪音りんねが顔を覆う

「これまたこっぴどくやられたな、十三じゅうぞう」

ニヤニヤと笑いながら声をかけた六黒むくろに気づき、十三じゅうぞうが机に手を突いて立ち上がりながらその白衣の襟首を掴み上げる

「その名を、呼ぶなと言つたはず、だ…ツ!!?」

げほげほと咳き込む十三じゅうぞう

「十三じゅうぞうさん!?!」

その体を案じた輪音りんねが肩を貸し、再び椅子に腰を下ろす

「反論できる程度には、無事みたいで何よりだ」

救急箱をどこからか取り出してきた六黒は輪音を側の椅子に座らせると手際よく十三の怪我に処置をしていく

「どういうつもりだ、キャンドル…!!?」

「……何がだ?」

十三がギロリと六黒を睨み上げる

「とぼけるな…!!? ノーワンの気配の連絡をしなかった…加えて、お前の渡してきたア

ニマアルカナは役に立たなかった…!!?」

はあ、と六黒がため息を吐く

「やはりな。だから言っただろう? アニマアルカナは持ち主のアニマに共鳴しなければ起動しないと」

「……俺に、資格が無いということか…?」

六黒が十三の顔を両手で掴み、引き寄せる

「はっ、見くびるな。私を持つ『置き土産』を忘れたか? お前に合わないアニマアルカナならくれてやるワケが無いだろう?」

妖艶にその指を十三の傷口に這わせる

「己の内を覗け。お前の、『死』以外のアルカナの『運命』を掴んでみせろ。そうすれば

「…それは使える」

十三じゅうぞうは六黒むくろの手を振り払う

「……アルカナはそうだととしても、連絡を怠っていたのはどういうことだ…？ お前の下らない退屈しのぎか…？」

「違うよ。珍客の対応で手一杯だったんだ。そこの輪音りんねちゃんも守らないとだったし」

肩を竦めながら答える六黒むくろを睨む十三じゅうぞう

「そ、それは本当です…!!？」

そこに割り込んできたのは座ったまま声を上げた輪音りんねだった

「……輪音りんねちゃん」

輪音りんねは十三じゅうぞうを見据えながら続ける

「私を、守ってくれたのも本当です…!!？ 六黒むくろさんは…あのランタンって人たちとは違うはずだから…」

「キミに、何がわかる」

心の底から冷えるような声色で十三じゅうぞうが突き放す

膝の上に置いた鞆を掴みながら輪音りんねはもう一度口を開く

「……あのノーワン…私たちの学園にいるんですよね…」

「……………」

「私も、私も力になります…!!? きつとー」

「必要ない。キミには関係のない話だ」

十三は椅子を回し、輪音りんねに背を向ける

「……もう、こちら側には関わるな。キミが来る所じゃない」

その言葉を聞いた輪音りんねは力無く立ち上がり、一礼だけして去って行った
背もたれに身を預けた十三じゅうぞうの側の机にタロットが一枚滑り込んでくる

「一ふむ、《悪魔》の逆位置だな」

なんの変哲もないタロットを持ち上げる

逆さになった松明を構える《悪魔》のカードを見た十三じゅうぞうが眉根を寄せる

「それがどうした?」

「タロットも知らないのかお前は。それが今のお前だよ」

タロットの紙束をシャッフルしながら壁にもたれかかる六黒むくろがつまらなそうに告げる

「…なんのつもりだ?」

「自分で調べたらいいだろう? 私はそんなつまらんことに興味はないんだから」

底冷えのする声に思わず後退りベツトから転げ落ちる

ドアが派手に吹き飛ばされ、あの異形が姿を現した

その手にはロープが伸びている

「いや、いやいやいやアアアアアア!!!来るなよ!!?」

【お前は、生きるに値しない】

同じことを繰り返すハング・ノーワンを震えながらも睨み、悠美が吠えた

「ざけんな、ざけんなあ!!ただちよつと遊んでやっただけだろうがア!!!なんで、なんで死ななきゃなんねえんだよ!」

【罪状を覚えているなら、都合がいい】

ハング・ノーワンの投げた縄が悠美の首に巻き付く

「いや、嫌だ!!?ママ、ママあ!!!」

【お前という罪人を庇った母親なら既に罰した】

あつさりと言ったハング・ノーワンに悠美が呆けた声を漏らす

「……………はあ?」

【私はお前たちを許さない…!!?お前たちの同類も、それを庇うものも全て許さない…

!!?私が、くくり様が全てを裁く!!?】

「狂ってやがる…バケモンが!!?人殺しが!!クソ、クソオ!!」

ーギシツ、ギギツ、ぎちぎちぎち

ーギツ、ギギギ……キシツ

〔一罰は下った〕

天井からぶら下がり、ぶらぶらと揺れる振り子を見上げたハング・ノーワンが呟く

〔……みんな、みんな殺した。罰した〕

〔でもまだだ。まだ生きるに値しないヤツらは、生きてる〕

ハング・ノーワンの体に埋まる骸骨の頭部、その眼窩の奥の灰色の炎が更に燃え上がる

〔一まだ、殺さなきや〕



翌日

ひつぎのみや
棺ノ宮中央学園

休憩時間に談笑を続ける女子生徒たち

「あ、あの……ちよつといいですか？」

そこに輪音りんねがおずおずと話しかける

「えつと……この学校の、七不思議に詳しい人って誰かいない？」

女子生徒たちは首を傾げ、知らないと言を振る

彼女たちに頭を下げ、輪音りんねは集まりから離れて胸を撫で下ろす

「……………絶対変な人だって、思われた…」

輪音りんねがはあとため息を吐く

昼休憩にご飯を早く済ませた輪音りんねは教室内の同級生たちに手当たり次第に声をかけ、

七不思議——くくり様の情報を集めようとしていた

収穫はゼロ。新入生なのだから当然である

『必要ない。キミには関係のない話だ』

十三じゅうぞうの冷たく突き放す言葉がちくりと胸に刺さる

今、輪音りんねのしていることはレクイエム——十三じゅうぞうのためのこと

輪音りんねには関係のない、危険な世界の話なのは間違いない

(……………それでも……)

きゅつ、と輪音りんねが拳を握る

それでも、輪音りんねは動かなきやならない気がした

否、やりたかつたのだ

傷ついた十三じゅうぞう、得体の知れない怪人、怪人になっていく人

正直とても怖い。危険なことだと痛いほどわかる

そして彼らのことは、輪音りんねには何もわからない

でも、輪音りんねは「だから放っておこう」としたくなかつた

(どんな小さな事でも、私は…力になりたい…!!?)

輪音りんねは新たな聞き込みのために一歩踏み出した

昼休憩も終わりに近づいた中、ようやく辿り着いた2年生の教室がある階だったが、やはりいきなり踏み込むことは難しかった

(さ、流石にいきなり七不思議がどうか、聞けない…)

昼休憩も終わりに近づいていたことに気づき、そろそろと去つていこうとしていると「―あなた、くくり様の話を聞いて回つてる子?」

突然かけられた声に驚き飛び上がりそうになりながら振り向く

そこにいたのは眼鏡をしたショートヘアの大人しそうな女子生徒。鼎かなえと同じ青色の

リボンが胸元に揺れていることから2年生であることがわかる

「えっと……その……はい……」

「そうなのね!!? 私、2年の綾辻^{あやつじ}彩奈^{あやな}。くくり様のおまじないなら知ってるよ」

柔和に微笑みながらそう告げる彩奈^{あやな}

「……あなたも、殺したい人がいるのね」

「……え?」

彩奈^{あやな}がそう告げ、どこか虚な目のまま微笑む

「くくり様はすごいんだよ。本当に、私の殺して欲しい2人を殺してくれたの。いじめを繰り返して、追い詰めて、飽きたら忘れてたあの2人を……」

彩奈^{あやな}が手を差し出す

「あなたもきつと叶えてもらえるよ。くくり様なら、きつと」

輪音^{りんね}はその手と彩奈^{あやな}の顔を見て、きゅつと片腕を掴む

「私には、殺したい人はいません」

「……え?」

輪音^{りんね}は彩奈^{あやな}をまつすぐ見据えて口を開く

「くくり様が……何者なのかは分かりません……でも、でも誰かを殺すなんてことは、どんな理由でも許されちゃダメだと思うんです」

「……死んでしまうって、辛くて、悲しいことだから……」

ふと、目に止まったものを拾いあげる

《悪魔》のタロット

逆さまーつまり逆位置にこちらに向けられたそれを見つめる

『タロットも知らないのか、お前は』

キャンデルのつまらなそうな言葉が脳裏に響く

『十三じゅうぞうの今日の運勢は…あつ、この配置はちよつと…』

『ああ、でもでも!!? 私はこれもきつと悪くないと思うんだ』

同時に、同じ声のーそれでいて別人の声も思い出す

(知っているさ。何度も占つてもらったんだ)

十三じゅうぞうは懐かしむように、それでいて哀しい目を見せる

「……『狭量』『弱さ』そして『臆病』、か…」

『それが今のお前自身だ』

キャンデルの言葉を思い出し、自嘲気味に笑う

(間違いない。俺は、臆病者だからな……)

タロットを握る手に力がこもる

『ねーねー、金貸してよ。あんたどうせ使わないでしょ?』

『生意気。根暗のクセに口答えしてんじゃねえよ』

昼間は色んな生徒が泣きながらお菓子やら小物を供えていたりもした

『あつはは!!?くっさー。あんたにはお似合いだよ』

『金貸してくんないからこうなるんだよ』

その前に立つ女子生徒がそれを力任せに床に落とす

ガシヤ、ガシヤン!!?と派手な音が空の教室に響き渡り、割れた花瓶から水が広がる
空いた机に女子生徒は、力任せに彫刻刀を突き立てる

何度も、何度も、何度も

机を押さえつけ、怨嗟を込めて、その机に深い傷を刻んでいく

『死んでしまっつて、辛くて、悲しいことだから…』

昼間のあの少女の言葉がフラッシュバックし、怒りのままにその机を蹴り飛ばして転ばせて踏みつける

「辛い? 悲しい? こんな、こんなクズが、ゴミが死んでなんで、なんで悲しむの!?! 誰も、

誰も姉さんの時には悲しまなかったクセに!!」

ふー、ふーと肩を揺らす女子生徒―綾辻^{あやつじ} 彩奈^{あやな}の瞳に灰色の炎がちろちろと揺れる
その胸をかきむしり、どこからか灰色のぼろぼろのアルカナを取り出す

背景に《女教皇》の透かしが入った、水の溢れる《杯》のカードを

「あいつも、あいつも腐った罪人だ…殺してやるッ!!?」

学園の屋上

給水塔に腰掛けた人影、黒いフリルで彩った学生服を着たシャンデリアは愉快そうに
きししと歯を見せて笑う

『生きていたい』、生にしがみつく想いで私たちはノーワンを作っていく。でえもお、それ
れて別に死にかけてるヤツだけの特権じゃないワケ」

かりかりと爪を齧りながらシャンデリアは笑う

「たとえば、『生きてて欲しかった』ってのもさあ、生にしがみつく強い想いつてワケじゃ
ん?」

「その命を捧げてえ、呑気に生きてるヤツを引き摺り下ろして絶望させて踏みつける……そういう『死』、最高にイカすわよねえ♪」

夕焼けの廊下をのろのろと帰る輪音^{りんね}

一応、十三^{じゅうぞう}たちに会ってみようとしたのだが今日は2人とも休んでいるらしく会うことができなかった。昨日今日で仕方ない話ではある

「……さっきの彩奈先輩^{あやな}に話を聞いてみようかな……まだ学校にいたらいいんだけど……」
と、ふと前を見た輪音^{りんね}の目に人影が映る

ちようど探しに行こうとしていた綾辻^{あやつじ} 彩奈^{あやな}がそこに立っていた

「あ、彩奈先輩^{あやな}」

声をかけようとした手を引く

彩奈^{あやな}はぐりんと首を不自然に動かし、恐ろしい形相をこちらに向けてきたのだ
「……死んだら悲しむ？辛い……？あは、あはははッ!!？」

突如狂ったように笑い出す彩奈^{あやな}にたじろぐ輪音^{りんね}

怒りのこもった灰色の目が、輪音^{りんね}に向けられる

姉は、いじめられていた
網代^{あしろ} 佳奈^{かな}と羽柴^{はしば} 悠美^{ゆみ}という2人の同級生に金をせびられ、言うことを聞かなかった
ら生ゴミを被せられたり、トイレに閉じ込められたり、目に余るいじめを毎日受けていた

『この度は、私どもの至らなきでー』

黙れ、姉の訴えを聞かなかった癖に

見て見ぬふりした癖に…!!?

『もつと、あの子の話を聞いてあげたらー』

黙れ黙れ、姉が無駄遣いしていると訳も聞かず怒鳴った癖に

話なんて最初から聞こうとしなかった癖に…!!?

『ちよつとした意地悪で大袈裟にしちやってー』

黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ!!?

人殺しどもが!!? 人殺しどもが!!?

^{あやな}彩奈は姉と同じ高校に通うのが楽しみだった

憧れで、優しくて頼りになる大好きな姉

私にできないことがたくさんできる姉

そんな姉を、奪われた

私以外、姉の死をなんとも思っていない

『生きて欲しかった、のよねえ?』

突然部屋に響いた声に彩奈あやながぐしゃぐしゃに泣き腫らした顔を上げる

蠟燭と金属装飾で彩られた灰色のドレスを纏う怪人がそこにはいた

「ひ、ば、化け物……!?」

『あら、化け物なんてひどいわ。あたしたちは、最高の死に選ばれた民なのに』

怪人は彩奈あやなを見下ろし、告げる

『あなた、姉さんに生きてほしかったのよねえ? 姉さんを追い詰めたヤツらのこと、死ぬほど憎いのよねえ?』

怪人の言葉に、不思議と恐怖よりも先に怒りが沸々と再燃してくる

その彩奈あやなの様子を見た怪人はふふん、と微笑み、巻物を広げる

そこから黒い炎が浮かび上がり、先端に首が通りそうな輪を作った黒いロープに変化する

『ここにあなたの姉さんの死を形にした縄があるわ。生きていくのに絶望して、苦しんで苦しんで死んだ死の概念』^{アニマ}

ぱさり、とその縄が彩奈の前に投げ渡される

『あんたの生への妄念、それと混ぜちゃえば…あんたもあたしたちと同じ超人になれる。復讐だって、簡単にできるわよ？』

その言葉を聞いた彩奈^{あやな}は、黒い縄を掴んでいた

天井からぶら下げた縄に首を通し、台を蹴飛ばす

「ツ、ぐウ……ツ!？」

ギリギリギリ、と首が締めまり苦悶の声が漏れる

バタバタと足をバタつかせながらもがく

苦しい、苦しい苦しい

姉さんは、これを選んだ

これを選ぶしかないほど、生きるのはもっと苦しかった

憎い、憎い、憎い…!!？

姉を地獄に落として、自分たちは生きる連中が憎い!!？

痙攣が止まり、だらんと彩奈^{あやな}が脱力する

縄が黒い炎を上げて燃え上がり、彩奈の胸から燃え上がる白い炎と混ざり合って灰色の炎が産声を上げ、彩奈の死体を包み込む

沙彩の『死』と彩奈の『生』

溶け合い、複雑な縄細工のように絡み合った灰色の炎がハング・ノーワンの巨体を形作る

「ヴアアアアア!!? ゴミには、死を…苦しみと死をオ!!?」

その胸に燦々と輝く《杯》のアルカナを見た怪人ーシヤンデリアが愉快そうに笑う

『ハッピーバースデー♪ハング・ノーワン。とーってもイカす死につぶりだったわぁ♪』

まずは母親を締め上げて首の骨を砕いて灰の炎で焼いた

姉さんを見ようとしなかった罰だ。当然の報いだ

そして姉さんの担任も締め殺して燃やした

因果応報だ。悪辣教師め、罪人め

死んだ姉さんの代わりに「私が姉さんになった」

学園にはまだゴミが2人いる

逃がさない

【逃すかあ…!!?】

「ーッ!!?」

思わず輪音りんねは上り階段を駆け上がって逃走していく

案の定、屋上まで出たがそこから逃げる道などありはしない

柵かきに手を突き、冷や汗を垂らす輪音りんねの首にロープが巻きつき締め上げる

「かッ!」

後方に引つ張られ転倒し、締まるロープを掴むが固く結ばれたそれは解ける気配はな

い

【ゴミを庇うお前も、罪人だ…!!?死んで、苦しんで償え…!!?】

ギリギリ、とロープを引き寄せる度に輪音りんねの首が締めまり、苦悶の息が漏れる

「こ、んなこと…もう、やめ…てッ!!?」

首が締めまりながらも輪音りんねはハング・ノーワンあやな綾奈に言葉を投げかける

「お姉さんが死んだことは…悲しいかも、しれない…私だつ、て…母さんが死んだ、ら

……ッ、きつと辛いから…」

「でも、だから、つて…命を奪う理由には、ならない…ッ!!?そんなことで…、お姉、

さんはッ…喜ばない…ッ!!?」

輪音りんねの言葉にハング・ノーワンは更にロープを引き、その首を締め上げていく

【うるさい、うるさい!!?何も知らないお前が、姉さんを語るな!!?】

ギリリ…と締まるロープ

段々と薄くなっていく意識の中、何かを掴もうと手を伸ばすが何も掴めるはずもな
くー

ーブオンツ!!

消えゆく意識の中でも鮮明な、重い排気音が響いた

【があっ!?!】

衝撃音と共に何かが倒れる音が響き、首のロープが緩まる

けほ、けほっと咳き込む輪音りんねが誰かに助け起こされ、屋上端のフェンスに下ろされる
「間に合った…良かった」

そこにいたのは黒い骸骨マスクの怪人ー仮面ライダーレクイエムだった

「十、三さん……」

安堵の息を漏らす輪音にホッと息をついたレクイエムが首を振りながらその額を指
で弾く

「つ!?」

「無茶なことをするな!!? ノーワンの危険性は、よく見てきただろう」

レクイエムが少し語気を強めて告げる

「ばつが悪そうに顔を反らして頭を掻く」

「……………昨日は、悪かった」

輪音りんねを庇うように立ち上がり、背中越しに語りかける

「一般人で、関係のないキミを巻き込みたくなかったのは本当だ。だが…それと同じく、

キミが力になると言ってくれたことも嬉しかった」

振り向き、輪音りんねに指差しながらレクイエム十三じゅうぞうが釘を差す

「だが、無茶は絶対するな。俺やキヤンドルも、どこにでも来れるワケじゃない」

その言葉を聞き、輪音りんねは力無く苦笑し気を失う

「またお前か…!!? 邪魔をするなア!!!」

立ち上がったハング・ノーワンが腕を震わせながら吠える

「……………悪いが、何度でも邪魔するさ」

レクイエムはハング・ノーワンに向き直る

「ノーワンの、非死者の起こす惨劇も、二度目の死も、どんな形であれそれは耐え難い悲

しみを生む」

レクイエムは胸の前でその拳を握る

「お前の辛さは分ならずとも、それは痛いほどわかってるんだよ」

黒い骸骨面の怪人が非死者に指を突きつける

「俺の名は『鎮魂歌』^{レクイエム}、お前たちの生と死に白黒付けてやる!!？」

それを給水塔の頂上から眺めていたシャンデリアが嗤う

『カッコつけてるとこ悪いけど、あんたハングにパワー負けしてるの忘れたのお？あんなじゃ、あたしのお気に入りには勝てないの』

「ああ、そうだな。俺は『弱い』し、『臆病者』だろう」

レクイエムは肩を竦め、一枚のアルカナを取り出す

黒いデイスプレイのアニマアルカナを

「—そんな臆病者の魂一つ、たまには…『悪魔』に賭けてやるのも悪くない」

アニマアルカナの起動スイッチをレクイエムが押す

黒いディスプレイに、脈動する心電図が走る

《ファイティーン・デビル》

『ーなんですつて?』

シャンデリアの顔色が変わる

デスサイズドライバーの《死^{デス}》のアルカナを外し、新たに手にしていたアニマアルカナを装填し、下げた右親指を一文字に引き、ドライバーのレバー下ろす

《エクスキュージョン・アッパー》

《リバース・デビル》

レクイエムの首にギロチン台が現れ、今一度その首が切り落とされる

それを右手で力強く掴むと、黒い炎に覆われた全身が変化していく

コートを靡かせるライダースーツのようなスーツから、燕尾服のようなスーツに変化し、腕や足に炎のラインが走り紫に輝く

更に手と足からは鋭い爪が伸び、腰にわだかまる炎を晴らしながら細く長い一對のコ

ウモリのような翼と鋭い鎌のような切先を持つ尻尾が伸びて鞭打つ

マフラーのようにたなびく首の炎の上にヘルメットを被るかのように落ちた頭を戻すと、首元から2本のギロチンが頭頂に向けて下り、悪魔のツノのようなバイザーを完成させる

黒と紫の炎を尻尾で薙ぎ払いながら現れた新たなレクイエムはかちかちと爪を鳴らしながらハング・ノーワンに告げる

「ここからは、悪魔的に行かせてもらおう!!？」

【黙れえ!!!】

ハング・ノーワンがその巨腕を振るう

レクイエムはそれを避けることもなく、右拳をぐつぱつと開くと強く握り直し、そのまま渾身のストレートで巨拳にぶつかる

強い衝撃音が屋上に響く

一瞬の拮抗の後、弾けたのはハング・ノーワンの巨腕の方だった

黒紫の炎が迸り、爆ぜた拳にハング・ノーワンが狼狽える

【は、はあ!? な、んで…!??】

「こいつは…凄まじいパワーだな」

思わず呟くレクイエムの言葉をシャンデリアの声が遮る

『な、なんなのよそれエツ!!』

観戦していたシャンデリアが降り立ち、巻物からの炎弾を放つ

レクイエムは腰の翼を大きく羽ばたかせその炎弾を掻き消す

たじろぎながらも巻物を鞭にした攻撃を放つが、腰を捻って尻尾を向けたレクイエムの尾撃に弾き返され、返す一撃を食らって後退する

『ぐうっ?!』

レクイエムに纏わりつく黒紫の炎の中から何かが飛び出し、その手に収まる

《グルートマホーク》

現れたのは柄に回転する円盤の付いた炎のような形の刃を持つトマホークだった

「武器まで生み出せるのか。ありがたい」

開かれたスロットに気づき、ホルダーに収めていたアニマライターのイグナイターを
回し、グルートマホークのスロットに収める

《イグニッション・デビル》

スロットされると共に炎刃が黒紫に輝く

『だからなんだってのよお!!』

シャンデリアが半ばヒステリックに巻物を振り回す

レクイエムはグルートマホークの円盤を回し、刃に纏う炎を噴き上げさせると、襲ってくる巻物を炎の斧撃で撃ち落とす

鞭撃が緩んだ瞬間、グルートマホークの円盤を何度も回転させる

《MAXイグニッション》

噴き上がる炎が更に巨大な刃を作り出し、肩に担ぐようにグルートマホークを構えて振り抜く

間一髪巻物を展開して防いだシャンデリアだが、その強烈な一撃に堪らず吹き飛ばされる

『があっ!?!』

地に伏すシャンデリアをいつのまにか給水塔の上に腰掛けたキャンドルが見下ろしからからと笑う

「いい様だなあ、シャンデリア。実に愉快だ」

『あんた、キャンドル!!』

憎々しげに見上げるシャンデリアにひらひらと手にしたタロットカードを見せびらかす

「なあ、シャンデリア。《悪魔》の逆位置にはいい意味があるんだ」

「屈服された状態からの解放。どうだ？ 力しか能が無いあのノーワンをぶつ飛ばすにはちょうどいいアルカナだろうか？」

【がアアアア!!!】

弾けた拳を無数のロープに解き、それを鞭のように振るうが、レクイエムはそれをグルートマホークで叩き落として肉薄する

反撃に奮われたラリアットも今度は片腕で易々と防ぎ、ぐるんつと身を翻しながら蹴りを浴びせてハング・ノーワンを吹き飛ばす

「憎いだろう、恨めしいだろう。それでいい」

「お前たちの「黒い」モノは、まとめて俺が引き受ける」

《スリー》

《ツー》

《ワン》

「俺が……いや俺たちが、お前たちを覚えて生きていく」

レクイエムがドライバーのレバーを下ろす

《ラスト・エクスキューション》

左踵のスロットにグルートマホークを装填、ギヤリツと火花を散らしながらその脚を振り上げる

上がった火花は黒い炎となり、ハングノーワンの首を捉えながら大きなカーブを描き、刃が下るレールとなって引き絞られたレクイエムの左脚に固定される

「俺の名は、レクイエム」

「お前たちへの、《鎮魂歌》だ」

ガチャン!!?

ロツクが外れると共に漆黒のギロチンとなった踵落としがハング・ノーワンを切り裂

く

【が、あ、アアアア!!】

ギロチンが降ろされたハング・ノーワンは灰色の炎を上げ爆発崩れる体から白い炎がゆらめき出し、綾辻 彩奈の姿を形取る

『あ、あああ……くそ、くそ……』

ゆらめく彩奈のアニメ残滓は膝を突いて力無く地面に拳を下ろす

それを見下ろすレクイエムの隣に、咳き込みながらも立ち上がってきた輪音が並ぶ
「彩奈先輩……私もいじめは許しちゃいけないと思います」

まっすぐ見据える輪音の目を、泣き腫らした彩奈の目が見上げる

「でも、でも……だからって奪い返してしまつたら……私たちも同じものになつちゃうとも思っています」

『……!!?』

「……………ごめんなさい。解決策でもなんでもないけど、私にはこれくらいしか……」
輪音の言葉に彩奈はぼろぼろと涙を流す

『……………なんなのよ、もう……これしか、これしかできなかつたのに……私が……あんなヤツらと同じに……なつてたなんて……』

泣きじやくる彩奈の背を誰かの手がさする

そこに現れていたのは、解放された沙彩さあやのアニマ残滓ざんじだった

『姉さん……!!?』

『ごめんね、彩奈ちゃん』

泣きじやくる彩奈あやなはそのまま沙彩さあやに抱きつく

霞んでいく2人の残滓

最後の最後にレクイエムと輪音りんねの方を見た沙彩さあやは微笑んで頷いた

崩れていくアニマの灰をレクイエムは2つの壺に収める

隣で鼻を吸る輪音りんねにレクイエムが告げる

「デスサイズシステムで葬ったノーワンだった人間は、『ノーワンになった死因で死んだこと』になる。ハング・ノーワンとして怪物が暴れたことはなかったことにならないが……どの道この事件は自殺扱い、でなくとも埋葬機関預かりで大きな騒ぎにはならないだろう」

「……良かった。2人は、ちゃんと眠れたんですね」

微笑む輪音りんねにレクイエムは頷く

「やったことの清算は、向こうに行つてからだが。まあ、俺たちにあとできることは、無

事を祈つてやることだけだ」

「綾辻 彩奈」「綾辻 沙彩」

悶絶しながらもなんとか近くの廃材に腰掛け直したランタンが首を傾げて問いかける

『そろそろ、暴れたくなってきた頃だ』

トーチの静かな言葉を聞き、ランタンはその口角を吊り上げる

『ほうほう、それは随分と面白そうだなエ♪』

第5話 「14の逆位置：『節制』と解放の狼煙」

破壊されたデスク

血を流し倒れる警官隊たち

そこには地獄が広がっていた

そこに、俺は立っていた

俺自身も腕を負傷していた

負傷し、動かない左腕を投げ出し右腕の銃を構える

警官隊と共に突入した、特務部隊が持っていた特殊拳銃だ

「何故…何故だ!!？」

■ ■ !!

咆哮する

切れた口から血の味が広がる

対峙したそれは―

その姿はーわからなかった

黒いノイズが入った、いやまるで世界というキャンバスの中から抜け落ちたように黒塗りになったそれは何やら言葉を放つ

「ー■■■■か■た、う■■■■■つた、アハハ!!？」

その化け物を睨み、俺は引き金に力を込める
俺の目には、何故か涙が溢れていた

自室のベッドから十一宮 正義が飛び起きる
脂汗に濡れて張り付く髪を鬱陶しげにどかす

「また……あの夢か……」

忌々しい悪夢

全くもって荒唐無稽、でもどこか強い現実味のある気味の悪い夢
だが、あの黒い何かがノーワンだという確信だけは何故かあった
痛む頭を押さえながら、枕元の常備薬を飲み水をあおる

「……怪物は、記憶すら残らずこの手で……!!?」
荒い息を上げながら、正義はその拳を握った

「いやあ、よかった。どこも悪い所は無くて」

大きなデスクの前に腰掛けた初老の柔和そうな男性が笑う

見ているタブレットの画面には人間ドックか健康診断の結果が表示されていた。どうやら自身の健康状態が良かったらしい

「…せ、先週からい、い、いきなり変化は…しないとお、思うのですよ…局長…」

局長と呼ばれた男の前に立つ白衣の小柄な女性が突っ込む

「いやいやわからないよジュナくん。人間いつ不健康になるか、しかもそこから死んでしまうかわからないものだ」

男ははあ、とため息を吐き、背もたれに身を預ける

「死ぬのは怖いよ。とても怖い。全てがなくなるのも怖いが、何よりもどうなるかわからないのが怖い…だから、私は1秒でも油断はしたくないのさ、自分の健康にもね」

「き、き、局長の健康主義は…ち、ちよーつと、びび、病的すぎますが……」

局長ははは、と笑いながらジュナを見据える

「1件のシステムの方はどうかね? プロフェッサー」

【燃えろオ!!?工場なんて燃えちまえエ!!】

周囲に野次馬たちが集まりかけたその時、燃え盛る工場の中から灰色の怪人がめっちゃくちゃに腕を振り回しながら現れる

灰色の炎が眼窩に揺れる骸骨の頭を持つ怪人

同じく灰色の蠟を固めたような体には複数のシリンダーとパイプが絡み合い、まるで血管と内臓のような構造を作っている

あまりの事態に凍り付く野次馬だが、怪人ノーワンが振り回す腕の先に備わる噴射口から灰色の火炎が噴き出すのを見て我に返り、我先にと悲鳴を上げながら逃走する

そこに現れたのは白い装甲車

棺桶のマークが入ったそれから、同じマークの特殊装備を着た武装隊が降りてくる

「対象、確認。これより攻撃に移る」

その先頭に立つ白いラインの入ったプロテクターを纏う青年とみや十一宮 正義せいぎが部隊に指示を下し、部隊員が機関銃を構える

「撃てえッ!!?」

正義せいぎの号令と共に一斉に発砲、アニマ干涉弾がノーワンに突き刺さり、灰色の火花を大きく散らす

「ぐつ、オオオオオ!!?しやらくせえ!!」

ノーワンが吠えると共に各部のパイプが大きく音を上げ、ガスを噴き出すと共に点火。体中から劫火を噴出して弾丸を溶かしながら埋葬部隊の隊員たちを焼き払い薙ぐ

「くつ!!?」

あまりの熱量に正義せいぎも思わず後退する

「アアアアア!!?全部燃えろ!!?燃えちまえエエ!!?」

叫びながら今度は腕のバーナーが点火され、埋葬部隊に向けられる

それに備え、盾を構えた隊員が並び立つ

ーブオオオンツ!!?」

そこに突然の排気音が響く

ノーワン後方の炎の海を切り裂き、バイクに跨った黒い怪人が乱入してきた

「はあつ!!?」

「なつ!!?」

バーナーを構えるノーワンを黒い怪人がバイクを回しながら蹴り飛ばし、隊員たちの前に黒い炎の轍を残しながら着地する

その怪人を見た正義せいぎがギリ、と歯を軋ませる

「非死者0号…!!?」

黒い怪人ー仮面ライダーレクイエムはバイクから降りるとチラと後方の埋葬部隊を一瞥し、すぐにノーワンに向き直る

【お前は…何もんだ…!!?】

「俺か？俺は、お前たちの『鎮魂歌』だ」

飄々と答えるレクイエムに苛立ちを見せたノーワンが両腕のバーナーから火球を放つ

手にしたアニマライターに点火し、黒い炎で火球を撃ち落としながらノーワンにレクイエムが肉薄する

腕を押さえながら膝蹴りを打ち込み、ゼロ距離からアニマライターの黒炎を撃ち込んでダメージを与える

【クソツタレがあ!!!】

逆上したノーワンは再び全身のパイプラインを加熱し、両腕のバーナーから超高出力の火炎を放つ

2つ目のアニマライターも取り出し、レクイエムも黒炎の火炎放射で応酬する

が、拮抗することもなく、ノーワンの灰色の炎はレクイエムの黒炎を押し戻し、その

熱量にレクイエムが思わず顔を覆う

「クソツ、バカげた出力してやがる……この前のは違うベクトルでパワフルなヤツだな」
顔を拭いながらレクイエムがノーワンを睨む

その時、ノーワンの様子が急変した

【ああ……ああ……？】

その体が揺らぎ、人間体のようなものが見え隠れしだす

【あああああああ!!!】

頭を押さえ、半狂乱になったノーワンは灰色の炎を撒き散らしながら逃走を図る

「ツ!!? 待てツ!!?」

追おうとするレクイエムとノーワンの間に突如何かが落下、大きな衝撃音と土煙を上げる

ゆらりと立ち上がる灰色の巨体を見上げ、正体に気づいたレクイエムが一歩たじろぎながら構える

「ージャツク・トーチ……!!?」

聳え立つ巨体は蠟の塊を削って塔のような装飾を施したような複雑な構造を持つ鎧に覆われ、塔の窓にあたる部分には灰色の炎が所々揺らめき、頂上にあたる部分には一際大きな炎が轟々と音を立てて燃えている

その左腕にはもう一つの塔型構造―巨大な大砲が伸びている

『悪いな、仮面ライダー。アレはオレの選んだノーワンだ』

ジョンドウの一体―ジャック・トーチは淡々とそう告げると左腕の大砲を構える

『お前たちも、邪魔だ』

後方から機関銃を向けていた埋葬部隊に向けてトーチの砲撃が放たれる

着弾した巨弾は大きな爆発と灰色の炎を噴き上げ、機関員たちをおもちやのように吹き飛ばす

「どけっ!!?!」

トーチの巨体にレクイエムが拳を打ち込む

拳の連打にもびくともしないトーチに今度は蹴りを打ち込むがそれをトーチは易々と右手で掴むと、その足を起点にレクイエムを持ち上げる

「な、につ!?!」

『軽いな』

トーチは左腕の大砲をレクイエムの腹に押しつけ、2発の砲撃を放ち大きく吹き飛ばす

「がはっ!?!」

吹き飛ばされダメージを負いながらも立ち上がるレクイエムにトーチはほう、と感嘆

の息を漏らす

『成る程。ランタンが興味を持つワケだ』

トーチはそう告げると左腕の大砲で地面を殴りつけ、土煙を巻き上げる

『また会おう。仮面ライダー』

煙が晴れる頃にはトーチの姿はノーワンと共に消えていた

レクイエムははあーっ、と息を吐くと構えを解きグレイブスターに向かって歩き出す

「……俺はノーワンやジヨンドウでは無いぞ」

自身に機関銃を向ける正義せいぎに背中越しに告げる

「非死者0号……お前は、ノーワンやジヨンドウのことを知っている筈だ……ヤツらの足取りも……!!? 根源のお前なら!!?」

レクイエムは振り返らずふう、とため息を吐く

「ああ、よく知っているよ」

「!? やはりー」

「ーだが、俺は連中の根源じゃない。俺は俺自身の正義で、連中を眠らせる『ただのレクイエム』だ」

レクイエムの答えに正義は唇を噛み締める

「……お前の『正義』は、ここにあるのか？」

少しだけ振り返り問いを投げかけるとレクイエムはグレイブスターのエンジンを吹かし、その場から離れていく

正義は拳を握りしめ、その背をただ睨んでいた

「何度見ても思うけどお、あんたのノーワンめんどくさ〜」

どこかの廃墟

積み上げられた廃材に腰掛けたシャンデリアが頬杖を突きながら悪態をつき、トーチを見下ろす

『お前の趣味に合わせる必要はない』

「ーけつ、石頭松明野郎が…面白くねえ〜」

足をぶらぶらさせながらトーチに罵声を浴びせる

トーチは胸からアニマルカナを取り出し、巨漢の人間体に戻る

「オレの見出した死が生と混ざるまであと少しだ。それまでの暴走を眺めるのもまた一

興

普段無表情なトーチが獰猛な笑みを見せる

「破壊、破滅、それがドカンと燃え上がるのは、いつ見ても見ものだぞ、シャンデリア」



ひつぎのみや
棺ノ宮中央学園 美術室

ガランとした教室内の教卓を囲んでいたのは、十三じゅうぞうと輪音りんねの2人だった

「ノーワンと一口に言っても作り出すジョンドウによつて生み出され方も性質もかなり異なる。この前この学校に現れたのはシャンデリアが生み出す《杯》型」

じゅうぞう
十三がタロットカードの小アルカナ《杯》を教卓に置く

「人間の『生きていて欲しかった』という白アニマの願いに死んでしまった別人の黒アニマを混ぜて生み出されるタイプのノーワンだ。基本的に意志も2人分になる分、フェーズ2が生まれやすい」

「フェーズ2……確か、明確な意志があつて人間の姿に戻ることのできるタイプでしたよね？」

「その通り」

十三が頷く

「意識がほぼ無く、死の苦しみを振り撒くしかできないのがフェーズ0、意志が少しだけ残るが人間体は持たないのがフェーズ1、人間体と強い意識を持ち、モノによつては特殊能力も手にするのがフェーズ2……そして、アニメに干渉してノーワンを生み出すことができるフェーズ3がジョンドウたち、というワケだ」

教卓に4枚の大アルカナが広げられる

《愚者》《女教皇》《塔》そして《恋人》

「この前のノーワンと共に現れた《女教皇》ハイプリエステスジャクリーン・シャンデリア、まだあまり動きを見せない《塔》タワージャック・トーチ、輪音りんねちゃんもよく知る《恋人》ラバーズジャクリーン・キャンドル、そして……」

《愚者》のカードを指差した十三が眉根を寄せたのを輪音は見逃さなかった

「……《愚者》ザ・フールジャック・ランタン。この4体がジョンドウだ」

大アルカナをしまいながらどこか辛そうな顔を見せた十三に輪音りんねは首を傾げる
 (キャンドルさんとは何かあるのはわかるけど……ランタンとも何かあるのかな……十三さん……)

見つめていると、十三じゅうぞうは小アルカナ《剣》を取り出す

「ノーワンのタイプの話に戻るが、この前取り逃したのは《剣》型……ジャック・トーチが

生み出すタイプのノーワンだった」

「《剣》型……」

「…何度か遭遇したことはあるが、攻撃性の高いノーワンになりやすい代わりにフェーズ2として完成するまで時間のかかるタイプだ。早めに見つかれば大事にはならないのだが…」

輪音が小さく手を上げ十三に問う

「あの、《剣》型はどんな形で生み出されるんですか…?」

「ランタンが生み出す《杖》型は『死にたくない、生きたい』という願いから生まれ、《杯》型は『生きていて欲しかった』という願いから生まれる。対して《剣》型を産む願いは『生きてみたかった』と言ったところか」

「『生きてみたかった』願い…?」

「人は、大なり小なり『押し殺したもしもの自分』がいる。その『殺された』もしもの自分を黒のアニマとし、今生きている自分の白のアニマに混ぜ込む。そうして生まれてくるのが《剣》型だ」

輪音が十三が差し出した《剣》の小アルカナを手に取り眺める

その時、美術室の扉が開いた

「お？ヒラさんと輪音ちゃんじゃん!!？何々？タロット占い？」

教室に入ってきたのは御津里 鼎だった

輪音は慌てて取り繕おうと口をまごまごさせるが十三が落ち着いて答える

「そんなところ。気分転換みたいなものだよ」

「いいなあ、ボクも占つてよ」

「今日はもう星の巡りが悪いからまた今度な」

え……と鼎が抗議の声を上げ、歩夢が苦笑する

先日の『くくり様事件』が終わって輪音は鼎が部長を務める美術部兼文芸部に入部していた

顔見知りである十三や鼎がいたからというのが大きいですが、単純に美術や文芸などに少し興味が湧いたというのものもある

鼎に続いてもう一人教室に入ってくる

「ちいーつす……ってアレ？鼎センパイと……あんたらは？」

「あ、えつと……はじめまして。十 輪音と申します」

制服を少し着崩した髪を後ろで括った背の高い女子生徒が入ってくる

初対面らしい輪音が頭を下げたのを見てニツと笑って手を上げる

「あたしは逸羽 五月。よろしく〜」

顔を上げた輪音の手を取って握手する

「五月ちゃんも輪音ちゃんと同じ1年生だからすぐに仲良くなれそうだねえ〜良きかな
良きかな」

うんうんと鼎が満足げに頷く

「俺は平坂 十三。外部委託でこの部の顧問をやってる。よろしくね」

「先生だったんスね…よろしくですヒラセン!!?」

五月が頭を下げる

そうこうしてるうちにもう1人が教室に入ってきて輪音たちを一瞥する

「……………」

入ってきた男子生徒はフン、と鼻を鳴らすと教室奥に向かって製作中の絵を漁りだす

「市川くん、久しぶりだね」

十三の呼びかけにもべこ、と軽く頭を下げ返すのみのその生徒を見ていた輪音が気づく

「あなたは…この前の!?」

輪音が思い出したのは首吊り現場を見に行った時のこと

自殺した生徒を「いい気味だ」と吐き捨てたあの生徒だった

「市川 隆一……実はボクの一個上の先輩なんだけど、部長はやりたがらなくてねえ……」
鼎の言葉にまた隆一が鼻を鳴らす

「そんな面倒なモノ、僕は勘弁だね。第一、僕がこの部の部長になったら色々面倒でしょ

？」

隆一は自分の描きかけのモノらしい絵を取り出す

その絵に思わず輪音は口を押さえ、五月は「げっ!?？」と声を上げる

その絵は猫を描いたモノだった

だがその猫は死んでおり、見開かれた目の片方は飛び出し、胴体からは崩れた内臓や骨が見えている

2人の反応を見た隆一は馬鹿にしたような笑いを漏らす

「……今年の1年も偽善者ばかりだね」

その言葉を聞いて五月が口をへの字に曲げながら腕を組む

「……感じ悪い……」

1人絵を描き始める隆一を見ながら十三はぼん、と手を叩く

「さて、一応活動的な部員も集まったから告知をしておこう」

「教卓奥の黒板に十三じゅうぞうがチラシを貼り出す

そこには『棺ひつぎのみやノ宮市美術展作品募集』と書かれていた

「市の美術展ですか？」

「こそ、美術部としては恒例行事なヤツなんだよねえ。入選したら棺ひつぎのみやノ宮市立美術館に展示してもらえたりするよ」

「すげえ…!!? あたしらも描いていいのかわ？」

十三じゅうぞうが笑顔で頷く

「もちろん。3週間後の締め切りに間に合えば誰でも資格はある」

「描く絵のテーマは、『家族との思い出』だね」

十三じゅうぞうの言葉に五月ごつきがどこか悲痛な表情を見せた

「家族との思い出…なるほど」

「何描こうかなあゝ隆りゅういち一先輩は出しますか？」

隆りゅういち一は絵に集中したまま顔を上げずに答える

「論外だね。僕の絵で家族の思い出? 問題にしなければならないってわかるでしょ?」

「ま、まあそうですね…」

鼎かなえがあはは、と苦笑いする中輪音りんねが五月ごつきに声をかける

「ほへえ、輪音は母さんの看病とかも兼ねてここに進学したのか。エライなあ……」

「そんなこと無いですよ。ただ心配なだけですから」

部活が終わった後、帰り道が途中まで同じということで輪音と五月は一緒に帰っていた

「いい家族だなあ……なんか羨ましい」

「……五月さんの家族は、違うのですか？」

輪音が問うと五月の顔に影が落ちる

「うちは、そういうのに縁が無いから。母さんのことはよく覚えてないし、クソ親父は……」

何かを言いかけて五月は言葉を切る

「……なんでもないわ。あ、あたしこっちだからまた明日学校で」

五月が手を振って輪音と分かれて歩いていく

その背を見送っていると、しばらく先に進んだところの小さな町工場の入り口に入ろうとして何やら大声で怒鳴り始めたのが見えた

「五月さん……？」

心配になって見ていると工場の中から作業服を着た眼鏡の男性が現れた。どうやらその男性と口論しているらしい

ひとしきり言いあつた後、五月は男性にカバンをぶつけてこちらに走ってきた
 「クソ親父!!? 死んじまえ!!?」

捨て台詞を残して去っていく五月の背に輪音が思わず手を伸ばす

「五月さん!!?」

だが五月はその声も聞こえなかつたのかそのまま走り去ってしまった

「五月!!? 待ちなさい!!?」

息を切らして追ってきた男性が輪音の目の前で立ち止まり、息を切らす。息を整えた
 男性は五月を見失つたことに気づき大きなため息をこぼした

ふと、隣を見た男性がようやく輪音のことに気づく

「……五月と同じ学校の制服……キミは?」

「あ、えつとその……私は五月さんの友達で、十輪音と申します」

輪音がぺこりと頭を下げる

それを見た男性は少し驚いていたようだが笑みを返す

「そうか、五月の友達の子か……こんな所を見せてすまなかつた」

男性は白髪混じりの頭を深々と下げる

「私は逸羽東吾。五月の父で、その小さな工場で一応社長をしているんだ。よろし

く」



部活が終わり、雑務を片付けた十三じゅうぞうが廊下に出る

「やあ、待っていたよ」

待ち構えていたように壁に背を預けて立っていたキャンドルがヒラヒラと手を振る

「……なんの用だ、六黒むくろ」

「この前見つけたノーワンに逃げられたって聞いたぞ？ 《悪魔デビル》まで持ち合わせているのに何があつた？」

はあ、と十三じゅうぞうがため息を吐く

「……この前のハング・ノーワンとはまた違うパワー型だった。放つ火炎の出力が強すぎてマトモに近づけなかった」

「エネルギー攻撃特化型のノーワンか。中々面白い……」

「それに、トーチの邪魔が入ってな。手こずっているうちに逃してしまった」

キャンドルがほう、と顎に手を当てる

「出不精のトーチが姿を現すとは珍しいな。なるほど、ヤツの作る《剣》型ノーワンなら、この妙な反応も頷ける」

キンツ、と右耳のピアスを鳴らす

「出現したのか？」

「いや？違うな。ただ予兆があっただけ、と言ったところか。臃げな気配が強くなってはきている」

十三が視線を鋭くし、先を急ぐ

その目前にキャンドルが一枚のアニメアルカナを渡す

「持つていけ。《悪魔》と同じくレクイエムの能力拡張用に調整しておいてやった。今回のノーワンにはうってつけだろう」

「また土壇場で使えない、なんてことは無いだろうな？」

キャンドルがやれやれと肩を竦める

「アレはオマエの問題だ。まあ今度のアルカナは人ならば多くが持つ一面だ。起動できないことはあるまい」

キャンドルは唇に指を当て愉快そうに微笑む

「ただしご利用は計画的に、だ。《悪魔》以上にじやじや馬だからなあ」

キャンドルの言葉を聞いた十三はアルカナを受け取ると足早にそこを去っていく
その背をキャンドルの灰色の瞳が静かに見つめていた

「いやはや、お見苦しい所を見せて申し訳ない」

「いえいえ、気にしてませんから…」

頭を下げる東吾に輪音が手を振る

輪音と共に五月が去った方へ歩いていきながら東吾は色々話をしてくれた

「親子喧嘩中だったんですね」

「ええ…五月がイラストのコンクールに向けてイラストを描いて見せてくれた時、将来はイラストで仕事をしていくんだって言ったのを私がそんな安定しない仕事はやめなさいと強く反対してしまって…それからは売り言葉に買い言葉で、気の強い五月が強く反発してしまつたのです…」

東吾の話聞き、輪音は少し俯く

「…私も、子供の頃は美術で食べていきたい、なんて考えて絵の制作に打ち込んでいました」

東吾が懐かしむように呟く

「親父の町工場なんか継がない!!? 糞食らえ!!? って工場を継がせようとする親父と何度も反発した。こんな親父なんか嫌だって何度も思つた」

あはは、と東吾が苦笑する

「今では私が、そんな大嫌いな親父と同じことをしてしまつてるのは、本当に皮肉ですがね。妻を早く亡くして男手一つで育てた大事な娘なのに、私は嫌われてばかりだ」

寂しげな東吾を見て輪音は告げる

「そんなことは無いと思います。東吾さんは優しいお父さんだと思いますよ。五月さんも、きつと理解してくれてます」

「……ありがとう、輪音さん。私も頭ごなしに五月の言葉を否定しすぎてしまった。五月が帰ってきたら、もう少しゆっくり話してみるよ」

そう微笑む東吾が前を向く

その足が急に止まった

「東吾さん……?」

東吾の視線の先には東吾の工場に似た小さな町工場があった

中で作業している機械からは激しく火花が散っている

「工場……町工場……」

夢遊病のようにふらふらと歩んでいく東吾

「あ、あああああ!」

突如胸を押さええ苦しみ始める

「東吾さん!?!」

東吾の胸から現れた《塔》の透かしが入った《剣》が描かれた灰色のぼろぼろなカード―アニマアルカナを見て輪音が目を見開く

灰色の炎と共に東吾の胸に戻ったそれから炎が吹き出し、東吾の姿が両腕にバーナー

を備えた灰色の怪人バーナー・ノーワンに変貌する

道を行き交う人々が突然の怪物の出現に悲鳴を上げた

「があああああ!!? 町工場なんて燃えちまええええ!!?」

先程までとは似ても似つかない獣のような咆哮を叫び、バーナー・ノーワンが辺りに炎を振り撒く

炎の勢いに尻餅をついた輪音の目前にもバーナー・ノーワンの炎が迫り、思わず目を瞑る

そこに駆けつけた十三が輪音を抱えて横に飛び回避する

「大丈夫か、輪音ちゃん」

「十三さん……」

輪音を下ろし、デスサイズドライバーギロチンを腰に巻く十三の輪音が声を上げる

「十三さん、あのノーワンは五月さんのお父さんが変身して……」

「逸羽さんのお父さんが……?」

輪音の言葉に十三は渋面を作る

バーナー・ノーワンは手当たり次第に辺りに火を放ちながら町工場に向けて歩いてい

く

拳を握りながら十三はその手にアニマアルカナを取り出す

《サーティーン・デス》

「十三さん、東吾さんは…東吾さんはなんとか助けられないんですか…!? 元の、人間

にー」

十三は無念そうに首を振る

「ノーワンに変貌したその時点で、その人間は死んでいる。俺が終わらせるか、埋葬部隊が滅ぼすかしかできないんだ…ッ」

「ーそんな…」

力無く膝を突く輪音りんねから視線を移し、デスサイズドライバーギロチンにアニマアルカナを装填し、右手の親指を下に向けて祈るように首の前で一文字に引く

「ー変身!!？」

《エクスキューション・アップ》

《リバース・デス》

十三の首がギロチンにより落とされ黒い炎に包まれる。コートを翻しながらその炎を

掻き消し、黒い髑髏面の仮面ライダーレクイエムが現れ、その右眼にギロチン型のバイザーが降りるとバーナー・ノーワンに向かって駆ける

【またオマエかあああああ!!!】

バーナー・ノーワンが振り返りながら炎を噴出して攻撃する

レクイエムはその出力にたじろぎながらバックステップで回避する

「やはりその火力が厄介だな。なら」

その手に新たなアニマアルカナを取り出す

《フオーティーン：テンパランス》

アルカナを入れ替え、ドライバーのレバーを下ろす

《エクスキューション・アップ》

《リバース・テンパランス》

ーガシャンツ!!?」

再びレクイエムの首がギロチンで斬り落とされる

首から吹き出した黒と青の炎がレクイエムの体を包み込み、その姿を変貌させていく

コートのようなスーツは少し丈が短くなり、漆黒ながら白衣のような服に変化し、腕や脚にパイプに接続されたプロテクターが装着される

首の周りに青い炎が変化した蛍光を放つリングが浮遊し、その首部分に落ちた首をはめ直し、仮面が現れる

指で目元をなぞると、ギロチン型のバイザーがゴーグルのように装着される

《プラスチックロファイ》

炎が変化したカッパ型の武器が両手に現れ、それに腰のアニマライターを装填する

《イグニッション・テンパランス》

「はっ!!?!」

バーナー・ノーワンの放つ炎に向けてプラスチックロファイを向けトリガーを引く

プラスチックロファイから放たれた黒と青の炎が灰色の炎に真正面からぶつかりその炎を押し込み、バーナー・ノーワンを吹き飛ばす

「なるほど、これなら…ッ」

突如襲いきた眩暈にレクイエムが体をふらつかせ、頭を押さえる

「《節制》の逆位置：『浪費』ってワケか。今までの形態で一番エネルギーを消費しやがる。たしかにじゃじゃ馬だ」

バーナー・ノーワンが立ち上がるそこに突撃しながらプラスチックロファイを捻りモード

を変える

《モード：マグナム》

「はあっ!!?」

ブラストロファイアから放たれた火炎弾をバーナー・ノーワンはいくらも焼き払うが、弾幕全てを防ぐことは叶わず何発か直撃を受け体をよろめかせる

《モード：サーベル》

再びモードを変え、ブラストロファイアから炎の刃が伸びる

バーナーの炎を収束させて振り回すバーナー・ノーワンの炎を切り裂き、ブラストロファイアの炎のサーベルが縦横にその体を切り裂いていく

【ぐあああああああ!?!?】

バーナー・ノーワンが地面に転がされる

レクイエムが構える中バーナー・ノーワンが立ち上がる

【俺は、俺はこんな町工場嫌なんだ…!!?こんなもん全部燃やしちまえば、俺は自由になるんだアア!!?】

バーナー・ノーワンの叫びに輪音^{りんね}は唇を噛み締める

《劍》型は、押し殺した自分を死のアニマにする…東吾^{とうご}さんが押し殺していたのは、家族に反発していた自分自身……)

『クソ親父^{さつき}!!? 死んじまえ!!?』

脳裏に五月の言葉がフラッシュバックする

レクイエムがブラストロファイーを捻る

《MAXイグニッション》

ブラストロファイー2つを連結し、バズーカ砲のように腰だめに構える

砲口にエネルギーが溜まっていく

それを見たバーナー・ノーワンも両腕のバーナーを合わせてエネルギーを溜めていく

【燃えろオ!!? 俺の邪魔をするヤツは燃えろオ!!?】

「今終わらせる、お前の灰色の死を…!!?」

レクイエムがトリガーに指をかける

が、引き金は引かれなかった

レクイエムの指が止まったのだ

【燃えろオオオオオ!!】

バーナー・ノーワンが特大の炎を放つ

レクイエムは咄嗟にそれを転がって回避し、今度こそ引き金を引き爆炎を放つ
その黒青の爆炎弾はノーワンに当たる直前で乱入してきた巨体が弾き飛ばす

「!? ジャック・トーチ!!?」

現れてきたのはジョンドウのジャック・トーチだった

トーチは左腕の大砲の砲口に右腕を突っ込む

『面白え…!!?面白えぞ仮面ライダー!!?』

大砲が分割され、両腕に大型手甲として装備され頭部代わりの炎がより激しく燃え上がる

『久々に壊し甲斐のあるヤツが見つかった…!!?遊んでやるよ、仮面ライダーアアアアア
!!!』

トーチが拳を打ち鳴らし、跳躍してレクイエムに迫るレクイエムは咄嗟に防御体勢を取る

肘の開口部から灰色の炎を噴き出しながら放たれたトーチのパンチはレクイエムの防衛すら貫通しその胸に直撃、大地に叩きつけアスファルトをひび割れさせる

メキメキメキ、と嫌な鈍い音が響く

「はっ、はっ……!!?」

衝撃で体が浮いたレクイエムをトーチが蹴り飛ばす

「が、ぐ……あッ……!!? 桁違いすぎるパワーだ……!!?」

『まだ壊れてくれんじやねえぞ!!?』

トーチの拳をなんとか回避し、レクイエムがアルカナを構える

「パワーならパワーだ!!?」

《ファイティーン：デビル》

新たなアルカナをドライバーにはめ、レバーを下ろす

《リバース：デビル》

デビルフォームに変化し、たレクイエムがトーチの拳を受け止め、パンチに正面から

殴りつける

「ぐうっ……!!?」

『ぬおおッ!!?』

ハング・ノーワンの拳を一撃粉碎したデビルフォームのパンチですら耐え、トーチの

拳はレクイエムを退かせる

先程までとは違い、ただ押し負けることはなかったがそれでもトーチの方が圧倒的に

パワーが高く、押し込まれていく

「十三さん……!!??」
じゅうぞう

レクイエムのピンチを見守ることしかできない輪音りんねの前に埋葬部隊の装備を纏った青年が姿を現す

「十一宮とみや 正義さん……!!??」
せいぎ

正義は側にいた輪音りんねを一瞥し、少し驚いた様子を見せるが機関銃を構え直しバーナー・ノーワンの下へ行こうとする

「待ってください!!??」

その背を輪音りんねが呼び止める

「あのノーワンは……私の友達のお父さんなんです……!!??だから」

「ーだから、なんだ?」

振り返った正義せいぎが深い怒りを感じる瞳で輪音りんねを睨む

思わず輪音りんねも後ずさる

「ノーワン化した人間は死亡扱い。アレはただの動く死体であり、ただの化け物だ。それ以上でもそれ以下でもない」

『埋葬』すれば、関係者の記憶からも消え去る。その何の不都合だというのだ!!??」
正義せいぎが語気を荒げ、そのままバーナー・ノーワンの下に駆けていく

「!!? 待てー」

『おいおい余所見は禁物だぜツ!!?』

正義を止めようとしたレクイエムをトーチが遮り、殴りつけて吹き飛ばす

【燃えろオ!!? 全部燃えちまええええ!!!】

町工場に火を放つバーナー・ノーワンを正義せいぎが睨む

【■■たかつ■■!!? ■ちた■つた!!? アハハハ!!?】

脳裏にあの黒塗りがよぎり、正義が頭を押さえる

「ノーワンは…化け物は全員殺す…!!?」

「記憶にすら、残さずにツ!!?」

手にした機関銃のコンソールを操作し、何かのロックを外す

《ACTIVATION》
アクティベーション
 《EXECUTE FORCE》
エグゼキュート フォース

無機質な女声のガイド音声^{ガイ}が鳴り、機関銃が変形

展開された砲口に白いエネルギーがスパークしながら収束する

『……お前の『正義』は、ここにあるのか?』

レクイエムの言葉が脳裏によぎり、ぎりりと奥歯を噛み締める

「それが俺の、『正義』だアア!!？」

機関銃からエネルギー弾が放たれる

必殺のエネルギー弾は狙い変わらずノーワンに当たるー

「ダメエエエエエエエツツ!!!」

ノーワンとエネルギー弾の前に輪音りんねが踊り出る

正義せいぎは驚愕に目を見開くことしかできなかつた

第6話 「14の逆位置：不器用な親娘を繋ぐもの」

「ダメエエエエエエエエ!!!」

正義せいぎが放つ純白のエネルギー弾の前に輪音りんねが飛び出す

「ーッ!? 十つなし輪音!?」

驚愕した正義せいぎが絶叫する

しかし、放たれたエネルギー弾はもう止めることはできない

「クッ!?!」

トーチの巨腕に捕まり縛り上げられていたレクイエムはもがきながらもなんとかドライブに手を伸ばし、アニマアルカナを交換する

『ガハハハハ!!? オラア!!!』

トーチは豪快に笑いながら縛り上げたレクイエムをそのまま近くのビルの壁面に力任せに叩きつける

衝撃で壁面が大きくヒビ割れ、陥没する

「ぐっ……あっ……!?!」

『オイオイどうしたお前? 手品はもう無いのかよ!?!?』

「いいや…あるねッ!!?」

《リバース・テンパランス》

《MAXイグニッション》

『ーあん?』

テンパランスフォームに変身したレクイエムがブラストロファイヤーをドッキングさせて
トーチの胸に押し当て、ゼロ距離で放つ

『グッ、おおッ?!』

派手な火花を散らしながらトーチが爆炎に包まれ、拘束が外れる

《リバース・デス》

《ラスト・エクスキューション》

「ーはあああああああッ!!!」

緩んだ拘束から離脱したレクイエムがそのまま逆噴射の勢いを利用し、デスフォーム
に変身しながら輪音りんねの前に降り立つと、エネルギー弾に向け断頭台が出現、右脚の先に
現れたギロチン刃を装填し黒い炎を纏うあびせ蹴りを放つ

白い稲妻と黒い炎がぶつかり合い火花を散らし、しばらく拮抗するがレクイエムの蹴

りが打ち勝ち、エネルギー弾を霧散させる

「…無茶をするなって言った側から…キミってヤツは…」

レクイエムがよろめき、膝を突く

「じゅーレクイエムさん??？」

その体をなんとか輪音が支える

『ガツハツハツハ!!?今のは効いたぜえ!!?』

燃え上がる爆炎を描き消しトーチが姿を現す

レクイエムの必殺の一撃をゼロ距離で受けたにも関わらずその体には目立った損傷がなかった

「バケモノめ…!!?」

レクイエムが悪態を吐き出す

『本当ならもうちよい遊びてえが、バーナーのヤツはまた不安定化して逃げちまったみてえだし…今日はお開きだな』

炎上する町工場の方を振り返り、いつの間にか消えていたバーナー・ノーワンを確認して去ろうとするトーチの背に声が投げかけられる

「なんで、なんであの人にこんなことを!!?」

叫んだのは輪音りんねだった

『あん?あの人?バーナーの生前のことか?』

「あの人は……自分を抑え込んだんじゃない!!? 未来のために道を選んで、今の幸福を掴んだんです!!? それなのに、それなのにその幸せをあなたは……ッ!!?」

トーチが頭の炎を揺らめかせる

『幸せえ? 抑さえ込んだもん噴き出して暴れんの最高に気持ちいいだろうがよ』

「ーは?」

『抑さえたモン吐き出しまくって暴れて、抑さえ込んだ「オレ」をのうのうと生きてきた連中の脳に刻み込む!!? ガハハハハ!!? 最高のショーだろう? なあ!!?』

トーチが愉快そうに語るその言葉に輪音りんねが首を振る

「……ランタンもシャンデリアもそうだったが……お前もやはりジヨンドウだな……」

荒い息を吐き出しながらレクイエムがトーチを睨む

「お前も……あの2体に負けないゲス野郎だ……!!?」

『はっ、知るかよ。お前らの価値観なんざ』

トーチが肩を回す

『つたく、シラけちまった』

拳を打ち合わせたトーチの体の各所から廃棄熱の水蒸気が吹き出す

手甲を巨大砲塔に戻したトーチの頭部の炎が一回り小さくなる

『……また会おう。仮面ライダー』

先程までの荒々しい言葉とはうって変わった無感情な声で告げ、トーチが大砲で地面を盛大に吹き飛ばし、土煙に紛れて姿を消した

呆然としていた輪音りんねを通り過ぎ、隣にいたレクイエムに向け正義せいぎが機関銃を向ける

レクイエムはまだダメージが残っているのか立ち上がれないでいた

「非死者0号、今ここでお前をー」

その銃口つなしの間に輪音りんねが両手を広げて割り込む

「……十輪音りんね、どけ。それは滅ぼすべき化け物だ」

輪音りんねは唇をギユツと噛み締め、首を振る

「どきません!!?この人は、化け物じゃない!!?」

「以前問いたでした時、君は非死者0号とは関わりが無いと言っていたと思うが……あれは虚偽だったのか?」

正義せいぎの冷たい瞳が輪音りんねを睨む

「…それについては謝ります。でも、私はこの人を怪物だなんて思いたくないんです!!」

毅然と輪音りんねが言い放つ

「この人は…レクイエムは、ノーワンやジョンドウと戦っています!!? そんな彼が、ノーワンたちと同じなはずがないじゃないですか!!?」

「人智を超えた力を振るっている時点でそいつは悪だ!!? どんな理由があれ、怪物と類似した力を振り回すそれも排除することが正義せいぎのはずだ!!?」

機関銃にかけた指に力を込め始める正義せいぎと未だに立ち上がれないほど消耗したレクイエムを見て輪音りんねは叫ぶ

「こんな、こんなボロボロになってまでノーワンたちと戦うこの人に、銃を向けることがあなたの『正義』なんですか!?!?」

輪音りんねの言葉に正義せいぎが目を見開く

機関銃の銃口が下げられる

言葉が届いたのか、と輪音りんねが手を下ろしかける

ギリツ、と歯を噛み締めた正義が機関銃で輪音を押し退ける

「きやつ!?」

尻餅を付いた輪音の前で正義は再度こそレクイエムに銃口を突きつける

「……一般人の女の子を突き飛ばすのが、お前の正義なのか」

「黙れ!!? 怪物が…ツ!!?」

機関銃の引き金が引かれる

瞬間、正義の横から飛んできた灰色の炎を揺らめかせる蝶が肩口に止まり、小爆発を起こし正義を吹き飛ばす

「がはっ!」

驚く輪音の目前に大量の灰色の蝶が舞う

『ああ、確かお前にはまだ言ったことがなかったかな? 埋葬部隊のイノシシくん』

炎の白衣と蠟の髪を揺らめかせ、コツコツとヒールを鳴らしながら怪人の姿になったジャクリーン・キャンドルが姿を現す

『ー私のお気に入りに傷を付けたら、灰すら残さないぞ』

いつもの妖艶さを纏いながら、いつも以上に殺意をみなぎらせてキャンドルが正義を

見下ろし告げる

キャンドルが手をかざすと灰色の蝶の群れが周囲に渦巻き、輪音りんねとレクイエムを包み込むといくつかの爆発の火柱を残し3人の姿が霧散する

降り始めた雨が町工場に燻る炎を弱めていく

一人残された正義せいぎは、感情のままに拳を地面に叩きつけた

「怪物は……皆殺さねばならないんだッ!!？」



「ヒラさん今日は来れないってよ。ギツクリ腰やらかしたらしくて」

翌日の部活

鼎かなえがそんなことを報告しながらキャンバスや画材を用意していく

(あの傷と疲労でしたし、仕方ないですよね…)

あの後退却した3人はすぐに平坂ひらさか霊園に戻っていた

変身解除した十三じゅうぞうはかなり消耗しており、肋骨もいくらか折れていたらしい

キャンドルむくろ六黒が治療をすることのことで輪音りんねはすぐに家に帰った故にそれ以降の

ことは知らなかったのだが、やはりすぐに快復とは行かなかったようだ

「……………」

五月は肩を落としてじつと無地のキャンバスに向かっていた

活発な五月には似合わない様子に輪音が唇を噛む

（東吾さんは、ノーワンになってしまっている…もう元には戻れない。十三さんが倒しても、正義さんたちが倒しても、どのみち五月さんのお父さんは帰ってこない…）

輪音の脳裏に入院中の母の顔が過ぎる

輪音は覚悟を決めて五月の隣に座る

「輪音…なんだよ急に…」

「五月さん…東吾さんとお話はしましたか…?」

輪音の言葉に五月は目を見開いて固まる

「……親父と話、したんだろ…でも、あなたには関係ない…」

「関係ありません」

輪音は首を振る

「ーッ、あんたのこの優しい母さんとは違うんだよッ!!?」

「私のお母さん、突然倒れていたんです。中学校から帰ってきて、いつも通りおかえりつ

て笑ってくれると扉を開けたら、キッチンで倒れてたお母さんがいた…」

輪音りんねの言葉に五月さつきが目を見開く

「そこから私のいつも通りは、なくなっちゃった。家でおかえりなさいって言うてく

れる人はいなくて、お母さんもいつ急変してもおかしくなくなっちゃった…」

輪音りんねは五月さつきを真つ直ぐ見つめてその手を取る

「当たり前でも、こんな簡単に壊れてしまう。たった一人の家族だからこそ、本当に突然

無くなることがあるんです…!!? だから、だから五月さつきさんには、目を逸らさないで欲しい…

押しさえ込まないで欲しいんです!!?」

輪音りんねの言葉に五月さつきが視線を迷わせる

「……押しさえ込むって…なんでわかるんだよ…」

「…描けないなら、キャンバスを用意してもらおうことはしないはずですよ。でも、五月さつきさん

は美術展用の、『家族との思い出』を描くためのキャンバスを用意してもらって、こうして

向かってるじゃないですか」

輪音りんねが優しく微笑む

「……あたし、親父の部屋でさ…見たことあるんだよ。古い絵筆が飾ってあるところ…」

五月さつきがぼつぼつと吐露し始める

「結構使い込まれててさ、あたしはそれが親父のモノだったって気づいて、親父も絵が好

きだったのにやめなきやならなかったんだって気づいちまったんだよな」

はは、と自嘲気味に笑う

「だから、親父の果たせなかった夢も果たしてやりたいから親父に伝えたのに、絵なんかで食って行けるかって怒鳴られて…親父のためにやろうとしたの…って腹が立つちまつてさ…」

五月さつきが泣きそうな声で続ける

「バカだよなあたし……イラスト描くの、本当に好きなのに……恩着せがましい理由付けて勝手にキレて……」

輪音りんねは五月さつきの手をぎゅつと握る

「五月さつきさんは本当にイラストが好きなんですわね」

「…昔、なんとなく描いたイラストで親父がめちやくちや褒めてくれてさ。それが本当に嬉しくて。あたしが描いたイラストで、誰かが笑ってくれるのが、めちやくちや嬉しいんだ」

「やっぱり、五月さつきさんは優しい人です」

五月さつきは輪音りんねのその言葉に微笑み、鉛筆を取る

「描くことあったわ、大切な思い出」

「思い出させてくれてありがとうな、輪音^{りんね}」

その言葉を聞いて輪音^{りんね}も満足げに頷いた



埋葬部隊本部

「独断専行なんて何を考えてるのよ正義^{せいぎ}!!?」

「あの場ではあれが最善だったと言っている!!?」

正義^{せいぎ}と九留美^{くくるみ}が声を上げて口論していた

先日のバーナー・ノーワンの事件で正義^{せいぎ}は部隊から外れて単身で先行していたのだ
た

「最善だって…それでも結局ノーワンは逃しているじゃない…!!?」

「それはー」

脳裏^{りんね}に輪音^{りんね}の顔が浮かぶ

『こんな、こんなボロボロになってまでノーワンたちと戦うこの人に、銃を向けることが
あなたの『正義』なんですか!!?』

あの時の言葉を思い出し、目を伏せながらかけた眼鏡を直す

「……想定外のアクシデントが、あったただけだ」

九留美はハアと大きなため息を吐きながら頭を抱える

「そういうことにも対処するために、部隊があるのを忘れないで」

背を向けて立ち去ろうとする正義を九留美が呼び止める

「あなたの気持ちはよくわかる。でも、そんな命を張るやり方は」

振り向いた正義が九留美の胸ぐらを掴む

「わかる、だと…?」

「お前に、ただの同僚のお前に俺の何がわかるんだ…ツ!!?」

怒りを込めた言葉を吐き捨て、正義が立ち去る

捻り上げられた襟元を直し、九留美が胸に手を当てる

「わかるわよ…」

『—■■■■さん』

九留美の脳裏に誰かわからない若い声が響き、自分と手を繋ぐ黒塗りの何者かの姿が過ぎる

「私だって、ノーワンに焼かれた過去があるはずなんだもの…」

「キミが私の方を直接訪ねてくるとは意外だねえ」

平坂靈園の小屋の一室

その中の仕切りカーテンの中に腰掛けたキャンドルがニヤニヤと愉快そうに笑う

「で、聞きたい話とはなんだい輪音ちゃん？」

キャンドルの向かいに腰掛けた輪音がキャンドルを見据える

「……ジヨンドウのキャンドルさんなら、ノーワンを人間に戻す方法を知っているんじゃないませんか…!?？」

輪音の問いにキャンドルが笑みを消し、真剣な表情になる

「東吾さんが、あのままどのみち死ぬしかないなんて、そんなのあんまりです…どうにか、どうにか人間に戻す方法を…もしくはノーワンでも変身しないままにする方法は、

ありませんか!?？」

キャンドルは深く背もたれに身を預け、長いため息をこぼす

「はつきり言おう。不可能だよ、そんなことは」

「……ッ!!?」

無情な答えに、予期していたこととは言え輪音りんねが悲痛な顔を見せる

「ノーワンという存在は、ヒトの生の概念である白のアニマと死の概念である黒のアニマを混ぜ合わせた灰色のアニマを魂として生まれくる怪物、ヒトならざるものだ。混ざり合うアニマはデスサイズシステムで分断してそれぞれを正常化するか、アニマ干渉波で消滅させるしかない」

キャンドルは手すりに頬杖を突きながら続ける

「分断したアニマの正常化は白も、黒もどちらもだ。黒のアニマの顕在化はどういう形であれヒトの死を意味する。黒のアニマを制御・利用するデスサイズシステムという例外を除けばな」

はあ、とため息を吐き出しながら膝に両肘を置き身を乗り出しながらキャンドルは続ける

「そして、ノーワンに変身しないままというのも無理だ。私たちはともかく、ノーワンの意識は生の喜びと死の苦しみに溺れた状態になっている。そして苦しみ喜ぶが故に、生者を襲い仲間を増やそうとする本能からは逃れられない」

「私たちのようなジョンドウにならねば、な」

キャンドルが自分の胸に手を置く

「それに、トーチのノーワンなら尚更絶望的だ。ヤツのノーワンは人間が押し殺した『自分』を表出させ、主人格を飲み込ませて完成する。主人格に殺され続けた『自分』の殺意・暴力への渴望は、火が付いたら止まらないんだからなあ」

俯く輪音^{りんね}を横目に見ながらキャンドルは爪をやすりで磨く

「たしかに、ジョンドウがノーワンを生み出しその過程で誰かが必ず命を落とすのは『悲劇』だ。だが、人間はそうでなくともいつ『別れ』が来るかなんてことは分からない」

キャンドルは目を細める

「だからこそヒトは、『選択』し『覚悟』しなければならぬ。どんな時でも、どんな辛い場面でも」

「今回はキミに選択と覚悟の時が来た、という訳だ」

立ち上がるキャンドルを見ることがもなく、輪音^{りんね}はただ膝に置いた手を握り締めることしかできなかった

「ヒトは『選択』し『覚悟』する。その瞬間とその行動、それが私を楽しませるんだよ」

「はい。とてもいいと思います」

輪音りんねの言葉に隣かなえの鼎かなえがうんうんと頷く

「下書きでこれなら彩色してからはもつといいだろうなあ……こいつは描き上がりが楽しみだ!!?」

鼎かなえは輪音りんねの方を見る

「そういえば、輪音りんねちゃんはどうな感じ?」

「あはは……私はまだ、構図も上手く決まらなくて……」

苦笑いしながら輪音りんねはスケッチブックのラフを見せる

そこには桜並木やら桜の花やら桜に関連したイラストが描き込まれていた

「桜がいっぱいだねえ」

「はい、お母さんと一度お花見に行った時に見た桜並木がとても綺麗だったので、その時の絵を描きたいと思って」

鼎かなえもスケッチブックを覗きながら輪音りんねに微笑みかける

「輪音りんねならきつと、あたしより綺麗なの描けるよ」

「頑張ってみます……!!?」

にひひ、と笑う五月さつきはカバンからスマホを取り出し、下書きを描いたキャンバスの写真を撮る

「親父に見せてやる。なんて言うかなあ親父」

その言葉を聞いた輪音りんねと十三じゅうぞうが一瞬悲しそうな目を見せた

部活が終わり、帰路を歩く五月さつき

「……大丈夫、大丈夫。親父にならきつと伝わる…」

自分に言つて聞かせながら五月さつきは自宅の町工場にたどり着き、母屋に帰つていく
リビングまで行くとソファに腰を下ろして書類を整理する東吾とうごがいた

すぐに五月さつきに気づき顔を上げる

「五月……」

「……ただいま、親父」

五月さつきはぶつきらぼうにそう告げる

気まずい沈黙がしばし2人の間に流れる

五月さつきが鞆を置き、東吾とうごに近づきスマホから画像を見せた

あの下書きの画像を

「……これって？」

「部活で、書いてんだ。市の美術展に出す用の絵でテーマは『家族との思い出』ってヤツ
で……」

スマホを受け取り、じっくり画像を見る

「家族との思い出……」

不安そうに自分の肩を抱きながら、五月は言葉を絞り出す

「あたしは、小さい頃親父に絵を褒めてもらえたのがすごい嬉しかったんだ。あたしが描いた絵で、笑って驚いて、喜んでくれたのが」

「それから、絵を描くのが本当に好きになった。大好きなんだ」

「だから、将来も絵を描く仕事がしてみたい……大変かもしれない、叶わないかもしれない。でも、やってみたいんだ……!!?」

五月さつきの告白を東吾とうごは黙って受け止める

「……血は争えんな」

観念したように東吾とうごは笑う

リビングから出てすぐに戻ってきた東吾とうごの手には古びた筆が一本握られていた

「それ……親父の……?」

「なんだ、もう見つかっていたのか」

参ったな、と東吾とうごが頭を掻く

「五月。絵の道は大変で、厳しい。職業とするなら尚更のこと大変な道のりになるだろう。私も、痛いほど思い知ったからな」

娘の小さな手に父が筆を握らせる

その筆の柄には『TOUGO・I』と名前が刻まれていた

「今は心配しなくていい。私がお前を支えるから」

「五月の優しく、美しい絵なら、私が見れなかった景色も形にできるかもしれんしな」

五月は渡された筆を大事そうに握る

照れ臭そうに東吾は鼻の頭を搔いていた

ードクンツ

「ーん!??ぐお……ツ!!?」

東吾が突然胸を押さえて膝を突く

「親父……?親父イ!??」

五月がうずくまる東吾に駆け寄り肩を揺する

「なんだよ、どこか痛いのか…!!? 苦しいのか!!?」

不安そうに問いかける五月さつきを東吾とうごが振り返る

灰色の炎が揺れる無機質な瞳に五月さつきは思わず尻餅をつく

『ーいやあ? すこぶる気分がいいなあ…!!?』

父の姿をして、父のものではない邪悪な顔で笑うそれを睨み、五月さつきが声を絞り出す

「…お前、誰だよ…!!?」

『オイオイ、愛しい親父に聞く口かよ、それが』

東吾とうごだったものは愉快そうに笑いながら両手を開く

《剣》のアニマルカナが胸元から体内に入ると東吾とうごが灰色の炎に包まれ、焼け落ちた体に新たな蠟の体が再構築される

バーナー・ノーワンに変貌し、その頭部の骸骨がカタンと口を開きより濃密な灰色の炎が噴き出し、笑っているような顔に変化する

「ーハハハハ!!? やつと!!? やつと体が手に入ったぜえ!!?」

バーナー・ノーワンが高笑いしながら体のシリンドラーを駆動させる

「な、ば、バケモノ…!!? 親父、親父をどこやったア!!?」

【ああん？ 喧しいガキだなあ】

バーナー・ノーワンが右手のマズルで五月の頭を殴りつける

「ーッ、ああ…!!？」

加熱されたマズルに殴られた右目の上あたりが赤く焼ける

【ここにいるだろお？ もつとも、今のオレはお前の親父が押さえ込んで殺した過去の自分だがあ。こんなしみたれた町工場に押し込めて、オレの夢を否定しやがったこの家を、なくしちまいたくて仕方がなかった時のなあ!!!】

バーナー・ノーワンが家の中に灰色の炎を振り撒く

リビングが燃え上がる

昔2人で撮った写真を貼っていたクリップボードが、東吾が大切に使っていたパソコンが、五月が仲直りのため買ってきていた父の大好きだった2人の大好物のどら焼きが、炎に包まれて消えていく

「親父…なんで、なんでこんな…!!？」

恐怖と混乱で身動きすらできない五月が絶望の声を漏らす

【ハハハハ!!？ 燃えろ!!？ まとめて全部燃えちまいやがれ!!？！】

バーナー・ノーワンの腕のバーナーが五月さつきに向けられる

「はあッ!!?」

そこに燃え上がる家の壁を蹴り破り、黒い影が飛び込んでくる

影はバーナー・ノーワンを蹴り飛ばし、五月さつきの下に降りるとその体を抱え上げ、蹴り破った壁から外に離脱する

外は夜になっており、工場から少し離れた空き地に怪人と五月さつきが降り立つと五月さつきが優しく降ろされる

「五月さつきさん!!?」

へたり込んだままの五月さつきに輪音りんねが駆け寄る

「輪音りんね……」

呆然としたまま顔を上げる五月さつき

「親父が…親父がバケモノになつちまつた…あんな、あんなの親父じゃない…!!? 親父が、大切にしてきた工場りんねに、あんな……」

輪音りんねの肩を掴み、讒言うわごとのように叫ぶしかない痛々しい様子を輪音りんねはただ見守ることしかできなかった

その2人に怪人ーレクイエムが背を向ける

「レクイエムさん…!!?」
輪音が呼び止め、レクイエムが振り返る

「……東吾さんを、お願いします……!!?」

ぎゅつと胸を握り、絞り出した願い

それを聞き届けたレクイエムは、重々しくゆっくり頷き燃え上がる町工場へとバイクに跨り疾駆していった

埋葬部隊本部

「ノーワンのアニメ波動を感知!!?」

「場所は逸羽製作所!!? エネルギー反応が今までよりも高いです!!?」

オペレーターからの報告を受け、部隊員たちが装備を纏って出動していく
機関銃を手に装甲服を着た正義

その前にプロフェッサー・ジユナが現れる

「…プロフェッサー? 何の用です?」

「こ、こちらを……あ、あ、あなた、に…」

ジュナは手にした大型のアタツシケースを開いて見せる

そこには純白の機構と付属装備らしいガジェットと拳銃が収納されており、蓋裏には『^{ヴァ}V A J R A』のロゴが入れられていた

「!!? 完成したのか…!!?」

「最終調整段階…です…じ、じ、実戦でのデータを、お願いし、しますよ…隊長…」

アタツシケースを受け取る手に力が籠った



燃え盛る工場の中、炎を吹き出し続けるバーナー・ノーワンの前にレクイエムがコートの裾をはためかせながら現れる

「また来たのかよ!!? しつこいヤツだなお前も」

「何度でもやってくるとも。俺は死神で、鎮魂歌だ」

レクイエムが構える

「貴方の生、無駄にはしない…!!?」

「その灰色の死も、生も、今ここで白黒つけて終わらせる!!?」

レクイエムが駆ける

燃え上がる工場の崩れゆく柱を蹴り、バーナー・ノーワンの炎を回避しながら跳躍し、バーナー・ノーワンに拳を打ち込む

よろめきながらも炎を吹き出し反撃するのを回避しつつ、レクイエムのパンチやキックが打ち込まれ、バーナー・ノーワンを押し込んでいく

「ぐっ!? 舐めんア!!!」

バーナー・ノーワンが吠えると背中から新たなバーナーのマズルが伸び、そこから火炎弾が無数に放たれる

バク転やローリングで回避していたレクイエムだが、厚い弾幕全てを回避しきることはず、いくつかの火炎弾を腕を閉じ防御して受け止める

「弾幕には弾幕だ」

《エクスキューションアップ》

《リバース・テンバランス》

ギロチンにより落とされた頭を蹴り飛ばしぶつけ、バーナー・ノーワンを怯ませると戻ってきた頭をキャッチし被り直し、ギロチン型のバイザーが装着される

【吹き飛ばえ!!】

バーナー・ノーワンが再び火炎弾の雨を降り注がせる

レクイエムは火炎弾を睨みながらバイザーを指でなぞる

ホロデイスプレイ上で迫り来る火炎弾が全てロックオンされる

「はっ!!?」

ブラストロファイヤーをマグナムモードで構え、黒炎弾を放つ

放たれた弾丸は狙い違わず全ての火炎弾に命中し、それを撃ち落とした

その爆炎の中から飛び出したレクイエムがブラストロファイヤーをバーナー・ノーワンに向け
正確無比な弾丸が突き刺さり、バーナー・ノーワンを吹き飛ばした

燃え盛る工場を眺めながらジャック・ランタンが愉快そうに笑う

『フヒヒ、中々いいノーワンに育ったねエ。まあトーチくんつてばもう興味ないとかつて放置しちゃったけどサ』

カツンと錫杖を地面に突き立てる

『まあそのままやられるのは癪だし、ワタシも十三じゅうぞうくんくんにちよーつと、ちよつかい出してみようかなア〜♪』

ランタンが愉快そうに笑いながら工場へ歩み始める

が、後方から響く重い足音にその歩みを止めた

『おやア?』

振り返った先には2人分の人影があった

片方は純白のアンダースーツに青い装甲を装着した人物

青い十字の形の複眼が光る「仮面」と左腕のみの厚い装甲、腰からたなびくマントが目立つ

もう1人は同じ純白のアンダースーツに紫の装甲を纏っている

菱形の紫に光る大きな複眼の「仮面」と背中から体の前方まですっぽりと覆う深い紫のマントが特徴的だった

「ジヨンドウ、ジャック・ランタン。貴様をこれより埋葬する!!?」

十字目の怪人が告げ、腰に装備していた特殊銃で攻撃する

放たれた白い弾丸をランタンは錫杖で撃ち落とす

『乱暴だなア……しかし興味深い』

銃撃を放ちながら突撃してきた怪人をランタンが錫杖で殴りつけようとするが装甲に覆われた左腕で防がれ、ガラ空きになった腹に銃口を押し当て、ゼロ距離から弾丸を乱射する

『ぐ、ぶうつ?!?痛いじゃない、かッ!!?!?』

ランタンが錫杖を回すとその周囲にカボチャ型の爆弾が多数出現する

『ほうら!!?!?お返しだ!!?!?』

錫杖を回し、ランタンが爆弾を十字目の怪人に投擲する

《ARMAMENT CONTROL》

《ACTIVE:HERMIT》

機械的な音声が響くと共に後方に待機していた菱形目の怪人の複眼や全身のラインが紫に発光

マントと思われるいた背面のパーツが4枚離脱し、自律機動して爆弾を全て撃ち落とす

『なっ、なななっ?!?』

十字目の怪人がベルトから取り出したカードー白いアニマルカナを手にした銃の側面にリードする

《EXECUTE FORCE》

銃身が縦に展開、開いた部分に白と蒼のエネルギー光が漲っていく

「正義、執行!!？」

《PANI^パSHMENT^{ニツ}:JUSTICE^{シユメン}》

放たれた白と蒼の光弾がランタンに直撃

二色の稲光を撒き散らしながら盛大な爆煙を上げる

十字目の怪人は油断なく銃を構えている

『いやれやれ、少し驚いちやったじゃないかア』

爆煙の中からぐるぐる巻きになったランタンが現れ、自身の体に巻き付けていたストールを引き剥がして肩を竦める

「まだ届かないのか…!!？」

十字目の怪人が銃を向ける

ランタンはヒラヒラと手を振りヘラヘラと笑みを崩さない

『ヒヒヒッ、まさか六美^{むっみ}サンが作り出した以外に仮面ライダーのシステムを完成させるなんてやるねエ。十七^{じゆな}クンかな？それとも影斗^{かげと}クンかなア？』

『まあいいや。明日からはまた色々面白くなりそうだア』

ランタンがパチンと指を鳴らすと2人の白いライダーの周りに無数の燃え盛るカボチャが降り注ぎ、大きな爆発を発生させる

菱形目のライダーが十字目のライダーに近づき、自身ごと4基のユニットから展開したエネルギーシールドで防御するが、晴れた爆煙の中にランタンの姿はなかった

「逃した…でも、今までの兵装よりは―」

「まだだ」

十字目のライダーが振り返り、炎が弱まりつつある町工場を見据える

「―埋葬すべきターゲットはまだ残っている」



炎に包まれた工場の中、バーナー・ノーワンの火炎を回避しながらレクイエムはブラストロファイヤーをサーベルモードに変化させ、肉薄して攻撃を続ける

「ハアツ!!?」

レクイエムの一閃がバーナー・ノーワンの腕のバーナーを切り裂き、返す刀でもう片方のバーナーも破壊する

「な、クソがア…ツ!!?」

ヤケクソで襲い掛かろうとするバーナー・ノーワンにキックを撃ち込み、吹き飛ばす吹き飛ばされたバーナー・ノーワンが床面を転がり、よろめきながら立とうとするのを見ながら、レクイエムは2挺のプラスチックファイバーをドッキングしてフィニッシュモードにする

「恨むといい、怒るといい。お前の黒いモノは俺が全て引き受けてやる…」
いつもよりゆっくりと、武器をバーナー・ノーワンに向ける

ホロデイスプレイ上でもバーナー・ノーワンがロックオンされた

「……………貴方の生は、無駄にさせない…!!?」

レクイエムが引き金に手をかける

「ー待って!!!」

レクイエムとすれ違うように燃え上がる工場に入ってきた人影がバーナー・ノーワンの前に立ち塞がり、両手を開く

五月さつぽだった

「五月さつぽさん!!?下がって!!?巻き込まれちゃう!!?」

追いついてきたらしい輪音りんねがレクイエム背後の工場入り口から叫ぶ

「おい!??そこは危険だ、早く離れろ!!?」

「嫌だ、嫌だ!!?あたしの、あたしのたった一人の親父なんだ…!!?」

「……キミのお父さんは、もういない!!?」

「そんなワケがない!!?」

泣き腫らした目で背後のバーナー・ノーワンを振り返る

「あんなになっても…あたしのこと忘れても…あたしの親父は…お節介で、一言足りなくて、お人好しで、世界一優しい親父はただ一人なんだよ……」

「まだ、ありがとうも、ごめんも言っていないんだよオツ!!?」

五月さつきの叫びにレクイエムは引き金にかけた指を緩める

ブラストロフィーの銃口を一旦下げようとし

《EXECUTE FORCE》
《P AN I S H M E N T : J U S T I C E》

冷淡な機械音声を耳にした

「ツ!!?危ない!!?」

レクイエムは咄嗟に駆け出し、五月を抱えて飛び退く

その直後、レクイエムと五月がいた直線上を蒼白のエネルギー弾が螺旋に回転しながら飛来し、延長線上にいたバーナー・ノーワンの胸を貫き、工場奥に着弾・爆発する

「親父イイイ!!」

レクイエムに抱えられたままの五月が悲鳴を上げる

貫かれたバーナー・ノーワンは悲鳴を上げることなく膝を突いて倒れ、灰色の火柱をあげて爆散する

二度の爆発の衝撃で崩落が加速し始めた工場を見たレクイエムが素早く五月と共に脱出し、輪音りんねの側に降り立つ

レクイエムたちの目線の先に立つ純白のライダーは、エネルギーの残滓がスパークする銃を下ろして崩れ去る工場を前に業務的に告げる

「埋葬、完了」

「…お前は…ツ!!?」

純白のライダーはゆっくりとレクイエムに向き直り、銃を向けるが、突如警告音が鳴り響く

『せ、正義隊長……ここ、ここ、今回は、時間切れ、です……』

「…了解した」

純白のライダーは銃をベルトのホルダーに固定し、バックルを開いてアニマルカナを取り外す

《OPERATION COMPLET》

装甲からのエネルギー排気と共に変身が解除され、その中から十一宮 正義が現れる

「…命拾いしたな、非死者0号」

現れた正義をまつすぐレクイエムが睨む

「五月さん…五月さん!!? しっかりして!!?」

放心状態になっていた五月の肩を輪音が揺する

しばらくして目を覚ました五月は隣の輪音を不思議そうに見遣る

「あれ? 輪音…? あたし、なにしてたんだっけ…?」

五月がゆっくりと立ち上がり、火傷になった右のこめかみを痛そうに押さえる

「なんか、いつてえ…あれ? (ここどこ)…?」

燃え落ちている、とはいえ元自分の家だった工場の後を見て首を傾げる五月を見た
輪音りんねの表情が歪む

「ここは…五月さんの家じゃないですか…!!?」

「家って…なんで? あたしべつに工場の娘じゃないんだけど」

「…ツ、五月さんのお父さんが、町工場の社長さんじゃないですか!!?」

「…お父さん? 誰それ?」

「ーッ」

本当に何も覚えていないと言った顔で不思議そうに首を傾げる五月さつき

頬を掻こうとしてその手に握られていた筆に気づく

「あれ? あたしいつの間に筆なんか…?」

ぼろぼろになった古い筆を不思議そうに見る

何もない柄を眺めていたはずなのに、五月の目には涙が溢れ出していた

「…あ、れ? あたし…なんで、泣いて…? あれ…?」

五月さつきの脳裏に記憶がフラッシュバックする

自分が描いたイラストを誰かに見せる幼い自分

誰かと喧嘩する自分

誰かに褒められて嬉しくなる自分

その「誰か」は、黒く塗り潰されてわからなかった

五月さつきが胸を強く押さえて膝を突く

「痛い……胸が痛い……なんで、なんで……!? ? ? なんで、涙も止まらない、なんでなんだよお……!? ? ?」

錯乱した様子を見せる五月さつきを駆けつけた九留美くるとみが抱きしめる

隣に呆然と立つ輪音りんねを見て告げる

「……この子は、ノーワンの関係者として私たちが保護するわ」

そのまま九留美くるとみは錯乱したままの五月さつきの肩を支えて連れて行く

それを見送った正義せいぎは口を開く

「これが最良だ。あの少女は怪物になった父のことをじきに忘れ去る。そうして、日常に帰るんだ」

輪音りんねは正義せいぎを睨み、唇を噛み締める

「日常になんて帰れません!!?」

「五月さつきさんの日常は、東吾とうごさんのいた日常は…!!?もう…!!?」

「―どの道、死んだ命は戻らない。哀しみすぎるなら、跡形もなく忘れ去る方が救いになる」

「それが俺たちの為す『正義』の形だ」

正義せいぎは眼鏡を正し、輪音りんねとレクイエムに背を向けて去る

残されたレクイエムはただ俯き、拳を握っていた

朝焼けの光が、住むものの居なくなつた工場の跡地をただ照らしていた

第7話「6の正位置：暴走、パニックトレイン!!？」

東吾^{とうご}の事件以来、五月^{さつき}は学校に来ていなかった

当然だ。東吾^{とうご}ーバーナー・ノーワンの『埋葬』によって五月^{さつき}は父の記憶を失い、それにより錯乱状態になっており、埋葬部隊に保護される形になっていたのだ

未完成になってしまった絵を輪音^{りんね}が見つめる

小さな女の子を撫でる大人

その優しい人は、もういない

記憶にも残っていないのだ

「五月^{さつき}さん……………」

輪音^{りんね}は涙を堪え、その絵を美術室後方の棚に丁寧にしまつて美術室を後にする

その美術室に遅れて入室した人物がつかつかと棚に近寄り、輪音^{りんね}がしまった五月^{さつき}の絵を取り出す

「へへ、いい絵になったじゃないか」

フツ、と笑つて愉快そうに告げた

埋葬部隊付属医療センター

十一宮 とみや 正義 せいぎはある個室の中に入る

真つ白な部屋の中、ベッドに腰掛けてうづくまる一人の少女がいた

ベッドの上や床には多数の紙や画材が散乱している

この部屋で保護された少女が注文したものだ

「逸羽 いつは 五月 さつき。調子はどうか？」

ベッドに座る彼女に視線を合わせてかがみ込むと、正義 せいぎは表情を変えずに問う

うづくまる少女―逸羽 いつは 五月 さつきはそのそと顔を上げる

酷い顔だった

火傷を負っていた右の額からこめかみには包帯が巻かれ、髪はボサボサになっている

濃い隈と腫れぼった目から、ずっと眠れずに泣いていたことが窺える

「……眠れないんだ…眠れない…怖い…」

「何が怖いんだ。俺たちに解決できることなら、いくらでも手を貸す」

いつもより幾分か優しい声色で正義 せいぎが告げ、その肩を撫でる

「……怖い、夢を見る…」

「夢？」

「……夢は、怖くない…あたしが、誰かと日常を過ごす夢…なんだ」

五月が側にある紙を手取る

そこには絵が描かれていた

小さな少女の頭を撫でる誰か

その誰かの部分は乱暴に黒く塗り潰されている

「……その誰かが、分からないんだ。真っ黒に塗り潰されてて、目を凝らしても見えないし……思い出せない……間違いなく、あたしの記憶なのに……!!？」

五月が目を見開きながら頭を抱え、体を震わせはじめる

ギュツとその胸を強く押さえる

「……なのに、なのにそれを見るたびに胸が苦しくてたまらない……!!？痛くて痛くて、涙が止まらなくなるんだ……!!？ワケが分からない……怖いんだよ……!!？」

錯乱する五月の肩を優しく撫で、正義が落ち着かせる

その様子を唇を噛み締めながら見守り、正義が立ち上がる

「……俺から、ここの医療従事者に相談しておく。今は、とにかく休め。キミは大きな事件に巻き込まれて非常に疲弊している」

正義はそれだけ告げると個室を後にする

「―食事は疎かにするな。食欲が無くとも、食べておいた方がいい」

病室棟の廊下を進みながら正義は五月の顔を思い出す
同時に、あの黒い怪人の声が脳裏に過ぎる

『……お前の『正義』は、ここにあるのか？』

正義は舌打ちをしながら立ち止まり、壁を強く殴りつける

「あ、あの…せ、せ、正義隊長……ここ、ここは、病棟近く、ですから…どうか、お、大きな物音は……」

そこに通りかかったプロフェッサー・ジュナがタブレットを抱きしめながらおずおずと告げる

ジュナの顔を睨み、正義がジュナに詰め寄る

「逸羽 五月のあの様子はどういうことだ!!? 何故、何故埋葬したノーワンの記憶が完全に失われている!!?」

慌てふためくジュナを壁際に追い詰め、片腕を突きながら問い詰める

埋葬部隊が用いる兵装ーアニマ干涉兵装による攻撃でノーワンを『埋葬』すると、白と黒のアニマに戻ることなくアニマは消滅し、その結果として元の人物と深い関係にあった存在の記憶や生きた記録は完全に消滅する

トラフィック・ノーワンイーに変貌した母親が埋葬され消滅した際、その娘である少女も母が元からいないと認識し、失ったことすら自覚してないため精神状態は落ち着き、すぐに養護施設預かりとなって日常を過すごしている

だが、五月さつきの様子は明らかに違っていた

「い、い、いいいや、そそそそその!!？アニマのえ、影響はここここ個人差がありますから!!？」

「記憶の安定に時間がかかった被害者は確かにいた。だが、5日も経つても記憶が安定する様子もないのは異常だ!!？家族が埋葬された関係者もここまでのことは今までなかったはずだ!!？」

ままごごするジュナを見下ろし睨みながら正義せいぎが問い詰める

「アニマの研究をしている貴女は、わかっているんじゃないのか、こうなる原因が!!？」
「わた、わたたた、私、は…!!？」

「―落ち着きたまえ、十一とみや宮 正義隊長」

過呼吸になり始め、いつもより落ち着きがなくなりつつあるジュナの言葉を遮り、明るい調子の声が廊下の奥から響く

「……八十八局長」

廊下の奥から現れたのは白と青のコートを着た初老の男性だった

柔らかそうな笑みを浮かべて正義に手をあげて挨拶する

「ジュナくんでも、逸羽 五月くんの状態はまだ解明できていない。だから、私も同行して原因の究明に来たのだよ」

男一埋葬部隊管理局長・八十八 影斗が微笑みながら告げ、正義を宥める

「それに、アニマの研究について真髓まで知り得ているのは第一人者だった誘波 六美

博士だけ。そして彼女は……もういない……」

八十八が目を伏せ、悲痛そうに告げる

「私とジュナくんは彼女の同僚だったとはいえ、アニマへの理解度に関しては彼女には勝てない。だから、研究と検証が必要なんだ」

八十八が正義の肩を叩き、廊下を進む

「安心してくれ。キミたちが救った彼女は私たちが救おう。キミは、より多くのノーワンを『埋葬』、殲滅してくれたまえ」

「ライフアクティヴシステムー仮面ライダーヴァジュラの運用センス、とても素晴らしかった。調整が完了したアレを、キミなら十二分に扱えるはずだからね」

微笑みながら告げた八十八の言葉を受け取り、正義は重々しく頷く

「了解、しました」

八十八の後方に追従しながら空のビニール袋で呼吸を整えるジュナを目線だけで振り返りながら八十八が口を開く

「……逸羽 五月は、アニマ抗体体質なのかね？」

呼吸を整えたジュナが袋を仕舞いながら答える

「い、今のところは…他数例と、お、お、同じ所見、同じあ、アニマ波形が見られます、か、から」

「キミがそう断じるならばほぼ間違いないだろうな。レクイエムに撃破される前に我々で埋葬できたのは運が良かった」

八十八が微笑む

「アレをもう一つ準備しておいてくれ。他の手続きと彼女への治療は私が行おう」

「―彼女らの分析が進めば、我々…否人類は大きな躍進ができるだろうからな」



五月たちの事件から1週間後の金曜日

棺ひつぎのみやノ宮市中央駅前広場に私服姿の輪音りんねがベンチに腰掛けていた

「輪音ちゃんお待ちせ!!?」

「ぶんぶんと手を振りながら近づいてくる鼎かなえの姿を見て、輪音りんねも立ち上がり手を振る

「鼎かなえ先輩、おはようございます」

「うん、おはよー!ごめんね待たせちゃった?」

「いいえ、私もさつき来たばかりなので大丈夫ですよ」

それを聞いた鼎かなえがよかつたよかつた、と頷く

先日の木曜日。輪音りんねは鼎かなえに隣町まで美術館を見に行こうと誘われたのだ

「隣町の高校生の出品作品が展示されるから、よかつたら一緒に見に行こうよ」

幸い金曜日は創立記念で学校は休みなので輪音りんねも特にこれといった用事がなかった

ので快くそのお誘いを受けたのだ

普通は平日であるためか電車の中はがらんとしており、座席にはすんなり座ることができた

「あつちの美術館の展示も色々あるから見応えあるよ!高校生美術部の作品と侮るなかれ!!?色んな画材とか描き方されてる作品が盛り沢山だから、絵の勉強にももってこいだよ!!?」

「へえ…そうなんです。私はまだ美術とか絵とか分からないことが多いので、良い勉強ができればいいのですが…」

輪音が返答を聞いて鼎が目を細める

「…輪音ちゃん、なんかあった？」

「え？何もありませんよ？」

「ほんとに？なんかここ一週間ずっと元気ないけど」

頬杖を突きながら鼎が輪音を見つめる

「五月ちゃんとなんかあったの？」

「ーあ」

輪音が口を開きかけ、すぐに手を振る

「な、なにも無いですよ。五月さんとは何も無いです。ただ、もう一週間もお休みしてい

るので、心配ではありませんが…」

輪音が答えを聞いて鼎は腕を組む

「…そっか」

平坂霊園

「ー現れたな。棺ノ宮中央駅近くの道路だ」

「そうか。わかった」

キャンドルが右のピアスを指で弾きながら十三に告げる

十三はコートを着てデスサイズドライバーギロチンを手にし扉に手をかける

「この前のバーナー・ノーワン、何故埋葬部隊に遅れをとった？」

キャンドルが十三の背に問う

「……アクシデントが多すぎた。輪音ちゃんや逸羽さんの乱入でこちらの攻撃を控えざるを得なかった」

「本当にそれだけか？」

キャンドルの言葉に十三が振り返る

「……どういう意味だ？」

「お前、何度か攻撃を躊躇っただろう？アレが、逸羽 五月の父親だと聞いて」

キャンドルが背中越しに十三を睨む

「ノーワンは化け物だ。元人間だとしても、それは元の話。人間に戻すことはできず、埋葬部隊が消滅させるか、お前が処刑して死に直させるか、それしか選択はない」

「ー忘れた、とは言わさないぞ？」

キャンドルの言葉に十三じゅうぞうが拳を握る

「……そんなことは、わかっているさ」

「それだけ告げた十三じゅうぞうが去っていく」

残されたキャンドルはタロットカードの束をシャッフルし、2枚のカードを取り出す
「《恋人》、そして《死神》の正位置…か」

出た結果を眺めたキャンドルは不機嫌そうな顔を一瞬見せる

机の上に放った2枚のタロットが灰色の炎を上げて燃え落ちた

ひつぎのみや
棺ノ宮中央の大通り

平日の昼間ながらそこそこの交通量があるそこにふらふらと病院着姿の少年が現れ、
目を輝かせる

「すごい…車がたくさん…!!？」

少年はガードレール越しに行き交う車に視線を向けて歓声を上げる

微笑ましい姿に通行人も思わず顔が綻んでいた

「これならたくさん遊べる!!？」

少年がバンザイするとその胸から灰色のアルカナ―《愚者》の透かしが入った《杖》のカードが現れ、炎を上げて少年の姿を怪物に変貌させる

灰色の蠟を人型に無理矢理固めたようなスリムな人型

その体には壊れた車のおもちやが取り込まれ、医療器具のようなチューブが体の各所から伸びていた

【よいしょつ】

怪人ノーワンはガードレールの上に立つと行き交う車2台に手のひらを向ける

そこから放たれた灰色のリング状の光線が車に当たると、突如道の真ん中で車が停止し、玉突き事故が起こる

【それえ!!?】

ノーワンは無邪気に両手を振り回す

その動きに従うように、停車した2台の車は突如暴走し、多数の車を吹き飛ばしながら尚も動き回り続ける

そのうち2台の車はそれぞれ別の車と電柱に衝突し、大きく車体を凹ませながら停車し、煙を上げ始める

【あははははは!!?・おもしろーい!!?】

悲鳴を上げて逃げ惑う人々の中、ノーワンは両腕をパタパタさせてただ愉快そうに笑っていた

そこに一台の黒いバイクが走ってくる

バイクから降りてきた男じゆうでつ十三じゆうでつがデスサイズドライバーを装着する

【あれー?】

「妙な遊びはそこまでだ、ノーワン」

《サーティーン：デス》

十三じゆうでつがアルカナをセツトし、右腕を析るように一文字に引く

「変身」

《エクスキューションアップ》

《リバース・デス》

十三じゆうでつの首にギロチン台が装着され、首が落とされる

【うわっ、頭取れちゃった…!!?】

驚くノーワンを前に落ちた頭を戻してレクイエムへの変身が完了する

【わあ!!?すごい!!?】

変身を興味深そうに見ていたノーワンがパチパチと両手を叩く

「…なんか調子の狂うヤツだ」

ばつが悪そうに頬を掻きながらレクイエムが疾駆し、ノーワンに拳を撃ち込む

【あうっ!!?痛い…!!?】

ノーワンが殴られた場所を押さえて泣きそうな声を出す

【おじさん…痛いことする人…?】

「おじさ…? んんツ、痛いことも何も、ただお前を止めるだけだ」

レクイエムが再びノーワンに迫る

【痛いことするなら、どつかいて!!?】

ノーワンが声を上げ、周囲の車に手をかざす

事故に巻き込まれ横転していた車たちが突如エンジンを噴かし、中にはタイヤが外れたものもあるというのにレクイエムに向けて爆走を始める

「なっ!!?」

ガードレールを突き破りながら走ってきた車たちを回避していく中、その車の一台にまだ人が取り残されているのを見つける

レクイエムは人が取り残された車に飛び乗るとアニマルカナを交換する

《リバース・テンパランス》

テンパランスフオームになったレクイエムはブラストロフィーを取り出し、サーベルモードに変化させる

バイザーのホロディスプレイに車内部の透過映像が映り、切断しても問題ない場所のガイドが表示される

「はっ!!?」

二刀のサーベルで車体を切り裂き、露わになった人間を引っ張り出して抱えると側に停車させていたグレイブスターに縛り固定する

「近くの病院まで、頼むぞ」

スマホでグレイブスターに指示を入力するとエンジンが点火され、無人で運転を開始して走っていく

【それ、それ!!?】

ノーワンが手を振り回し、更に車を走らせてくる

「ふっ!!?」

マグナムモードに切り替えたブラストロフィーから炎弾を放ち、車を粉砕、それを見ていたノーワンは楽しそうに跳ねながら手を叩く

【すごいすごい!!?花火みたい!!?】

そのノーワンの様子にレクイエムは首を傾げる

「なんなんだこのノーワン…? 妙に幼い気がするが、子供から生まれたノーワン…なのか…?」

警戒していたレクイエムを他所にノーワンは何かを見つける

【あ、電車だ!!? 乗ってみたかったんだ!!?】

「電車に、乗ってみたかった…?」

【よーいしょ!!?】

ノーワンは呑気な掛け声でジャンプすると建物の屋根をジャンプで伝いながら走り行く電車の方に向かっていく

「あ、待て!!?」

レクイエムもそれを走って追いかけていく

同時刻

レクイエムとノーワンの戦闘場所から線路を挟んで向かいに位置する別の大通り

【あはは!!?あははは!!?楽しいなあ!!?楽しいなあ!!?】

そこもまた多数の車が暴走し、酷い事故を起こしていた

その中央に手を振り回してはしゃぐ怪物ノーワンがいた

不思議なことにここにいるノーワンはレクイエムが戦っていたものとよく似ていた

そこに大型の白バイと装甲車両が駆けつけ、正義と九留美、そして埋葬部隊の隊員たちが降りてくる

「フェーズ2のノーワンか」

「車を操作して事故を誘発するなんて…厄介なことを!!?」

ノーワンが正義と九留美に気付き、首を傾げる

「おじさんとおねーさん、誰？遊んでくれるの？」

「ふざけるな。お前を埋葬するのが俺たちの仕事だ」

正義と丸留美が手にしたアタッシュケースを開き、同型のベルトを取り出して腰に巻く

《ヴァジャラ ドライバー》

双方共に腰の両サイドに付いたレバー付きのデバイスをバックルに向けスライドさ

せ、戻す

《チャージ コンプレット》

移動と共に中央のバックルに電撃が走り、両側に開く

2人がそれぞれのアニマルカナを取り出す

《イレヴン：ジャステイス》

《ナイン：ハーミット》

アニマルカナを起動するとそれをバックルにスロット

正義は右腕を横に伸ばし、ゆっくりと縦に下ろす

丸留美は目を閉じ、右腕を突き上げ左に一文字を描く

「変身!!？」

双方共にバックルのレバーを押し込む

《ACTIVE POSITION》

2人の首に電撃を放つ枷が現れると共にそれを中心に白いアンダースーツが展開、待機していた白バイードミニストレーターと装甲車ハーミットダイザーの装甲や武装がそれぞれ分離し、正義と九留美に装着されていく

装甲の装着完了と共に十字目と菱形目の「仮面」が装着され、発光する

《ELECT:JUSTICE》

《ELECT:HARMIT》

《ADMISSION START》

正義が変身した十字目のライダー仮面ライダーヴァジュラ・イレクトジャステイスと九留美が変身した菱形目のライダー仮面ライダーヴァジュラ・イレクトハーミットがノーワンに相對する

「ー執行を開始する!!?」

正義せいぎの一喝と共に待機していた部隊員が周辺の被害解消と逃げ遅れた人々の保護に乗り出す

《VAJRA's HAMMER》

ヴァジュラ・ジャステイスは背中の中のホルダーに収められていた特殊拳銃を抜き、射撃しながらノーワンへと近づいていく

ノーワンは手を振り回し、近くの車両を盾に使い、その上に飛び乗ると腕を大きく広げる

「それッ!!？」

浮かび上がった車とバイクがヴァジュラ・ジャステイスに迫る

「丸留美!!？」

「了解ッ!!？」

後方待機していたヴァジュラ・ハーミットが腰の右側のレバーを倒し、先端のスイッチを押し込む

《ARMAMENT CONTROL》

《ACTIVE:HARMIT》

ヴァジュラ・ハーミットの背から分離したアーマーユニットが浮遊し、シールドになつて降り注ぐ車両やバイクを受け止め弾く

【うわわ…!!?】

「ハッ!!?」

ヴァジュラ・ジャステイスが跳躍し、ノーワンを車の上から蹴り落とす
落とされたノーワンは倒れたままバタバタと手足を振る

【痛い痛いいゝ!!?・痛いことしないでよ!!?】

ノーワンが立ち上がり腕を振り回すと、体から分離したミニカーたちがヴァジュラ・ジャステイスに襲いかかる

ヴァジュラ・ジャステイスは背中のホルダーから新たなガジェットヴァジュラアームズを取り出し素早く変形させる

《MODE: MAGNUM》

銃型に変形したアームズを構え、二丁拳銃でミニカー爆弾を撃ち落とす

「一遊びは終わりか? 悪趣味な遊びだったな」

ヴァジュラ・ジャステイスが冷徹に銃口を向ける

ノーワンは体を震わせ後退していくと、視界の隅に走っていく電車を見つめる

【電車!!? 電車だ!!?】

ノーワンはヴァジュラたちを置き去りに跳ねながら電車に向かっていく

「逃さん!!?」

左腰のデバイス进行操作すると後方に停められていた装甲が離脱しスリムになったアドミニストレーターが走行してくる

それに乗り、エンジンを噴かす

「俺はヤツを追う。あの電車をマークし、必要なら援護を頼む」

「わかったわ!!？」

ヴァジュラ・ジャステイスが電車に向かって走っていく

残ったヴァジュラ・ハーミットは左腰のデバイス进行操作してハーミットデザイナーを呼び寄せ、それに乗り込む



ガタン、と車体の揺れる音が響く

「およ? 何の音だろ?」

電車に揺られていた鼎かなえが首を傾げる

鼎かなえに続いて輪音りんねが周囲を見回していると窓を突き破り、灰色の怪人が電車内に侵入してくる

「うわあく本物の電車だ!!? 僕乗れたんだ!!?」

「ーッ!!? ノーワン…!!?」

怪人ーノーワンりんねのを知ると、輪音りんねが驚愕していると、ノーワンは周りで驚いたり訝し

んだりしている乗客をぐるりと眺める

「人もいつぱい。おもしろい!!?」

「一え、コレなんかの撮影…? ドッキリ…?」

事態が飲み込めずに半笑いになる鼎かなえの隣で輪音りんねは警戒を強めながら睨む

「危ないからみんなじつとしててね!!?」

ノーワンは呑気にそんなことを告げるとどこからか取り出した紙テープを投げ出す

ノーワンが投げたカラフルな紙テープは縦横無尽に伸び、周りの乗客を縛って座席に括り付ける

「うわわツ!!? なんなのこれ…!!?」

紙テープに縛られた鼎かなえがもがくが、テープは解ける気配がない

「遊ば、遊ば!!? たくさん遊ば!!?」

ノーワンは体から大量のミニカーを分離させ、辺りを走らせ始める
そこに割れていた窓から白い影が突入してくる

「ああ…!!? 嫌なおじさん…!!?」

目に見えて不機嫌になるノーワンの前に立ち上がり、ヴァジュラ・ジャステイスが
はあと息を吐く

「大人しくしろ、貴様はここで埋葬する」

ヴァジュラ・ジャステイスがヴァジュラズハンマーの銃口をノーワンに向ける

「ーッ、正義せいぎさん…!!？」

「!? 十つなし 輪音りんね…!?？」

座席に縛り付けられた輪音りんねに気づいたヴァジュラ・ジャステイスが驚きの声を上げる

そこにノーワンが投げたミニカーが飛来するが、一瞥もせずにヴァジュラアームズ・マグナムモードでミニカーを撃ち落とし、視線を戻す

「どっか行つてよ!!？ 痛くしないで!!？」

二丁拳銃の銃撃でミニカーやオモチャを撃ち落とす

爆発するオモチャに乗客が悲鳴を上げているのを見たヴァジュラ・ジャステイスが舌打ちを鳴らす

「このままでは被害が拡大する…一気に終わらせる!!？」

《ARMAMENT CONTROL》

《ACTIVE JUSTICE》

ガイド音声と共にヴァジュラ・ジャステイスの複眼とスーツ上のラインが青く発光し、装甲として纏われていたパーツが一部離脱し、ノーワンの周囲に飛来してビームを放ち攻撃する

「いた、いたたッ!!？ もうっ!!？」

ノーワンが鬱陶しげに腕を振り回し、アーマメントビットを振り払おうとする。その隙を狙い、アームズを腰にしまってベルト両サイドのレバーデバイスをバツクル側に滑らせ離す

《EXECUTE FORCES》

バツクルからスパークし解放されたエネルギーが手にしたヴァジュラズハンマーに装填され、それをノーワンに向けて放つ

放たれた青い稲妻の弾丸はノーワンを青いエネルギー球に閉じ込め、スパークするエネルギーが辺りを青白く照らす

ヴァジュラ・ジャステイスが踏み出した右足に青白くエネルギーがスパークしていく

「正義、執行!!？」

ヴァジュラ・ジャステイスが跳躍し、稲妻を纏う蹴りを放つ

ノーワンの体を貫いたヴァジュラジャステイスが着地するとその背後でエネルギーをスパークさせながらノーワンが爆発、エネルギー球がそれを押さえ込み被害を最小限

にする

「ああ……」

一部の乗客が歓声を上げる中、ヴァジュラ・ジャステイスがノーワンを撃破することの意味を知る輪音りんねは力無く声を漏らす

それを鼎かまこはただ見つめていた

が、予想だにしない事態が起きる

【痛い…痛いよお…!!? 酷いことしないでよお…!!?】

爆発したはずの中から無傷のノーワンがよろよろと立ち上がり、涙を拭うように目の辺りを擦る

「何……!!?」

ヴァジュラ・ジャステイスが驚愕し振り返る

【おじさんやっぱ嫌い!!? 嫌い、嫌い、嫌い!!?】

ノーワンの駄々に呼応するように電車が大きく揺れる

「くっ!!」

バランスを崩したヴァジュラ・ジャステイスが倒れた隙間をジャンプし、前の車両に

向けて逃走する

「待てツ!!?」

すぐに立ち上がったヴァジユラ・ジヤステイスは輪音りんねの方を一瞥すると、そのままノーワンの追跡を再開した

電車の先頭車両

「うわあ、すごい…!!?」

操縦席に入ってきたノーワンを見た運転手が驚愕し、思わず操縦レバーから手を離す

「な、なんだあんた!!?」

【運転手さん僕にもやらせて〜!!?】

ノーワンは紙テープで運転手を拘束して床に転がすと、操縦席に両手をかざして光線
を放ち、めちやくちやにレバー類を動かし始める

電車のスピードが大きく上昇し、車体が大きく揺れ出す

【はやーい!!?カッコいいー!!?】

ポンポンと手を叩き喜ぶノーワンの背後の扉を蹴破り、デスフォームになったレクイエムが追いつく

「よせ!!?電車を止めろ!!?」

【邪魔しないでよッ!!?!】

ノーワンがミニカー爆弾を放ちレクイエムを吹き飛ばす

先頭車両から転がり出たレクイエムの前に飛び出してきたノーワンが紙テープで操縦席への道を閉ざす

【通行止めです!!?!】

立ち上がるうとするノーワンの肩を踏みつけ跳躍したノーワンはスキップするように後部車両に向けて去っていく

「ほんとやりづらいヤツだ…!!?!」

レクイエムは隣の車両に移るとノーワンに組み付き、パンチを打ち込み、怯んだ隙を逃さず回し蹴りで蹴り飛ばす

車両の床を転がったノーワンは殴られ蹴られた箇所を押さえる

【痛い…痛いよお…やめてよお…!!?!】

子供のような声で泣き出すノーワンを見たレクイエムが腕を止める

「…………ツ」

その隙を逃さず逃げ出すノーワン

かぶりを振り、その後を追跡しようとしたレクイエムにノーワンと入れ違いに跳躍してきたものが飛びつき蹴り飛ばす

【僕のおとうとをいじめるな!!?】

宙返りしたそれがノーワンと並び立つように着地する

そこには、瓜二つの姿の小柄なノーワンが並んでいた

体の装飾の配置や模様・配色は左右対称の鏡写しになっているが、背格好は全く一緒だった

「なんだと…!!? 同じノーワンが2体!!?」

【お兄ちゃんありがとう!!?】

【大丈夫? 痛くされてない?】

2人のノーワン・ツインス・ノーワンがお互いに見つめ合い、ペタペタと互いの体を触って安全を確認する

【あのおじさん、悪いおじさん!!?】

【悪いおじさんいっばい!!? やっつけよう!!?】

ツインス・ノーワンたちが共にミニカーと紙テープの爆弾を放ち、レクイエムを攻撃する

「ぐっ!!?」

吹き飛ばされたレクイエムを見て2人のノーワンがポンと手を打つ

「そうだ!!? 鬼ごっこしようよ!!?」

「鬼ごっこ!!? 電車の中で鬼ごっこ!!?」

立ち上がろうとするレクイエムを見てレクイエムが追っていた方ーツインズ・ノーワ
ンYが指をくるっと回す

それに合わせて電車が再び加速し、体勢を崩したレクイエムが膝を突く

「くっ!!?」

「【鬼は、悪いおじさんたちねえ!!?】」

ツインズ・ノーワンたちはその体を紙テープ状に解くと電車のどこかへとその姿を消
してしまった

「クソツ!!?」

悪態を吐いたレクイエムが走り出し、次の車両に乗り込む

乗客のいない車両、そこにもう1人の人影がいた

「お前は……」

別方向の扉から現れた白い人影がレクイエムを睨む

「非死者0号……!!?」



ビルの屋上に集まった3体のジョンドウが加速していく電車を見下ろしていた

『何？あのノーワン。死にかけの双子とかいたわけ？』

『2人から生まれる、ならばシャンデリアのノーワンに似ているが…2人1組のノーワンは奇妙だな』

『でっしょー？レアものだよねエ』

ランタンが錫杖を弄びながら楽しげに告げる

『なんと、もつとレアなことにあのノーワンは1人の子供から生まれたのサ♪ワタシも驚きモモの木だよオ〜』

ランタンの言葉にシャンデリアが驚く

『はあ？なんで1人から2人生まれんのよ!!??なんかズルいじゃないそれ!!?』

『そう言われてもなア…』

ランタンは困ったように肩を竦めながらも口角を上げ笑う

『ーま、ワタシはなんとなく理由はわかるケドねエ♪』

レクイエムたちの乗る5両編成の車両内

その2号車内部で2人は睨み合っていた

ヴァジュラ・ジャステイスがヴァジュラズハンマーをレクイエムに向ける

「今はノーワンの追跡中だが、目標の重要度は貴様が上だ。まずは貴様の無力化を優先

する」

はあ、とレクイエムがため息を吐き肩を竦める

「俺はノーワンでもジョンドウでもない。ヤツらの詳しい情報も知らない。無駄足に終わるだけだぞ」

「それは貴様を捕らえて問えばいいだけのこと!!？」

ヴァジュラ・ジャステイスが発砲しながら迫る

弾丸を回避し、レクイエムが振るわれる拳を防ぐがそのまま力任せに座席に押し倒す

「今までは貴様にただ遅れを取るだけだった…!!？だが今は違う!!？」

ゼロ距離で放たれる弾丸を避ける

「ヴァジュラシステム…：仮面ライダーヴァジュラの力を手に入れた今の俺ならば…ツ!!

？」

ヴァジュラ・ジャステイスの言葉を聞いたレクイエムが起き上がり、その顔面に拳をぶち当て、逆転して今度はレクイエムが押し倒す側になり、壁面に叩きつけ睨む

「―その名を、どこで知った…!!？」

ヴァジュラ・ジャステイスをもう一度壁に叩きつけ、胸ぐらを掴んだまま壁から離し、

力任せに蹴り飛ばす

「ぐっ!？」

「その名を、お前が軽々しく口にするな…!!?」

いつもの様子が嘘のように激怒したレクイエムが怒鳴る

「本性を表したか…非死者…!!? 化け物め!!?」

ヴァジュラ・ジャステイスが放つ弾丸をアニマライターから放つ炎の刃で打ち消し、
アニマライターから放つ炎弾をぶち当てながら肉薄し、炎の刃でその白い装甲を切り裂く

怯んだヴァジュラ・ジャステイスだが、装甲に覆われた左拳を叩きつけ、レクイエム
を掴み寄せると右手に握るヴァジュラズハンマーの銃口を脇腹に押しつけゼロ距離で
弾丸を放ち吹き飛ばす

距離を取ったヴァジュラ・ジャステイスはヴァジュラズハンマーの銃身にジャステイス《正義》の
アニマアルカナをリードする

《EXECUTE FORCE》エグゼキュート フォース

《PANISHMENT: JUSTICE》パニッシュメント ジャスティス

展開した銃口にエネルギーを収束させながらそれをレクイエムに向け、両手で握る

「ノーワンもジョンドウも、全て『埋葬』する…!!?」

「それが、お前の正義か…」

レクイエムは手にしたアニマライターのイグナイターを二度回す

《MAXイグニッション》

アニマライターの噴射口に黒い炎が充填されていく

「一ならば、俺はお前の正義を否定する…ツ!!?」

2つのエネルギー弾が放たれる

黒と白の一撃が衝突する

が、それは乱入した灰色の影に阻まれ霧散した

「一なつ!!?」

「一ツ!!?」

灰色に燃ゆる蝶の群れを纏い乱入してきたのは、灰色の白衣を纏う異形の麗人

「…キャンドル…!?」

突如現れたジャクリーン・キャンドルに怯まず、ヴァジュラ・ジャステイスは銃口を向ける

『邪魔だ。イノシシ坊主』

キャンドルは視線をレクイエムに向けたまま右手をヴァジュラ・ジャステイスに向ける

向けられた右手から大量の炎蝶が飛び出し、小爆発を発生させながらヴァジュラ・ジャステイスを3号車まで吹き飛ばす

ダメージにより変身が解除された正義が床を転がる

「キャンドル…なんのつもりだ!?」

『なんのつもりか、ねえ』

キャンドルはその体を大量の炎蝶に分裂させ、レクイエムを押し流して1号車に戻る。そして元の姿に戻ると倒れたレクイエムを見下ろしながらキャンドルは冷淡に告げる

『私は、退屈してるんだよ。死ぬほど』

『だから、お前を消してみることにした』

『ーただ、それだけだよ』

第8話 「6の正位置：キミのくれた名前」

キャンドルが手を広げ、周囲に飛び回る蝶たちを集めて灰色の火球として投げ放つ

レクイエムは一部をアニマライターの炎の刃で薙ぎ払うが、灰色の炎蝶の凝集した弾丸は一部の炎蝶を落としただけで残る大部分の炎蝶が炎刃を避け、レクイエムの体に衝突し連鎖爆発を起こす

「ぐっ……!?」

よろめき座席に倒れたレクイエムが反撃に苦し紛れの弾を放つが、キャンドルは炎蝶を集めた壁を作りそれを防ぐと、その体を炎蝶に分解しレクイエムに何度も突進をぶち当て、そのまま窓に叩きつける

「ぐあつ!?」

加速する電車から半身投げ出されたレクイエムの首を再度実体化したキャンドルが掴み、見下ろす

「なんのつもりだ……キャンドルッ!?」

『……セリフまでつまらんな、レクイエム』

はあ、とキャンドルが大きなため息を吐き出す

レクイエムの首を掴んだまま車内に引きずり戻すと手を広げた胸から炎蝶の群れを放出し、攻撃

レクイエムの体で小爆発が起き、吹き飛ばされ床を転がる

『さつきも言ったはずだ。今のお前は私にとって死ぬほど退屈だ』

『ー退屈なお前は、要らないんだよ』

どこまでも冷淡な言葉でキャンドルが言い放った



「おわつとと!? な、なんかどんどんスピード上がってる…!?」

座席に倒れながらかなえ鼎が眩く

りんね輪音は不安そうな様子で大人しく座っている

その脳裏ではヴァジュラ・ジャステイスが撃破した後、何事もなかったかのように蘇ったノーワンの姿を思い出していた

(あのノーワン…なんで倒せなかったんだろ…)

首を傾げているりんね輪音を見てかなえ鼎が口を開く

「……さつきのなんだかよくわからない怪物…? のこと、りんね輪音ちゃんはなんか知ってる

んだね」

「へ……!? いや、いいえ何も知りませんよ……!?」

鼎かなえの確信をついた発言に輪音りんねが目を泳がせる

その様子を見た鼎かなえが悪戯いたづらつぽく微笑む

「輪音りんねちゃん、嘘吐くの下手だねえ。バレバレだよ」

「あ、あう……その……」

「……五月さつきちゃんが学校に来なくなつたのも、あの怪物に関係してたりするんだね」

鼎かなえの言葉に輪音りんねが目を伏せる

「……はい、詳しくは、話せませんが……」

それを聞いた鼎かなえは座席に深く座りながらふうと息を吐く

「どうせ今縛られてて何もできないし、退屈になつてきたし……少しボクの昔話をするね」

「は？ はあ……」

唐突な鼎かなえの切り出しに輪音りんねが思わず首を傾げる

「ボクさ。昔犬飼つてたんだよね。ラブラドルレトリバーの大きくて可愛いやつ。

名前はそのまま、ラブ」

「小さい時にめちやくちや可愛がつてて、お兄ちゃんみたいな家族の一員だった。とつ

ても大切な家族」

鼎かなえが懐かしむように、それでいて哀しげに目を伏せる

「中学に上がるちよつと前に、ラブは老衰で亡くなったんだ」

「…………ツ」

輪音りんねも目を伏せる

「めちやくちや泣いたなあ…母さんが言うには3日は泣いてたつて」

鼎かなえは哀しそうな目をしてしたが、薄く微笑み続ける

「どうしてもラブのこと忘れられなくて、忘れたくなくてさ。家族と一緒に並んだラブの絵を描いたの。それが、ボクの絵描きの始まり」

鼎かなえが輪音りんねの方を見る

「輪音ちゃんの見てるあっちの世界って、あんな怪物がいるくらいだからボクとラブみたいなのと比べ物にならないくらい辛いこととか、哀しい別れとかいっぱいあると思う」

「忘れた方がいいってことも、たくさん」

輪音りんねは鼎かなえの言葉から正義せいぎの言葉を思い出す

『哀しみすがるくらいなら、跡形もなく忘れた方が救いになる』

実際、五月と東吾の想いを知り、それが届かなかつたのを見た輪音はその通りかもしれないとも思いかけていた

こんな辛いなら、忘れた方がいいのかも、と

「でも、忘れちゃうつてもつと辛いと思うんだ」

「だから、絵に込める。心に残った思い出を、幻じゃなかった想いなんだって、残すために」

鼎かなえの言葉に輪音りんねが目を見開く

「まあ、これはあくまでボクの描く理由だけだよ」

ニツと笑う鼎かなえ

その言葉を聞いて輪音りんねもいつの間にか微笑んでいた

3号車に吹き飛ばされた正義せいぎはなんとか立ち上がり、切った口内に滲む血を吐き出す
「ジヨンドウ、ジャクリーン・キャンドル…!!? 何故このタイミングで現れた…!!?」

電車の壁面を殴りつけながら歯を噛み締める正義せいぎ

そこに通信が入る

「こちら正義。どうした？」

『どうしたじゃないでしょ…突入しといて長らく報告も無しだからこちらは何もしようが無いじゃない』

九留美の不満そうな声が響いてきた

暴走し、線路から火花を散らす電車に装甲車ーハーミットダイザーが併走する

その操縦席で九留美ーヴァジュラ・ハーミットは通信を繋げていた

「ひとまず進路上の駅には避難指示を送ってほぼ完了してるわ。内部のノーワンの様子は？」

『まんまと逃走された。加えて非死者0号とジャクリーン・キャンドルまで乱入してきている』

「なんですって…!?？」

『だが幸い、0号とキャンドルが戦闘を始め、ノーワンには妨害者がいない状態だ。その間に俺がノーワンを埋葬する。九留美はなんとか電車を止めてくれ』

正義の指示にヴァジュラ・ハーミットがはあとため息を吐く

「無茶はしないでよ、正義」

『余計な心配だ』

一旦通信を止め、加速する電車にハーミットダイザー後部を変形させ、大砲を延伸する

「ひとまずアンカーワイヤーで動きを止めないと」

ヴァジュラ・ハーミットが操縦席のボタンを押し、砲門からワイヤー付きのアンカーが放たれる

車体に命中する瞬間、紙テープが這い上がり車上に灰色の人影を作り出していく

「遊びの邪魔、しないでよ!!?」

ツインズ・ノーワンXが両手を広げるとその体に取り込まれていたオモチャたちがミサイルのように放たれ爆発、アンカーを撃ち落とす

「ノーワン!!? あんな場所に…!!?」

『ノーワンが見つかったのか。ならば都合がいい』

通信が再開され、正義せいぎの声が響く

『ー電車の上だな?』

その声が早いのか、ノーワンのすぐ側の天井が車内から青白い稲妻に貫かれ穴が開く

驚くツインズ・ノーワンXの目前にヴァジュラ・ジャステイスが着地する

はあ、とヴァジュラ・ハーミットがため息を吐く

「だから無茶するなって言ってるのに……」

「始末書なら俺が書いておく。手間はかけません」

【こ、怖いおじさん……!!? あつちいけ!!?】

ツインズ・ノーワンXが腕を振り回し、オモチャ爆弾を放つが正確無比なヴァジュラ・ジャステイスの射撃が撃ち落とす

ドライバーから取り出したアニマルカナをヴァジュラズハンマーにリードする

《エグゼキュート FORCEフオー》

ヴァジュラズハンマーにエネルギーが充填される中、ヴァジュラ・ジャステイスはヴァジュラ・ハーミットに指示を下す

「あのノーワンは先程ヴァジュラの攻撃で埋葬できなかつた。そちらからもう一撃、合わせてくれ」

「了解したわ」

ハーミットダイザーを自動操縦に切り替え、ヴァジュラ・ハーミットが運転席のドアを開いて上に登る

背中に装備されたヴァジュラズハンマーとヴァジュラアームズを取り出し、変形させ長く伸ばしたヴァジュラアームズをヴァジュラズハンマーとドッキングする

《MODE：RIFLE》

ライフルモードとしたヴァジユラアームズを持ち上げ、ヴァジユラスハンマーのリーダーにアニマルカナをリードする

《EXECUTE FORCE》

膝を立て構えたヴァジユラアームズをツインズ・ノーワンXに向ける

《PANISHMENT：JUSTICE》

《PANISHMENT：HERMIT》

ヴァジユラ・ジャステイスとヴァジユラ・ハーミットが同時に必殺の一撃を放つ

青白い稲妻弾と紫と白の稲妻弾が同時にツインズ・ノーワンXに直撃

間違いなくツインズ・ノーワンXが灰色の炎を上げて爆発する

「これならー」

が、爆炎の中からツインズ・ノーワンXが傷ひとつなくよろめきながら立ち上がるのを見て、ヴァジユラ・ハーミットは目を見開く

「嘘でしょ……!?」

「化け物め…!!?」

ヴァジュラ・ジャステイスはヴァジュラズハンマーを油断なくツインズ・ノーワンXに向ける

【なんで、なんでなんでなんでえ!!!】

頭を抱えたツインズ・ノーワンXが地団駄を踏みながら叫ぶ

【なんで遊んじやダメなの!!?なんで痛くするの!!?なんで、なんでなんでなんで!!?ランタンの人は、もうたくさん遊んでいいって言ってくれたのにいいいいいいいいいい!!!】

絶叫するツインズ・ノーワンXの体から紙テープが何枚も何本も吹き出し、電車にがんじがらめに巻き付き始める

その何本かが窓を破り砕いて中に入り始め、乗客が悲鳴を上げ始める

【嫌い嫌い嫌い嫌い!!?おじさんも嫌い!!?みんな嫌い!!?痛いだけの世界なんか大っ嫌いだアアアアアアア!!!】

さらに叫んだツインズ・ノーワンXの体から分離したオモチヤがヴァジュラ・ジャステイスに迫る

灰色の炎を纏うそれは先程までよりもっと大規模に爆発し、ヴァジュラ・ジャスティスをよろめかせる

「くっ!? 厄介な…!!?」

ヴァジュラ・ジャスティスはツインズ・ノーワンXに銃口を向け、追撃を加えながら肉薄し組み付いた



ガタンツ!!?と車体が大きく揺れる

よろめきながらも立ち上がるレクイエムをキャンドルは退屈げに見下ろしながら再び炎蝶弾を出現させる

『あのイノシシはノーワンたちをただの死者と割り切り力を振るっている。正義かどうかはさておき、そこに迷いなぞない』

キャンドルがレクイエムを指差す

『だがお前は? レクイエム、ノーワンを死に直させる黒き死神。既に死に、彷徨うだけの死者を送るのがお前だろうか? そんなお前が、情に絆されて引き金を緩めて何が死神だ』

炎蝶弾がレクイエムに直撃し爆発

なんとか腕を交差して防衛する

「ーッ!? 絆されてなどいない!!?」

『ならばなぜバーナー・ノーワンをすぐに倒さなかった？お前が倒していれば、二度も死ぬことにはならなかったのに』

レクイエムが言葉に詰まり顔を伏せる

キャンドルがはあ、と大きなため息を吐く

『私の愉悦は、《愚者》^{フル}どもの享樂とは違う。「ヒトが苦悩し、選び、その道を歩むこと」そしてその決意の中での苦悩と犠牲の選択に直面しながら前に進む姿。それを特等席で眺めるのが私の悦楽だ』

もう一発の炎蝶弾が放たれ、レクイエムに直撃する

『あのイノシシにお前は言ったな。「その名前を騙るな」^{仮面ライダー}と。はっ、笑わせるな』

レクイエムよろめくレクイエムの胸ぐらを掴み壁に叩きつける

『今のお前は、誘波^{いざなみ} 六美^{むつみ}の願ったヒーローの一つも満たせていない。その最期の願いすらも、未だに叶えられていないお前が』

「ーッ!!」

今度はレクイエムがキャンドルの胸ぐらを掴み、ドライバーのレバーに手をかけるが、レバーを下ろすことはできなかった

「仮面ライダー……？」

「そう。人知れず誰かのために、世界のために、自分の正義を信じて戦い抜く孤高のヒーロー。って都市伝説になってるヤツなんだよね」

手元のタブレットを操作し、電子版の雑誌の1ページを見せる

『仮面ライダー現る!!?』

『風都タワー崩壊!!? 街はヒーローに救われた!!?』

『天の川学園高校の仮面ライダー部に迫る!!?』

『激写!!? 謎の剣士と怪人物!!?』

「これが全部、仮面ライダーが現れた事件なのか？」

「まあほとんど眉唾だと思うけどね。でも、風都の大事事件とかは結構ホントっぽいんだよ〜」

ふふん、と鼻を鳴らしながら得意げに話す彼女の様子に思わず笑みがこぼれてしまう
「ちよつと、今子供っぽいって思ったでしょ？」

「いいや、キミらしいなって思ったんだ」

頬を膨らませて抗議してくる彼女ー誘波いざなみ 六美むつみに平坂ひらさか 十三じゅうぞうはそう答えた

誘波 いざなみ
六美 むつみ

大学3年の頃偶然に知り合い、その1年後に交際を始めた十三じゅうぞうの最愛の人

理学部で人体や生物の研究をしていた彼女と芸術学科で美術を学んでいた十三じゅうぞう、と何やら不思議な組み合わせだが今となってみると自分たちでも不思議な取り合わせでよく「なんでこんな相性よかつたんだろうね」と2人して笑い話にしている

とにかく不思議な女性だった

陳腐な言い回しだが、彼女は所謂「天才」だった

生物分野の知識にも当然優れているが彼女は「人を研究するなら人体のことももつと知らない」と言つて医学・解剖学の知識もみるみる吸収していった。今や彼女主導の「魂の観測・結晶化」なんて途方もない研究に着手するほどに

それでいながら彼女は美術やら占いやら都市伝説やら、おおよそ理学的な話とは無縁なことにも明るかつた

特にタロット占いが好きで十三じゅうぞうもよく占つてもらっていた

とにかく十三じゅうぞうにとって隣にいて居心地のいい女性だったのだ

テーブルの向かいに座つた十三じゅうぞうに六美が話しかける

「『仮面ライダー』ってなんか科学者にも通じるところあると思うんだよね」

「そうかな？その心は？」

「科学者も人知れず、誰かのため世界のために、自分の信念と正義で研究して謎と戦うってところが、それっぽいと思うんだよね」

「なるほど、言われてみると確かに」

「でしよ〜？だからより一層憧れちゃうんだよね」

「やはは、と愉快そうに六美むつみが笑う

いつものように取り出したタロットカードをシャッフルしてカードを並べていく

「うっ、また《死神》だ…」

「また俺のこと占ってくれてるのか？」

「うん。十三じゅうぞうってばホント《死神》に好かれるよね…しかも毎回逆位置だし…なんか妬けちゃう」

六美が引いた《死神》のカードを逆位置のまま額に当てながら言う

「《死神》に好かれるって言うのも嫌な話だけだな」

「ああ、でも逆位置の《死神》は悪い暗示ばかりじゃないんだよね。生を終わらせて新たな生に導くってイメージで、『再生』とか、『創造』とか、『運命』なんて意味もあつたりするんだよね」

六美^{むつみ}が得意げに告げる

その顔を見つめながら十三^{じゅうぞう}が六美^{むつみ}からタロットカードを借りる

「毎回俺^{おれ}ばかり占^{うらな}われてばっかりだったから俺も占^{うらな}ってみようかな」

「十三^{じゅうぞう}はタロットカード分かるの？」

「実はあんまり。だから、色々これから色々教えてくれよ」

「ふふん、任せなさいな」

シャッフルした中から十三^{じゅうぞう}が一枚カードを抜いて机におく

「ーあつ」

《恋人》の逆位置

そのカードを見た六美^{むつみ}が突然眩^{くら}き暗い顔を見せる

「その様子を見た十三^{じゅうぞう}が訝^{あや}しげにその顔を覗^{のぞ}く

「……あれ？もしかして、なんかマズい配置^{ちやうざい}…だったり…？」

「あー、えつと…《恋人》の逆位置は…『恋愛の危機』とか、『よろめき』とかそんな感じの暗示^{あんし}だね」

「えつ、そうなのか…？」

不吉な暗示^{あんし}に気づ^きつき、十三^{じゅうぞう}も顔を伏^ふせる

六美^{むつみ}はブンブンと手を振り苦笑^{くせう}いする

今日は研究の成果を確かめるための重要な実験の日だと六美から聞かされていた。六美が見つけた概念結晶。生の象徴たる白のアニマ、死の象徴たる黒のアニマの2つ。ある意味で「魂」とも言えるその「混合実験」

「死んでいる」だが同時に「生きている」状態にすることができ安定させることができるなら、人の永遠の夢である「不老長寿」もなし得るかもしれないという

「私は十三と生きておじいちゃんおばあちゃんになつて生を全うできたらいいし、永遠の命とかまでは興味ないけど、科学者としてその証明はしないとね」

そんなことを言つて出かけた六美から先程尋常じやない様子で電話がかかってきた

『実験、失敗しちゃつた……ちよつとヤバいかも』

それを聞いた十三は六美の研究所に駆けつけた

燃え上がる研究所を前に、何人かの同僚たちが呆然と佇んでいた

その1人―たしか星影 十七が告げた

「む、む、六美さ、んが……ままままだ、中に……!!？」

それを聞いて十三は燃え盛る研究所に飛び込んでいた

「六美!!!」

六美がいたはずの実験棟にようやく辿り着く

「十三!!」

六美の声が響く

割れたガラスの向こう。炎の中に六美がいた

「六美!!? 待ってろ、今そつちにー」

「来ないで!!!」

六美が絶叫する

その背後からコツコツと靴音を鳴らしながら新たな人物が現れる

「つれないなア。六美クンの恋人でシヨ?」

現れたのは線の細い眼鏡をかけた少し背の高い男

この状況の中、男は愉快そうな笑みを浮かべていた

「咲也…!!? あなた、なんで…ツ!!?」

六美が男を睨み怒鳴る

零楼院 咲也

六美むつみの研究所のナンバー2として研究を補佐していた男だ

「なんで？簡単なことですヨ。アナタの研究が、つまらないカラ」

「なんですつて…!?」

ヒヒヒ、と咲也さくやが笑う

「白と黒を混ぜた灰色のアニマ。不老不死となる最高の発明!!?それをアナタは危険だからと封印するつて…そんなのありえないでシヨ!!?」

「バカ言わないで!!?灰色のアニマから生まれたのは人間なんかじゃない怪物だった…死にはしてない、でも生きてもいけない、死んだ苦しみを抱いたまま「活動する」だけ!!?しかも、アニマ干渉波で消滅させた場合、その存在の記憶までなくなるなんて、あんなものは悪魔の発明よ!!?」

「—その綺麗事に愛想を尽かしたのサ」

咲也さくやは両手を広げる

その胸の中央に灰色の《愚者》のタロットカードが現れ、胸に入り込むと同時にその体を灰色の炎が包み燃え上がらせる

ヤツの姿が変わった

灰色の蠟を固めた体。ランタンを飾りにぶら下げた異形の怪物杖を突きながら現れたその姿を見た六美むつみがよろめき尻餅を突く

「あなた……自分のアニメを混ぜ合わせたの？？」

『イグザクトリイ！！？とでもない気分だよ六美クン』

ギヤハハハハハ！！？と咲也さくやだった怪物が笑う

煙を吸い込んでいたのか六美むつみがゴホッ、ゴホッと苦しげに咳き込むのを見て咲也さくやはその口角を上げる

『キミにもすぐにお裾分けしてあげよう』

咲也さくやは手にした錫杖を六美むつみに向ける

六美むつみの体から白と黒の火の玉が飛び出してきた

六美むつみが前に見せてくれた概念結晶ーアニメだった

「六美！！！」

『十三クンもそこで見ていたまえ。何、キミもじきに死に瀕するからスグに同じモノにしてあげよう』

咲也さくやが六美むつみの白と黒のアニメを混ぜ合わせ、灰色となったそれを六美むつみに落とす

六美むつみが胸を押さえ、その体から灰色の炎が上がり始める

「六美！！！！」

「六美！！！！」

割れたガラスを飛び越え、炎を突き破りながら十三が六美に駆け寄る
さくや 咲也はケラケラ笑いながら2人から少し距離をとる

「六美!!? しつかりしろ六美!!?」

体を十三に預けながら六美が力無く笑う

「十三…離れて。私、咲也と同じ化け物に、なっちゃうから…」

「バカなこと言うな…!!? 今ここから運び出すからな」

六美を持ち上げようとする十三の手が押さえられる

六美は側に転がしていたアタツシケースに手を伸ばし、開く

中には一枚の黒いカードデバイスとギロチンを模した構造のデバイスが入っていた

「そのカード…持って、白いサークルのところ…親指で押して…」

六美の指示に従って十三は困惑しながらもカードデバイスを手に取り、ボタンを押す

黒い画面に心電図のような波形が波打つ

《サーティーン：デス》

ガイド音声が響いたのを見て六美が微笑む

「やつぱり……十三は《死神》のアルカナに好かれてる……」

ケースの中のデバイスを掴み、十三の腰に当てる

《デスサイズドライバーギロチン》

自動的にベルトが巻かれたそれに十三の手にしていたカードデバイス—アニマアルカナを差し込む

「なんなんだよ、これ……」

「デスサイズシステム。アニマ研究の副産物でストッパー……かな？アニマ干渉波では消滅させることしかできない、灰色のアニマを分断して、元の形に『死に直させる』システム……」

六美の体はほとんど灰色の炎に包まれ、崩れつつあった

灰色に燃える手が十三の頬を撫で、その唇と唇が重なる

六美の頬を涙が伝った

「それで私を……殺して……」

「な、に、何を、言ってるんだ……」

「干渉波でアニマが消滅したら……みんなに忘れられちゃう……生きていた記憶も記録も……無くなっちゃうの……」

「私……二度も死にたくない……十三に、忘れられたくないから……」

六美^{むつみ}がドライバーのレバーを倒した

「その力なら……私以外も助けてあげられる……咲也は多分……まだまだ私みたいなのを……作り出すと思うから……」

六美は満面の笑みでニツと笑う

「ごめん、十三^{じゅうさん}。私の代わりに……誰かのヒーローになってあげて」

「私の、誰かの鎮魂歌^{レクイエム}になって。こんな変わり者の私のことを支えて、一緒にいてくれた、誰より優しい十三^{じゅうさん}なら……その力を正しく使ってくれて……信じられるから……」

「お願いね……『仮面ライダーレクイエム』」

六美^{むつみ}が目を閉じる

その六美^{むつみ}を優しく横たえ、十三^{じゅうさん}が立ち上がる

『アラ？終わった？それならそうとー』

《エクスキューション・アップ》

《リバース・デス》

十三の足元から黒い炎の渦が巻き起こり、燃え盛る周囲の炎が黒変してゆく
十三の首にギロチン台が現れ、その刃が落ちる

首が落とされ、それを十三が掴む

首から溢れ出した黒い炎が十三を包み、その姿を黒いコートを纏う怪人に変えていく
落ちた首を元に戻すと、揺らめく黒い炎がマフラーとなり、骸骨の仮面とギロチン型のバイザーが装着される

黒い怪人が振り向く

髑髏面の怪人は、灰色の道化を真つ直ぐに睨みつけていた

「零楼院 咲也…お前は許さない…ツ!!?」

『な、なんだよそれ…!? そんなもんまで作ってたのーガツ!』

動揺する咲也を黒い怪人が黒い炎を纏いながら殴りつけ吹き飛ばす

燃え盛る機材に叩きつけられた咲也がよろめきながら立ち上がる

『ぐ、ぐふう…これは…ちよつと面倒だ…』

咲也がトン、と錫杖で地面を叩きその姿を灰色の炎に包んで消える

「待てー」

逃走する咲也を追おうとした十三

「ん……ッ、騒がしいな……」

その背後でゆらり、と人影が立ち上がった

そこに立っていたのは、一矢纏わぬ体を灰色の炎で包んだ誘波
六美だった

「六美……？」

「ん？六美……ああ、このアニメの元の持ち主、か」

ニヤリ、と彼女は決してしない愉悦を溢した笑みを見せる

六美の姿をしたそれがパチン、と指を鳴らすと纏う炎が全身に伸び、黒いタイトスカ
トとロングブーツ、丈の短いキャミソールに変化しその上から灰色の白衣が纏われる

「ん、邪魔だな」

パキリ、と顔にかけたままだった眼鏡をへし折り、髪を梳く

短めの髪が少し伸び、炎によってポニーテールに結ばれると共に灰色に変色していく
様変わりしたソレは灰色の瞳で十三を見据え、寧猛に笑う

「私は、生きながら死ぬもの。名前が無いのも面倒だな……ああ、確かこの女は『ジョン

ドウ』と呼んでいたかな？ならばー」
「ー私はジャクリーン、ジャクリーン・キャンドル^{キヤンドル}とも名乗っておこうかな、平坂^{ひらさか}十三^{じゅうぞう}」

十三^{じゅうぞう}はすぐに理解した

理解してしまった

それは、六美^{むつみ}から生まれたモノだと
六美^{むつみ}が死んで、生まれたモノなのだ

『それで私を……殺して……』

十三^{じゅうぞう}は最愛の人の言葉を思い出す

ドライブバーのレバーを一度下ろす

《スリー：カウントダウン》

十三^{じゅうぞう}が変じた黒い怪人ーその腕からギロチン刃が伸びる

それを見ていた女はニヤニヤと微笑む

「ああ、そうだったな。さあ……私を殺してみせろ」

女が腕を広げる

ゆつくりと歩みを進め、女の胸ぐらを掴み壁に叩きつけた十三じゅうぞう

その腕を、ギロチンの刃を振り上げた



ギイーンツ!!!

鋭い金属音が鳴り響く

ギロチン刃を展開したレクイエムの腕がキャンドルに振り下ろされ、その眼前で刃は止まっていた

「……腑抜けでなんかいない」

レクイエムが口を開く

「俺のやることは、どういう形であれ人殺しだ」

「それを背負う辛さは、とつくの昔に慣れた」

キャンドルはその言葉を黙って受け止める

「だが、ギロチンの刃を下ろすことに慣れることは、あいつが望んだ『仮面ライダー』じゃないッ!!?」

キャンドルを解放し、電車の壁面を殴りつける

「お前には腑抜けに見えるかもしれない。ただ選択の先送りに思うかもしれない……」

「だが、あいつは…六美^{むつみ}は、俺を信じてこの死神の鎌を預けてきた」

「なら俺は、俺自身の信念は殺さない」

レクイエムがキャンドルをまつすぐ見据える

「時に止まっても、俺は手の届く限り手を伸ばす。何度だって立ち上がって、何度でも背負い続ける…」

「それが、俺が預かった『仮面ライダー』としての正義だ…!!?」

キャンドルはその言葉を聞くとはい、と一つため息を溢し俯く

その肩が小さく震え出す

『ハハハッ、全。お前はどこまでも面倒なヤツだな。こうまでしないと、立ち直れないとはなあ』

キャンドルが怪人の姿から人間体に姿を戻す

「お前が余計な気を回さなくともいい話だ」

「おいおい、さっさと立ち直れるように荒療治してやった相棒にかけられる言葉がそれか？」

「お前は相棒じゃない。ただの共犯者だ」

やれやれ、とキャンドルが肩を竦める

「2体同時、だ」

「……なんだと?」

「色々なツテであのノーワンの起源を見つけてきた。で、あの2体になってるならほぼこれで間違い無いだろう」

「……………」

無言でキャンドルの言葉を受け入れていたレクイエム

瞬間、電車がまた加速し大きく車体が揺れ出す

「ーキャンドル、手を貸せ」

「…………お前からそう言うとは、珍しいな」

「向こうも2人。手が足りない今は手段を選ばん」

レクイエムがアニマアルカナを取り出したのを見てキャンドルは大人しく怪人体に変身する

『この貸しは高いぞ?』

「お前との貸しなど知らん!!?」

《エクスキューション・アップ》

《リバース・デビル》

デビルに変身したレクイエムが電車の屋根を突き破り飛翔
キャンドルは自身の姿を蝶の群れに変身させ、他の車両へ移動する

暴走し、火花を上げる電車の目前に立ち塞がったレクイエムは腕から黒い炎をブース
ターのように噴射し、その突撃を真正面から受け止める

「おお…ッ!!?」

衝撃にレール上を引き摺られながら、レクイエムは先頭車両を持ち上げ浮かせる

徐々に推力が減衰し、爆走していた電車が大きく揺れながらも停車

空転していた滑車からは煙が噴き出し、そのまま停止した

【電車が…止まった!??】

驚いた様子で紙テープを束ねながらツイーンズ・ノーワンYが3号車に実体化して辺り
を見回す

その肩をキャンドルが捕まえる

『はい、捕まえた♪』

【あ、ああつ!?!?】

驚き逃げる間も無くツインズ・ノーワンYが炎蝶に絡め取られ、天井を突き破り外に放り出される

【あうつ!?!?】

【あ!?!?おとうと!?!?】

背後に落ちてきた片割れに驚き、目の前のヴァジュラ・ジャステイスから目を離してツインズ・ノーワンXが片割れに駆け寄る

「何!?!?もう一体いたのか!?!?」

ヴァジュラ・ジャステイスが銃口を向けるが2体のノーワンはキャンドルの炎蝶に包まれ、先頭車両の方へ運ばれていく

弾丸を放つが炎蝶の壁がそれを通さない

『残念だが、今度のノーワンはこちらのエモノだ』

「ジャクリーン・キャンドル…!!!?」

キャンドルはヴァジュラ・ジャステイスの攻撃を軽くあしらいながら先頭車両の方を振り返る

『ーあれだけ啖呵を切ったんだ。逃すなよ』

『仮面ライダー、レクイエム』



レクイエムの背後に炎蝶に塗れた2人のツインズ・ノーワンが落ちてくる
振り返ったレクイエムをツインズ・ノーワンたちが睨む

【もうやめてよ!!? 痛いことしないで!!?】

【嫌い!!? 嫌いだアアア!!?】

2人のツインズ・ノーワンがレクイエムに迫る

《リバース・テンパランス》

レクイエムはテンパランスにフォームチェンジし、2人のノーワンの攻撃をいなして
いく

背後からの一撃も振り返らずにいなし、精密に対応していく

2人まとめて投げ飛ばされたノーワンがレクイエムの目前に転がる

【痛いよお…痛いよお…】

【なんで、なんで僕たちばかり…!!?】

【痛い、か…】

レクイエムがドライバーのレバーを下ろしていく

《スリー》《ツー》

「……痛いのは苦しいよな。辛かっただろう」

再度レバーを下ろす

《ワン：カウントアップ》

「その辛さも苦しみも、こいつで最後だ」

「兄ちゃんが、全部白黒つけてやる!!？」

《ラスト・エクスキューション》

ツインズ・ノーワン2人の両側から拘束板が出現し、2人をホールド

投げたブラストロファイヤーが背中のバックパックとジョイント

そのブースターから黒い炎が噴出し、レクイエムが空に飛び上がる

空高くから見下ろすツインズ・ノーワンをバイザー越しに捕捉

最速、かつ必殺の飛行経路を計算し、飛び蹴りを構えるとその足先に鋭いギロチン刃

が現れる

「はああああッ!!!」

ブラストロフィーが最大噴射し、一気に加速したレクイエムが真っ直ぐに2人に飛来し、同時にその体を両断する

よろめき膝をついたツインズ・ノーワンの姿がぐにやりと歪み、2つあった体が1つになると共に灰色の火柱を上げて消滅する

その中から現れた白と黒のアニマ、その白のアニマが残滓として生前の姿をかたどる

『あれ…?もう痛くない…』

そこから現れたのは、病院着をきた1人の少年だった

「1人…?2人になっていたのは何故だ…?」

「バニシング・ツインってヤツさ」

訝しむレクイエムの側に降りてきたキャンドルがその疑問に答える

「バニシング・ツイン…それってたしか…」

「双生児として成長した片方がもう片方、もしくはは子宮に取り込まれて子宮内から消え

る現象だ。そしてその事例の一つとして、生まれてきたもう片方に『痕跡』が残ることがある」

「痕跡……まさか!?」

レクイエムの驚きにキャンドルがパチンと指を鳴らす

「その少年は、体の一部に別のDNA型を持っていた。自分とは兄弟になる間柄の、生まれなかったはずのな」

「それを親が伝えていたこと、そして難病の長く苦しい治療からの逃避として、イマジナリレンズならぬイマジナリブラザーが生まれていったってことだ。まあ、快復はしなかったようだがな」

キャンドルからそれを聞いたレクイエムは少年の側に歩み寄ると、その頭を優しく撫でる

「……治療、よく頑張ったな」

頭を撫でられた少年はくすぐったそうに笑う

そんな少年の隣に同じくらしい背格好の子供の影が現れる

『あ、お兄ちゃんー』

だが、刃はすんでのところで止まっていた

「……これはどういいうつもりだ？」

首を傾げる女を解放し、黒い怪人は背を向ける

「……咲也さくやがあので死を振り撒くなら、俺も何度だって死神の鎌を振り続けてやる」

「それまで俺は……まだ止まらない」

怪人は肩越しに女を睨む

「ーお前を殺すのは、全てを終わらせた後だ」



「ああ、待つともさ。じゅうぞう十三。たつぷり苦悩するといい」

キャンドルが心底愉快そうに微笑む

「ーお前のその苦悩と葛藤、その末の選択が見せる世界。それが私のアニマアルカナを震わせる極上の甘美なのだから」



暴走電車事件から数日

棺ひつぎのみやノ宮中央学園美術室

「おおつ、できてきたねくやつばいいじゃん」

輪音りんねが描き込んでいた絵を覗きこみ、鼎かなえが微笑む

桜が舞う道の中、親子2人組が歩いていく絵

まだ下書き段階で塗り始めてもいないが、鮮やかな桜色が見えるような気がするほどに書き込まれていた

「あはは……まだまだ手探りで修正中なんですけどね……」

「ふーん……これでもいいと思うけどなあ」

絵を眺めながら鼎かなえが悪戯つぽく笑って耳打ちする

「この前の怪物、色々あるみたいだけど秘密なんだよね」

「あ……はい。色々事情がありました……」

「OK、まあでも……話したくなったらこっそりボクには話していいよ」

鼎かなえの言葉に輪音りんねも微笑む

「はい。またよろしくお願いします」

平坂霊園

墓所の隅に新しくできた墓石

『相生兄弟』と書かれたその周りにはミニカーや電車のおもちゃが何個も供えられていた

墓石を磨きにきた十三はあるものを見つける

「これは…そうか」

十三は優しく微笑み、供えられていた小さなキャンバスを持ち上げて眺める

2人の少年が小さな電車で跨り、それぞれ色違いの車のオモチャを手に楽しげに遊ぶ
優しいタッチの絵

それを改めて供えなおし、十三は手を合わせた



夜の棺ノ宮市

街明かりが煌めく様を見下ろすビルの屋上

パーカーを着てフードを被った小柄な影がへりに座って足を揺らしてスマホを眺めていた

「棺ノ宮中央学園首吊り事件…町工場放火連続殺人事件…暴走電車事件…ほんと色々あ

るねこの街」

「独り言のように呟いた言葉にパーカーのポケットから返答があった

『へっ、なんとも物騒なことだなあ。半年前と変わらさず』

「うん。相変わらず、死が溢れた街」

スマホをしまい、ポケットから一枚のカードデバイスを取り出してボタンを押す

《セブン：チャリオット》

起動し、心電図が波打つと共に黒いディスプレイに釣り上がった目と裂けた口が表示される

『しっかし、スカルのヤツ…まだアレできねえのかね？』

「アレ、作ったヤツが天才すぎて再現が難しいらしいから。スカルでも大変っぽい」

『科学畑のこたあ分からん。小難しい話はキー子に任すわ』

「無茶言わなしセン兄。アタシも化学赤点常習犯なのに」

キー子と呼ばれた少女が屋上に脚を戻し、放られていた大型のギターケースを持ち上げてストラップを肩にかける

ギターケースに飾り付けられたり、ストラップでぶら下がるデフォルメされた骸骨の

マスコットがからからからと騒がしく鳴り響く

「ーまだあいつは出てきてない。でも、必ずまた現れる」
「セン兄を、みんなを殺して……『忘れさせた』あいつは」

ライダーデータfile 1

◆仮面ライダーレクイエム

リベース・デス

SPEC

身長：195cm

体重：84kg

パンチ力：4.4t

キック力：6.6t

ジャンプ力：44m

走力：100mを4.4秒

ひらさか
平坂 ひらさか 十三じゅうさんがデスサイズドライブバー・ギロチンにアニマルカナ《死神デス》を装填して変身する「仮面ライダー」

アニマルカナの起動ボタン『アニマスキャンボタン』を押し、十三自身の白のアニマ波長をスキャン、再現し、それをドライブバーのギロチン『デスサイズダウン』で切断・破壊することにより擬似的に死亡状態に陥らせて黒のアニマを点火することで変身す

る

ドライバーに内蔵された制御コア『アニメ・マトリクス』の演算制御により両立が不可能なはずの黒と白のアニメを同時制御して変身者の白のアニメを保護しながら死の概念である黒のアニメを攻撃転用することができる他、ノーワン及びジョンドウの灰色のアニメを分析・破断し、元の白のアニメと黒のアニメに分割することを可能にしていく

必殺技は黒のアニメをギロチン台の形にマテリアライズし、自身をギロチン刃として蹴り抜く飛び蹴り『デッドエンド・レクイエム』

◆仮面ライダーレクイエム

リベース・デビル

S P E C

身長：198 cm

体重：92 kg

パンチ力：（通常時）6.6 t （最大火力）66.6 t

キック力：8.8 t

ジャンプ力：4.4 m

走力：1000mを6.6秒

アニメアルカナ《悪魔^{デビル}》により姿を変えたレクイエム

肉弾戦に特化した形態

グローブ『ゲヘナグラブス』は黒のアニメの炎を取り込み噴出することにより瞬間的にパンチの威力を上げたり、炎を爪として纏うことができる

翼『エビルマントウイング』による短距離飛行や尻尾『イーブルランステイル』による攻撃などトリッキーな戦い方も可能

必殺技は専用武器『グルートマホーク』をMAXイグニッションし放つ『インフェルニティ・クラツシユ』とグルートマホークを脚に装着して放つ踵落とし『クラツクエンド・レクイエム』

◆仮面ライダーレクイエム

リベース・テンパランス

SPEC

身長：195cm

体重：88kg

パンチ力：3.3t

キック力：6・66t

ジャンプ力：88m

走力：1000mを3・3秒

アニメアルカナ《テンバランス節制》により姿を変えたレクイエム

高い出力による攻撃と精密な制御に特化した形態

バイザー『デスサイズアナライザー』により必要な情報を即座に分析・演算し、グロブ『ハンドテンバランス』がその結果を受け取り精密に動作することで他形態に難しい作業を可能にする

専用武器『ブラストロファイヤー』はマグナム、エミツション、サーベルへ形態切り替えが可能であり、体のジョイントに繋げることでブースターとして使用することも可能
必殺技はブラストロファイヤーをMAXイグニッションして放つ『エグゾーステッド・ボム』とブラストロファイヤーのブーストで最大加速した状態で放つ蹴り技『バニツシユエンド・レクイエム』

◆仮面ライダーヴァジュラ

イレクト・ジャステイス

SPEC

身長：195cm

体重92kg

パンチ力：5.3t

キック力：5.5t

ジャンプ力：35m

走力：100mを5秒

十一宮 正義がヴァジュラドライバーとアニマルカナ《正義》ジャステイスにより変身する強化兵装

アニマルカナにインストールした白のアニマ波形をヴァジュラドライバーのユニット『カウンターアクティバイザー』により爆発的に増幅、そのエネルギーをマテリアライズしたものをアンダースーツ『ヴァジュラアクティヴウェア』として纏い、専用白バイ『アドミニストレーター』の強化装甲『アクティヴァーマメント1』を装甲として装着して変身が完了する

専用拳銃『ヴァジュラスハンマー』と専用兵装『ヴァジュラアームズ』のマグナムモードを使った二丁拳銃戦法とガンカタにより戦闘を行う他、アーマメントコントロールによりレーザーユニットとしてアクティヴァーマメント1を使った遠隔攻撃も可能
必殺技はカウンターアクティバイザーを最大起動して放つ飛び蹴り『ジャステイス』

パニッシュメント』とヴァジユラズハンマーにアニマアルカナをリードして放つ『パニッシュメント・ブラスト』

◆仮面ライダーヴァジユラ

イレクト・ハーミット

SPEC

身長：190cm

体重：80kg

パンチ力：3.5t

キック力：7.0t

ジャンプ力：70m

走力：100mを7秒

隠岐津おきつ 九留美くるとみがヴァジユラドライバーとアニマアルカナ《隠者ハミット》により変身する強化兵装

専用装甲車『ハーミットダイザー』の強化装甲『アクティヴァーマメント9』と特殊繊維マント『ハーミットローブ』を纏う

複眼『サーキットアイズ』により半径8000mまでのターゲットを捕捉可能であ

り、リアルタイムの状況分析により的確なサポートと精密な狙撃を可能とする

必殺技はヴァジユラアームズスナイパーモードから放つ『パニッシュメント・スナイプ』とカウンターアクティバイザーの最大解放により放つ浴びせ蹴り『ハーミット・パニッシュメント』

ノーワンデーファイル

■トラフィック・ノーワン

作成者：ジャック・ランタン

タイプ：《杖》

死因：交通事故死

素体：淡島あわしま 大吾だいご

淡島 大吾が変貌した非死者。フェーズ0

埋葬部隊の識別名は非死者15号

車のパーツを多数取り込んだ歪な姿をしており、力任せに腕や巨体を振り回して破壊活動を行う

■トラフィック・ノーワンII

作成者：ジャック・ランタン

タイプ：《杖》

死因：交通事故死

素体：

交通事故死した人物から生まれた非死者16号。フェーズ0

トラフィック・ノーワンとほぼ同型

目立った破壊活動の前に埋葬部隊によって埋葬された

■ バイク・ノーワン

作成者：ジャック・ランタン

タイプ：《杖》

死因：バイク事故

素体：井吹いぶき勝まさる

バイク事故により死んだ青年・井吹 勝から生まれた非死者17号。フェーズ1

バイクに変形する能力を持ち、勝のもっと走りたかったという欲望に従い爆走する
マフラーユニットなどから火球を放ち、進路上の障害を破壊する

■ ハング・ノーワン

作成者：ジャクリーン・シャンデリア

タイプ：《杯》

死因：首吊り自殺

素体：綾辻あやつじ 彩奈あやな

綾辻 彩奈が姉の沙彩の黒アニマから作られた首吊り縄で首吊り自殺をし誕生した非死者18号。フェーズ2

ロープが編み込まれた腕を解き首吊り縄を生み出してターゲットの首に縄をかける
と怪力で引き摺り上げ締め殺す

編み込まれた巨腕のパワーは凄まじく、パンチ力は50tを下らない

■バーナー・ノーワン

作成者：ジャック・トーチ

タイプ：《剣》

死因：焼死（バーナーで負った火傷のトラウマ）

素体：

押さえ込んだ家への反抗心を元に誕生した非死者19号。フェーズ2

黒のアニマが白のアニマをどんどん飲み込み、時間経過と共に活動時間が伸びていく
体中に張り巡らされたパイプに灰色のアニマの炎を循環させ、高出力で排出することができ、ありとあらゆるものを燃やし尽くす

誕生経緯から町工場を特に憎み、優先的に攻撃する

■ ツインズ・ノーワン

作成者：ジャック・ランタン

タイプ：《杖》

死因：病死

素体：相生^{あいおい} 祐樹^{ゆうき}

難病の少年・相生 祐樹から生まれた非死者20号。フェーズ2

祐樹がバニシングツインを経て生まれ、そのことを母から聞いて認知していたことから2人で1人のノーワンとして誕生。同時に撃破しなければ倒すことができない

体に取り込んだ車のオモチャや人形を投げつけ爆弾としたり、紙テープを放って攻撃する

ランタンの言葉により破壊行為を「遊び」と認識している

第9話 「12の正位置：エレクトリック・アイドル」

あるビルの駐輪場

その近くの変電設備のコンテナ

ーゴシヤツ!!!

そこに突然「なにか」が落下してきてコンテナをひしやげさせる

半壊したコンテナの電圧板にぶち当たったのか派手なスパークと電撃の漏れる音が響く

「あがあああがあがあああがあああ!!!」

落ちてきた「何か」が凄絶な悲鳴を上げながらバタバタとのたうち回り耳障りな音を立てる

肉が焦げる嫌なおいが辺りに充満してくると共に「何か」は静かになり、痙攣も徐々に小さくなっていく

それを眺めていたのは灰色のゴシックドレスを揺らす異形

『「いいねえ、超クールな死に方じゃん♪」』



どこかのアパートの小さな一室

暗くした部屋の中でソファに深く座り込み、ヘッドフォンをして音楽を聴く少女が一人

ヘッドフォンから漏れるほどの大音量で聴きながら小さく首を揺らす

ぱちくり、と目を開くとその目の前のソファに奇妙な大男が一人深く腰掛けていた

黒い骨格模様の入ったパーカー

フードから覗く顔はゴツイ軍用のガスマスクで覆った得体の知れない奇妙な男だった

少女がヘッドフォンを外し、男に気だるそうな視線を向ける

「……スカル。女の一人暮らしの部屋にノック無しで出没するのは、怖い」

スカルと呼ばれた男はシュー……と息を漏らしながら額を掻く

『あのさ、何度もインターホン押したんだけど。というか間違はなくそのヘッドフォンのせいだろ』

「人のせいにしない」

『ええ……』

強面に似合わない線の細い声で反論したが反論し返され、シュコー……と落胆の息を漏らしながらスカルがガスマスクで覆われた顔を手で覆う

『……泉^{いずみ}。妹にはちゃんと礼儀教えておけよ』

机の上のスマホスタンドにスマホと並べて置かれたカードデバイスのディスプレイに顔が表示され、口を動かし始める

『あ？なんだスカル、お前うちの可愛いキー子に文句あんのか？』

『この兄にしてこの妹だったわ』

スカルの前でヘッドフォンを放り投げた少女がスカルに改めて視線を向ける
「ここに来たってことは、できたの？」

少女の言葉にスカルはまたシュー……とため息をこぼす

『いや、すまんがまだだ』

『エラく時間かかるじゃねえか』

『元々のシステムもブラックボックスが過ぎるんだよ。まあ当然だろうなあ。』

誘波^{いざなみ}

六美^{むつみ}はこの事を見越した最終セーフティで遺したんだろうからな』

スカルは床に下ろしていたリユックから取り出したノートパソコンを開いて見せる『唯一の完成品は、このレクイエムとかいうヤツが持つてるから調べようがねえしな』

そこに映し出されたのは仮面ライダーレクイエムが戦っている様子の映像だった。監視カメラの映像の切り抜きのようだ

それを見つめながら無表情のままキー子が呟く

「これが…『仮面ライダー』、か…」

『へえ、中タイカすカツコしてんじゃん』

シユー……と息を吐きながらスカルがノートパソコンを畳む

『まあそうは言っても後は最終調整段階ではある。もうすぐ完成するから、これでも聴いて待つてな』

懐から取り出した一枚のCDを置く

最近流行りのアイドルのものらしい。可愛らしいアイドルの写真とポップなイラストが溢れたジャケットをしている

「……スカル、ドルヲタ？」

『違う。最近JKに流行ってるらしいから、音楽良く聴いてたお前にもウケるかと思つてだな』

『JKって…良くCDシヨップが売ってくれたなそのナリで』

『めちやくちやビビられたけどなんとか買ってきたの。それだけ苦労して手に入れたんだ。大事に聴いてくれよ』

立ち上がり、手を振りながら去っていくスカル

その背を見送ってからコンポにCDをセットし、曲をかける

『♪ビリッと!!?ピカッと!!?シビれて世界!!?』

ポップながらギターのサウンドも混じるノリのいいイントロが響きはじめ、ハイトーンで明るい声の歌声が響き始める

「……なかなか」

『……だなあ。捨てたモンじゃないなアイドル』

体を揺らしてリズムを取りながらタブレットの電源を入れてインターネットを開く
CDのジャケットを見てそこに書いてある名前を入力する

『綺羅星^{きらほし} ヒカリ』

『キー子、俺にも見せてくれよ』

「ん」

テーブル上のアニマルカナを手にし、胸ポケットに入れる

胸ポケットから見えるように顔アイコンが移動して画面を見る

見つけた記事の見出しを見たキー子が目を丸くする

「…? 『死から蘇った奇跡のアイドル』 って」

『ほう…そいつは面白いな』

アニマルカナの顔アイコンがニヤリ、と口角を上げて笑った



「奇跡の蘇りを果たしたアイドル?」

テーブルの上で木彫りの彫刻を削りながら十三じゅうぞうが訝しげに言う

「そう。最近学園では専らウワサだぞ?」

「そうなのか…?」

「保健室に寄る連中も良く話してるし、なんなら体調不良でベッドで寝ながらもスマホやらで聴いてるヤツらもいる」

キャンドルがスマホの画面を十三に見せる

『自殺からの奇跡の復活!!? 綺羅星』ヒカリはどこまで輝くのか?』

「復活……か」

「まあ、順当に考えれば……ノーワンだろうなあ」

キャンドルは動画サイトを検索し、綺羅星 ヒカリが歌っているMVを見つけて音楽を流しはじめる

『♪ネオンサイン煌めく 満点の夜空に響かせて』

十三が彫っていた木彫りを置いて腕を組みながら、ポップな歌声に耳を傾ける

「おや? 惚れたか?」

「……まさか。まあいい歌声だとは思うが」

十三は自分のスマホでも綺羅星 ヒカリを調べて幾つかのニュース記事を眺める

「自殺したと報道された次の日にステージに無傷で現れ、話題になっている……それ以外悪い噂は、ほとんど無いな。せいぜい所属事務所が待遇やら環境のいい事務所になっ

「てきている、つてことくらいか…」

「キャンドルが歌声のリズムに合わせて体を揺らしながら十三じゅうぞうの方を向き悪戯つぼく
笑う

「しかし、講師とはいえ花の高校生がいる学園にいながら噂に疎いヤツだなあ？」

「あいにく、美術部兼文芸部の生徒たちはそういう話題とは無縁だからな…」

棺ひつぎのみやノ宮中央駅周辺

駅近のビル内の大型CDショップを輪音りんねは訪れていた

「この人が、綺羅星きらほし ヒカリ」

店頭の大型ポップアツプを見つけ、販売ブースに歩み寄る

美術部での活動中、鼎かなえが面白い噂があると教えてくれたのがこのアイドルだった

曰く「歌もめちやくちやいいから是非聴いてみてよ!!？」とのことだったので輪音りんねも

興味があったのだ

CDのジャケットを見比べてみると、隣で試聴していた青年がヘッドフォンを外
したのをチラと見て思わず二度見した

「え、正義せいぎさん!!？」

「!? 十つなし輪音りんね…!?？」

青年、十一宮 正義が驚きに目を見開く

しばらく固まっていた輪音たちだが、正義が咳払いし口を開く

「……こんなところで会うとは、妙な縁があるな……」

「は、はい……正義さん、こういう曲聴くんですね」

正義はため息を吐きながら眼鏡を直し首を振る

「普段は聴かない。ジャズは聴くんだが」

輪音の方をチラと見、バツが悪そうに視線を少し逸らし手にしたCDを見ながら正義が

口を開く

「……逸羽 五月の、気分転換になればと思ったんだ」

「……!!??」

正義の口から出た名前に輪音の体が強張る

「五月……さん、今どうしてるんですか……?」

輪音が震える声で問う

「……まだ、我々でも面会謝絶中だ。精神状態が不安定な状態が続いている。何故か、ノー

ワンの埋葬による記憶消失が不完全なままなんだ」

正義はきちりと現状を説明し、輪音は口元を押さえる

「そんな……!?」

「……………」

正義は眼鏡を再び正し、輪音を真つ直ぐ見下ろす

「こちらとしても特異な例だ。部隊の研究者たちが総出で解析をして治療にあたっている」

目を伏せる輪音に正義は視線を泳がせる

「……俺は、ノーワンの埋葬による記憶の消滅こそが、残された人々への救済だと思っている。それは……まだ変わらない」

「だが俺は……まだ逸羽五月を救えていない」

正義の悲痛そうな声に輪音は顔を上げる

正義は辺りを見渡し輪音に顔を寄せると小声で伝えてくる

「……キミのことは、上には伏せている。キミは口の軽い人間では無いと信じているからな」

「……!!? あ……………」

正義はCDを置き、立ち去ろうとする

「あ、あの……………」

輪音はその背を呼び止め、店頭から少し奥に行って一枚のCDを手に取り正義に見せる
「……この方の歌……いつもシヨックなことがあった時に聴いてるんです……!!? 疲れた時

とか、辛い時とかに、心に響くようで……とてもいい曲なので……!!？」
 輪音が言おうとした意図を察したのか、正義は一瞬驚いたような目をした後に少し表情を綻ばせ薄く笑う

「……ありがとう。これを差し入れてみることにする」

正義はCDを受け取ると支払いを済ませ、輪音に少し会釈して去っていった

それを見送った輪音は試聴ブースで綺羅星 ヒカリの歌を聴きはじめた

「……うん、いい曲」

頬を綻ばせて輪音はしばらく曲に耳を傾けていた

埋葬部隊本部 局長室

「お時間いただき、ありがとうございます」

執務机前に立つ隠岐津 九留美が頭を下げる

腰掛けた八十八 影斗が九留美の方を見て微笑む

「固くならなくていいよ。私は気にしないから」

「いえ、そういう訳には……」

コホン、と九留美が咳払いをすると影斗を睨むように見据えながら口を開く

「……単刀直入にお聞きします。非死者0号を討伐対象とし続けるのは何故なのですか？」

九留美くるとみの問いに影斗かげとは目を細める

「……また随分と唐突な問いだね」

「前回の任務、暴走列車事件で単純に疑問に思っただけのことです」

影斗かげとは机に置かれていたヤクルトを一口飲んで唇を潤す

「非死者0号として確認しているあの存在は、我々と同様にノーワン及びジョンドウと敵対する存在です。そして人間には危害を加えていません。それどころか、彼はノーワンたちにも寄り添っている」

「敵対、などではなくむしろ……我々は彼らと手を取り合うこともできるのではないですか？」

影斗かげとは空になったヤクルトの容器を眺めて机に置く

「敵の敵は味方……という風にはいかないのだよ」

影斗かげとは九留美くるとみを冷たい瞳で見据える

「彼がノーワンたちと敵対し、人間への攻撃は行なっていない。それは確かに事実だが……万が一ノーワンが滅ぼされた場合は？」

「それは……」

「彼が人間側の敵にならない、とは保証できないのだよ」

九留美くろみが「ごくり、と喉を鳴らす

「ノーワンどもを全て倒した時、彼が『新たな死』を振り撒かない保証は無い。恐ろしいことに、ね」

「人の死と同じさ。どこから、いつくるかわからない。だからこそ原因は全て切除しなければならぬ。秩序ある真つ白な正義の手によつてね」

八十八やそや 影斗かげとはただ優しく、そう微笑んで答えた

目を伏せ言葉を飲み込む九留美くろみの前に影斗かげとは書類の束を取り出す

「あー、そういうえば……これを」

影斗かげとから書類を受け取り、その内容を見ようとページを捲る

履歴書のようなそれに添付された顔写真を見て九留美くろみは目を見開いて固まった

「埋葬部隊の実動隊に新たに加入してもらったことになった。同時に、新たなヴァジュラドライバーの運用者にも選んである」

「な、ちよつと待つてくたさい!?? そんなー」

影斗かげとが目を細め微笑む

「悪いが決定事項なんだ。正義隊長せいぎにも事情の説明を頼むよ」
九留美くるとみはただ呆然とその言葉を聞くことしかできなかった



暗い夜道を歩くのは高校生から大学生くらいの背格好の女性
スマホをいじりながら歩いていると、ある音が聞こえてきた

【～♪】

歌だ。ポップなアイドルソングの歌

「……………?」

聞き覚えのある歌に思わず足を止める

聞こえてきた歌は綺羅星きらほし ヒカリのヒット曲『ネオンスターライジング!!?』の鼻歌
だった

女性の目の前の闇を引き裂き、赤、黄色、緑のカラフルな光が踊りながら現れる

そこに現れたのは全身に煌めく電光装飾を持つ怪人だった

顔と胸には電光板を持ち、指先はペンライトのような構造でこちらもカラフルに光り

輝いている。頭からはツインテールのような電飾コードの束が伸びていた

煌びやかなスカートを持つアイドルのような装飾の下には灰色の蠟を固めたような歪な体が見えていた

現れた怪人は手にマイクを持ったような仕草をしつつ鼻歌と共に歌って踊りながら女性に近づき、指を指す

【キラキラ輝く星は、ずうつと輝かなくっちゃ!!?】

顔の電光表示が笑顔から怒り顔のような顔に変わり、黒い画面が真っ赤に染まる

【そのためにい……邪魔な蛾は払わなくちゃいけないの】

明るい声から無感情な低い声に変わると共に怪人は両手を女性に向け、袖から大量のコードを伸ばして女性に巻き付けるとぐいっと引き寄せる

【さ、人生最期の大サービスだよ?】

身動きの取れなくなった女性の目の前でパカッと胸の電光板が開く

その下の高圧盤がバチバチとスパークするのを見て女性が「ひっ!!?」と恐怖の声を漏らす

【はぁーい、ぎゅ〜!!?】

暴れる女性をそのまま両腕で抱き締めるように抱え込み、顔から高压盤に押さえつけ抱き締める

顔を高压電流の中に突っ込まされた女性は壊れたおもちゃのようにもがくが、怪人の力の前では振り切れることも許されない

バチバチと感電する音と肉の焼ける嫌な音が充満し、びくびくと痙攣していた女性の体が脱力する

「……………これでまた、一歩近づいた」

「でも、まだ足りない」

べりつと女性を引き剥がし、ゴミのように捨てて蹴り飛ばすと怪人はスキップしながら去っていくようにする

が、何かに気づき振り向きながら飛来した光弾を撃ち落とす

「ノーワンだな？」

振り返った先に現れていたのはCDシヨップから帰る途中だった正義せいぎだった。ヴァジュラスハンマーの銃口をノーワンに向けながら油断なく構え直す

「ノーワン？ 違うよ。ヒカリは永遠の綺羅星!!？ 輝けるアイドル!!？」

「アイドル…だと?」

正義せいぎが顔をしかめる

「ごめんね〜今日はもうライブ終わりだから、バイバイ!!?」

ノーワンが手を振ると背中からペンライト型のミサイルがスパークしながらあたりに降り注いでいくが正義せいぎは素早い身のこなしで回避し、ヴァジュラドライバーを装着してアニマルカナを装填する

「変身!!?」

《ACTIVEアクティブIONイオン》

《ELECTエレクト:JUSジャスTICEティス》

ヴァジュラのアンダースーツが装着されると共に自動操縦で走ってきたアドミニストレータートが逃げようとするノーワンを跳ね飛ばしながら装甲をパージ。ヴァジュラに装着され正義せいぎがヴァジュラ・ジャステイスへと変身する

《ADMアドISTRミニATIONニオン STスARTター》

「はっ!!?」

ノーワンの放つネオンミサイルを弾丸で弾きながら肉薄したヴァジュラ・ジャステイスの攻撃をノーワンは踊るように受け止めながら反撃してくる

「ちよつとちよつと!!? 乱暴はやめてよ!!?」

キー子が左手で人差し指と小指を立て、手の甲を見せたコルナポーズを見せながら
 ベーと舌を出す

『俺には違いがわからんが、まあいい』

スカルは乱雑に散らかったテーブルの上のものをまとめて下ろすとその上に大きな
 アタッシユケースを置く

蓋を開いたそこには黒光りするデバイスが鎮座していた

右と左に大きくレバーが張り出した舵輪かハンドルのような装飾の中央にはちよう
 どカード大の何かが入りそうなスペースがある

それを見たキー子が目を丸くし、食いつく

「できたんだ…!!?」

『ほう、コイツが例のヤツか!!? いいねえ!!?』

騒ぐ2人(?)を眺めてスカルはシュー…と息を吐く

『コイツもサービスに付けとく。お前のセンスに合わせといた』

スカルが取り出したのは少し大型のカラベラ人形のキーホルダー

それを受け取ったキー子は早速足元のギターケースを蹴り起こし、それをぶら下げる
 『ノーワンやジョンドウの放つアニマの波形を感知したらカラカラ鳴るようになって
 る。センサーってヤツだ』

「なるほど」

『そいつは便利だなあ。俺は臭いはわかってても出現はわからんから取り逃しちまうことが多かったし』

スカルは2人(?)の顔を見比べ、マスクを直す

『まあこれにてようやくスタート地点つてワケだ』

『俺と、お前ら八七兄妹の『復讐』が…な』

スカルの言葉を聞いたキー子ー八七 希はテーブルの上に置かれたスマイルが描かれたマスクを手にし、顔に被る

「ー最高のショー、まもなくオンエア」

ま笑う
 コルナポーズを決める希に合わせて愉快そうにセン兄ー八七 泉がカードの姿のまま

『Don't miss it!!? つてなあ!!?』

廃れた地下スタジオ

『最高にクールじゃなくいい♪いいわよエレクトリック。アナタ最高にキラキラしてクルだわ』

少し離れた席に座る刈り上げた髪の大男一ジャック・トーチの人間体はつまらなそうにステージを見たまま声も上げない

『ちよつとトーチ。アンタもなんか盛り上げてみなさい?』

「何故オレがそんなことをせねばならん」

トーチがはあ、とため息を吐く

シャンデリアに視線を移しながらトーチが口を開く

「……ランタンはどうした? ヤツも興味がありそうなノーワンだが」

今度はシャンデリアがうんざりしたようにため息を吐き出す

『クソランタンなんか知らないわよ。なんか確か、用事があるとかやることがあるだとか言ってたわね』

「やること、だと……?」

シャンデリアの告げたランタンの様子を聞いたトーチが訝しむように首を傾げた

(……オレ以上に刹那主義の享樂者のランタンが、何かを探しているのか……? 一体何を……?)

「な、なんだい正義隊長…!!? 心臓に悪いことはやめておくれよ…」
戸惑いながらも軽口を叩く影斗

それを睨む正義の顔には烈火の如き怒りが見られた

「これは、どういうつもりですか…!!?」

手にした書類を握りしめながら影斗に突きつける

それを見た影斗はキョトンとした顔を一瞬見せたが淡々と答える

「そこに書いてある通りだよ。逸羽 五月を特例的に埋葬部隊の隊員及びヴァジュラシテム運用者に任命する。それだけ」

あつげらかんと答えた影斗を強く睨みながら正義は問い詰める

「俺はどういうつもりかと聞いているんです!!? 彼女はノーワンの被害者、加えて高校生の一一般人だ!!? 治療を優先していた彼女を何故、我々の部隊どころかヴァジュラシテムの運用者に任命したんです!!?」

影斗は眼鏡を磨きながら口を開く

「君が今言った通り、『治療のため』さ。ヴァジュラに運用されているカウンタークティバイザーは使用者のアニマを活性化させる。彼女のアニマに残る干渉影響を落と

すには、これ以上無い処置になると私もジュナくんも結論づけた」

「加えて彼女は、キミと同様に潜在的にノーワンに強い憎悪を抱いている。その発散と我々の戦力増強が図れるなら、この選択肢が最も有効だと私が判断したんだよ」
影斗かげとの言葉を聞いた正義せいぎは唇を噛み締め、部屋を去ろうと背を向ける

「彼女のこと、頼んだよ。正義隊長」

その背ににこやかな声が浴びせられた

埋葬部隊本部の廊下

局長室を後にした正義せいぎが突き進む先から歩いてきた1人の女性隊員が敬礼する
その顔を見た正義は目を見開いて立ち止まる

「きよ、今日からよろしくお願いします!!?隊長!!?」

逸羽いつは 五月さつき

この前まで死んだような目をしてやつれていた少女が生氣を取り戻した顔色でそこ

に立っていた

右こめかみには火傷を隠すバンテージが巻かれている

「逸羽……五月……」

「はい!!?あの……入院中はお世話になりました。それとー」

五月は隊服のポケットからCDを一枚取り出す

輪音が選び、その日のうちに五月に差し入れたあのCDだった

「このCD、ありがとうございます」

「おかげで、気持ちを整理することができて一歩踏み出す決意が固まりましたから!!?」

五月の言葉に正義はただ言葉が返せなかった

「隊員として、仮面ライダーヴァジュラとして、ご指導よろしく願います!!?」

元氣に一礼して五月が去っていく

その姿が見えなくなると、正義は力のままに拳を壁に叩きつけた

あまりの衝撃にリノリウム状の壁がひび割れへこむ

「俺は……俺は……ッ!!?」

「ひっ、ひいいいっ!？」

電灯が照らす夜道

悲鳴を上げながら腰を抜かして後ずさる男にバチバチとスパークするコードがゆらゆらと迫る

「ヒカリは輝かなくちやいけない。いつまでも、どこまでも!!？」

【だからア、アナタもヒカリとお星様になる?】

エレクトリック・ノーワンが腕から漏電するコードを伸ばしながら電光表示で微笑む男の顔が絶望に歪む中、それを壁を這うトカゲが見下ろしていた
その背に付いたカメラがぐるぐるすると忙しなく動いていた

夜道をグレイブースターが疾走する

インカム越しに十三じゅうぞうがキャンドルに問う

「反応はこの先で間違いないんだな!？」

『ああ、そうだ』

答えるキャンドルの声が訝しむような声色に変わる

『だが……妙な反応もある。なんだこいつは?』

エレクトリック・ノーワンが男をコードで絡めようとしたその時
「とうつ」

その体に飛び蹴りが突き刺さり、大きく吹き飛ばされる

【いたた……何?!!?】

エレクトリック・ノーワンを蹴り飛ばした小柄な影が立ち上がる
フードを被り、顔にはスマイリーマスクを付けた人物

「復讐に燃えるヒーロー、かな?」

現場に駆けつけた十三じゅうぞうは逃げ行く男とすれ違いながら奇妙な乱入者を見つめて首を
傾げる

「なんだ……? おいきミ!!? そいつは危険だ!!?」

十三じゅうぞうの言葉にマスクやしちー八七のぞみ 希は微かにマスクを揺らす

「知ってるよ。大丈夫」

「何を言ってるんだ……!!?」

十三は腰にデスサイズドライバー・ギロチンを装着し、アニマアルカナを取り出して驚愕する

《デスサイズドライバー・ガロット》

希は肩にかけたギターケースを蹴り開け取り出したドライバーを腰に巻いた

舵輪のようなバツクルは大きく形状が異なるが、その基部は間違いなくデスサイズドライバーだったのだ

「なー」

十三の前で希はアニマアルカナを取り出し起動

デイスプレイの心電図が歪み、悪魔のような顔を映し出す

《セブン：チャリオット》

『さあて、ワンマンライブと行こうかア!!?』

泉のシャウトと共に希はドライバーにアニマアルカナをセット

待機音楽に合わせてステップを踏み、左手で首を掻き切るポーズをしてコルナポーズ

を決める

「変身」

舵輪型のバックルのハンドルを掴み、回転させる

《エクスキューション・アツプ》

《アツパー・チャリオット》

ガイド音声と共に希^{のぞみ}の首にリングが出現

両側から現れた杭がリングごと首を貫き、希^{のぞみ}が脱力するとその頭部が黒い炎に包まれ燃え上がる

ゴキンツ!!?

更^にその首輪が回転。首が180度回ると体も黒い炎に包まれ、黒いライダースーツ状のスーツを形成

首から噴き出すオレンジの混ざった黒い炎がポンチョの形となり纏われると同時に、両腕にバレットベルトが装着されそれぞれ6門の砲身が伸びる

めきだつもので別れつつも溢れていた

「どこの誰かは知らないが、面白いことをするじゃないか」
キャンドルが獯猛に微笑む

薄暗い部屋の中、リアルタイムで送信される中継画像を編集しながらスカルがガスマスクの下で口角を上げる

『派手に行こうか。黄泉平坂、根の国に届くまで』

『俺たち流の弔い合戦、はじめようじゃないか』



「変身…した…!?」

驚愕する十三じゅうぞうの言葉を遮るようにエレクトリック・ノーワンが叫ぶ

【何？ヒカリの邪魔すんの…!?】

『邪魔なんかしねえよ。ロックじゃねえ』

『俺たちの名は…あー…』

怪人はチラッと十三じゅうぞうの方を見る

『ムエルト、仮面ライダームエルトってヤツだ』

怪人ー仮面ライダームエルトはエレクトリック・ノーワンを指差し挑戦的に告げる

『俺らの目的は「復讐」だ。最高にロックなヤツさあ!!?』

怪人がエレクトリック・ノーワンに迫る

【どっちにしろ、邪魔!!!】

エレクトリック・ノーワンは袖からコードやペンライト型ミサイルをばら撒いてくる
怪人は腕を合わせて擦り、腕のバレルを回転させて黒の弾丸をばら撒く

ペンライト型ミサイルが撃墜され、ノーワンの体表が爆ぜる

『いいねえ!!祝いの花火にや、ちようどいいなあ!!!』

ムエルトが肉薄する

そこに稲妻を迸らせた貫手が迫るが、ムエルトはその腕を掴み押さえると豪快なヘツドバットを決める

【ガッ…!!?】

ひしゃげび割れた顔面ディスプレイが火花を散らす

のけぞったノーワンを逃さず、ムエルトは浴びせ蹴りを打ち込んでその体を吹き飛ばす

『ハッハー!!! どーよ!!?』

拳を打ち合わせながら親指と人差し指、中指を立て逆さにしたゴンフィンガーを両手でキメる

「ー負けない、よッ!!!」

エレクトリック・ノーワンが腕を振るう

袖から伸びた電飾ムチが多数に枝分かれし、有機的にのたうちながらムエルトに襲いかかる

『しゃらくせえ!!!』

ムエルトは両腕の銃を乱射し、ムチを抑え込むが何本かはそこから抜け出し盛大に火花を散らす

足元に炸裂したムチをボックスステップで回避したムエルトをエレクトリック・ノーワンが睨む

【ヒカリは、綺羅星きらほし ヒカリは輝かなくちゃ…一等星じゃなきやダメなの!! アイドルと

しても、アイドルじゃなくとも…!!?】

振るわれるムチを撃ち落とす中、ムエルトの脳裏に声が響く

《セン兄ばかりズルい。交代》

『あん？わかったわかった。急かすなよキー子』

ドライバーからアニマアルカナを取り出し、ムエルトが新たなアニマアルカナを取り出して起動する

《エイト：ストレンジス》

新たなアニマアルカナをセットして舵輪型のバツクルを回転

《エクスキューション・アップ》

《アッパー・ストレンジス》

再び現れたリングがムエルトの首を180度回す

迫るムチの攻撃を脱ぎ去ったポンチヨをはためかせて弾き、脱いだそれを腰に巻きつ

けスカートにする

更に腕から引き剥がしたガンベルトを新たに脚に巻きつけ、束ねられた銃口が新たに一つの大型銃を形成する

エレクトリック・ノーワンの放つミサイルをバク転しながらの脚銃の乱射で弾き、着地するとヘルメットを被るように逆さになったドクロをバイザーとして下ろし、首輪となっていたリングが後頭部に移動し、その真ん中からポニーテールのようにケーブルが伸びる

「―選手交代。ピッチャー、私」

片脚を上げながら挑発するムエルトから聞こえる声のぞみが希のものに戻る

ムエルト・アツパーストレンジスは振り上げた脚を力強く下ろし、それを軸に瞬間加速するとエレクトリック・ノーワンに一気に接近してその体を蹴り上げる

ブレイクダンスを踊るように体勢を変え、片手立ちしながら両脚を振り上げて脚銃の銃口を向けて空中のエレクトリック・ノーワンを撃ち抜く

更に落下してきたエレクトリック・ノーワンを逆立ちしたまま背中を付けて回転し、脚銃からの銃撃でお手玉した後には蹴り飛ばす

【があっ!?!】

エレクトリック・ノーワンが地面を転がり倒れ伏す前でムエルトは体を捻らせて勢いをつけて立ち上がる

《エクスキューション・アップ》

《アッパー・チャリオット》

再びアッパーチャリオットの姿に戻ったムエルトが腕の銃口をぼろぼろになったエレクトリック・ノーワンへ向ける

『ーっと、やめだ。アンタ、逃げていいぜ』

が、何を思ったかムエルトはその銃口を下げ、両手を上げて降参の意思を示す
「なっ!?? 何を考えてるんだ…!!?」

《エクスキューション・アップ》

《リバース・デス》

勢いに置いてかれかけていた十三じゅうさんが泡を食いながらレクイエムに変身

ノーワンに向けて駆け出そうとする

ーガガガガン!!!

その足元に銃弾が降り注ぎ、思わず足を止める

「お前……?」

レクイエムの足元に向けたムエルトの銃口から煙が上がっていた

『悪いな、先輩。^{センパイ}だが、俺たちは言ったはずだ』

ムエルトはレクイエムに銃口を突きつけ、ソンプレロの鎧をなぞる

『俺たちの目的は、「復讐」だってなあ』

第10話「12の正位置：グレイトフル・ワンナイト」

銃口を向けるムエルトをレクイエムが睨む

「ぐうッ、うううッ!!!」

その後ろで立ち上がったエレクトリック・ノーワンが逃走する

「!? 待て!!!」

追おうとしたレクイエムをムエルトが押さえる

『行かせねえよ先輩ッ!!』

「お前……!? 何をしてるかわかっているのか!?」

レクイエムの怒声を受け止めたムエルトが口を開く

『ああ、わかってらあよ。体験済だかなあ』

「……なんだと……!?」

突如ムエルトが力を抜き、レクイエムの手を離す

いきなり解放されつんのめるレクイエムの前でムエルトは変身を解く

元の姿に戻った希がマスクを脱ぎ、素顔を見せる
 「私たちからの誠意」

「……は？」

呆けた声を漏らすレクイエムに希が手にしたアニマルカナの顔がハア、とため息を吐く

『顔バレしてやったんだ。それが誠意だよ』

「誠意……？なんのために？」

希が口元をアニマルカナで隠しながら告げる

「私たち兄妹と共犯者は、あなたと敵対しない証明」

『約束反故にしたら、いつでも黙らせられるようにってな』

「……」

レクイエムはその言葉を聞くと、彼らと同様にアニマルカナを取り外して変身を解除する

『あ……？なんでお前さんまで？』

十三が嘆息しながら答える

「俺もお前たちと事を交える前提の話はしたくないから、だ。少なくともキミらの目的はわからなくとも、埋葬部隊ほど話のわからない連中じゃないことはわかる」

『……いいのokay?』

「いいさ。わざわざ顔見せまでしてくるバカ正直な連中をいきなり敵視するほど俺も血の気があるわけじゃない」

そう言いながらも十三^{じゅうぞう}は希^{のぞみ}の腰に収まるデスサイズドライバー・ガロツトを見て少し目を伏せる

「……まあ、聞きたいことは山ほどあるが、な」

十三^{じゅうぞう}の言葉を聞いた泉^{いずみ}が愉快そうに笑う

『ガツハツハ!!? なるほどな、いい性格してやがる!!?』

薄暗い部屋の扉が開けられ、1人の人物が部屋に入ってくる

「中々味なことをしてくれるじゃないか、どこの誰かは知らんが」

部屋に入り込んだキャンドルは人間体の炎蝶を羽ばたかせて構え、薄暗い部屋の真ん中に座る人物を見据える

その人物の前にはパソコン。ディスプレイの明かりが部屋を照らしており、画面には暗くなった画面とヒートアップしているコメント欄が見える

パソコン前の人物はシュー……と呼吸音を漏らしながら立ち上がって振り返る

ガスマスクに覆われた不審なその顔を見たキャンドルは片眉を上げる

現れていたのはゴシックドレスを纏う少女ーシャンデリアだった

灰色の瞳を煌めかせながら歩み寄ってきたシャンデリアは「ヒカリ」の顔を撫でて笑う

「今あんたは『綺羅星』ヒカリ」でしょう？ 綺羅星ヒカリは、そんなコト言うのかしら……？」

悪戯っぽくシャンデリアが告げる

それを黙って聞き入れたシャンデリアは髪飾りを拾い、髪を束ねはじめる

「……言わない。ヒカリは……『ヒカリ』は、最高に輝く一等星だから。『私』みたいに、モノにあたらなから……!!?」

髪を再びツインテールにセットし、弾けんばかりの笑顔と共に顔を上げてそう答えた

『綺羅星』ヒカリ』を見てシャンデリアは恍惚とした笑みを浮かべる

「そうよ。それでいいの。あんた、最高にクールで面白いわあ」

シャンデリアは自分もろともヒカリを灰色の炎に包み込み、その姿を消し去った

十三は希の案内に従い、八七兄妹が住む部屋に来ていた

薄暗いリビングに電気をつけると、そこにいた人物ともう一人見慣れた顔を見て十三
が眉を寄せる

「キャンドル、お前……」

「やあ、十三。奇遇だな」

キャンドルがニヤニヤと悪戯つぽく笑う

その対面のソファに腰を下ろしたガスマスクの人物も十三に視線を向ける

『まさかいきなりここまでコンタクトに応じてくれるなんてな』

「……あんたは、誰だ？」

ガスマスク男ースカルはシュー、と呼吸音を漏らしながら答える

『オレはスカル。その兄妹の共犯者……だけだと誠意もクソもないな。うん』

スカルは十三の方に顔を向けたままガスマスクに手をかける

『本名は……十二川 雄也、らしい。情けねえ話だ。オレがオレの名前に、「らしい」な
んて付けにやならんとはな』

スカルがガスマスクをめくり、素顔を見せる

十三は思わず一歩退いていた

ガスマスクの下にあったのは、醜く焼け爛れた黒焦げの顔

かろうじて目と鼻の穴と、焼きついた皮膚を切り開いて無理やり開けるようにした口が彼を人間だと証明していた

「……な。ひでえ顔、だろ？ どうにももう、治せねえがな」

スカルのしやがれた「肉声」が響く

ガスマスク故の歪んだ声だと思われていたそれが、彼の「地声」でもあったことが嫌でもわかった

ガスマスクを元に戻すスカルを眺めていた十三が何かを思い出し口を開いた

「十二川……まさか、あの十二川 雄也……なのか!?」

『……なるほど、あんたも忘れないでいてくれる側なんだな』

スカルが自嘲気味に笑う

対面のキャンドルが代わって口を開く

「十二川 雄也。誘波 六美の研究チームの一人としてアニメ研究に着手していた男。

まあ、末端も末端だったようだがな」

キャンドルの言葉は正解だった

六美に会いに行く際に度々挨拶や談笑をしていたことも十三はすっかり覚えていた

「なんでそんな……十二川くんが……」

十三は驚きながらもスカルに促され、キャンドルの隣に腰掛ける

希は泉のぞみ いずみの聲が響くアニマルカナをスマホスタンドに立てかけ、机の上に置いてスカルの隣に座る

「…スカルのこと、知ってくれてる人なんだ」

『ああ、そうらしいな』

希のぞみの言葉にスカルは頷き、ガスマスク越しに頬をかく

『……………正直、涙が出るほど嬉しいよ』

スカルの言葉を聞いて十三は毒気を抜かれ、肩の力を抜く

キャンドルも見定めるような目を緩め、少し頬を緩めて頬杖をついていた

『ああ、悪い。待たせてしまったな』

「構わないよ俺は。とにかく、事情は聞かせて欲しいけど」

スカルはコホンと咳払いをして話始める

『まあまずは、オレの方の話だが。オレは半年前のあの事件の時に零楼院れいろういん 咲也さくや…今はジャック・ランタンだったか？あいつの灰色のアニマの炎に、顔を焼かれた』

火傷が疼くのか、重々しく告げたスカルがガスマスクに爪を立てる

『ヤツ曰く、「実験」だとき。他人のアニメに干渉する力を手に入れた自分が、どれくらい干渉ができるのかの』

「実験……」

スカルの告げたランタンの言葉を聞いた十三^{じゅうぞう}が拳を握る

『その結果オレは、生きてはいても誰の記憶にも残ってない男になったワケだ。オレ自身
身の記憶にも……』

「……どういうことだ？」

スカルが顔を少し俯ける

『手元に焼け残った職員証でオレの名前を知った時、色々混乱したがすぐに結論に辿り着いたよ』

『顔を焼かれたオレは、「オレという表層記録」がアニメの薄皮と一緒に燃え落ちて消滅したんだ、つてな。研究も、学んだことも、もちろんメシの食い方も歩き方も知り合いや家族の顔も解る。なのに、「オレ」のことだけどれだけ頭を抱えても、オレ自身も思い出せない。まいったもんだ』

十三はその言葉に思わず唇を噛み締める

自嘲気味に笑い、スカルは額に手を当てる

『こうなつてから家族にも会いにいつて、それとなく「一人息子」の話の聞こうとした。これが傑作でな』

スカルはより深く顔を俯け、シユー…と息を漏らす

『うちには息子なんていませんけど』だとよ。まあオレ自身、家と家族との思い出が思ひ出せねえからそこまで悲しまなくて済んだのはありがたかつたがな』

そう語るスカルを十三はただ見つめることしかできなかつた

『まあそこから、オレはこの計画を始めていた。オレなりの復讐の計画つてヤツを…な』

スカルが隣の希のぞみに視線を送ると、希はギターケースを開いてデスサイズドライバー・ガロツトを取り出す

シユー…とスカルが呼吸音を漏らす

『咲也…ランタンが、「実験」を繰り返すなら、それを悉く失敗させてやる。ヤツが生み出したノーワンを死に戻して、オレのようになるヤツらを忘れられなくしてやろうつて

な』

コンコン、とデスサイズドライバー・ガロットを指で叩きながらスカルはそう告げ、ばつの悪そうに隣の兄妹を見やる

『……まあ、オレのダチとその妹を巻き込んで、尊敬してた博士の研究を横から搔つ攫つてやつとだがな……しかも、仮面ライダーの先輩までいる始末だし』

スカルは十三じゅうさんの顔を懐かしむように見る

『それがキミだったのも、納得しかない話だ』

『俺は……偶然選ばれただけだよ……』

スカルの隣で話を聞いていた希のぞみが身を乗り出す

『巻き込まれてない。私たちも……復讐鬼だから』

『希のぞみ、お前……それはー』

『ー言いつこ無しってのはお前の方もそうだぞスカル』

言いかけた言葉を泉に遮られ、スカルが頬を搔きながら引つ込む

『さて、スカルが腹割ったワケだし今度はオレらだなあ』

泉いずみが口を開き、希のぞみが頷く

「正直、私が一番興味があるのはお前だ。なんだその状態は？ 六美むつみの記憶でも、そんな事

例は見たことが無い」

「…キヤンドルと珍しく同意見だ。えっと…」

『オレは八七やしち 泉だ』

「―泉くんがそんな状態になつてる経緯はなんなんだ…？」

十三じゅうぞうとキヤンドルの言葉に泉いずみが笑う

『まあ、簡単に言えば死に損なつたのさ。混ざり損ねた、ともいうかもだがなあ』

『オレたち兄妹は早くに親亡くして風都つて街の施設で育つたのさ。こことはちよつと離れた場所だが、いい風の吹く居心地のいい街だった』

「棺ひつぎノ宮みや出身じゃなかつたのか…」

『半年前に越してきたのよ。オレの働き口が見つかつて、でも本社が風都の外つて話だから単身赴任しようとしたらキー子が泣きついて来ちまつてなあ』

泉いずみの声の響くアニマルカナを持ち上げ、希が抱きしめる

「…セン兄と離れたくないもん…」

『…ありがとよ、キー子』

泉いずみの言葉を継いで今度は希のぞみが口を開く

「結局、私もこの街の高校を受験して合格したから、2人でこの街に引っ越そうつてなつ

て。引っ越しも終わって落ち着いた時に……」

アニマアルカナを強く握りしめながら希のぞみが告げる

「ーセン兄が、バケモノに殺された」

「なー」

「……ほう?」

十三じゅうぞうが驚愕に口を開き、キャンドルが愉快そうに笑う

俯き言葉を詰のぞみまらせた希のぞみを見て泉いずみが代わる

『全身にナイフをくつつけたやべー見た目のヤツだったのは覚えてる。オレは斬られて死んで、目の前でそいつはキー子に刃を向けやがった』

『オレは無我夢中だったよ。死んでんじゃねえ!!?動け!!?動け!!?つて』

『ーそしたらまあ不思議なことに、オレの体が灰色の炎に包まれてバケモノみたいに
なつて立ち上がったのさ』

泉いずみの告げた話しゅうぞうに十三じゅうぞうが目を見開く

「まさか…ノーワンになったのか…!!? ジョンドウにアニマをいじられることなく!」
 『わからん。まあ奇跡でも起きたんだらうよ』

「バカな…そんなことが…」

『……まあその、こういうめちやくちやなヤツなんだよ、コイツ』

思い思いに驚く十三とキャンドルにスカルが頭を下げ、泉が豪快に笑う

『そのナイフ野郎をキー子から引き剥がして、右肩をぶん殴って吹き飛ばしてやったら
 そいつは逃げてキー子は助かったワケだ。まあ…オレの体はそのまま崩れちゃったが
 な』

フン、とキャンドルが声を漏らす

「…恐らく強引なノーワン化の副作用だらうよ。完全に混ざってない生のアニマと黒の
 アニマが自壊して死んだ。そんなところだらうよ」

『すげえな。スカルが言ったまんまだ。マジだったんだなあアレ』

ハハツと笑う泉が続ける

『そのあとは、オレが消えてキー子がパニックになってどこかに行っちまって、オレは何
 故かそこに居残ったまま動けない、キー子や周りのヤツに声も届かなくなっちゃった』

シユー……とスカルが呼吸音と共に告げる

『その泉を、オレが拾ったのさ。黒のアニマに意識だけ残留した状態のこいつを、手持ち

のプロトアニマルカナにインプットすることだな』

スカルが泉いずみのアニマルカナを指で弾く

「黒のアニマに意識だけ残ってた…？そんなことが…」

『まあ、こればかりはマジで奇跡だろうよ。それ以外はわからなすぎるしな』

アニマルカナを握ったままの希のぞみがゆっくりと口を開く

「セン兄が、目の前で炎に包まれたまま立ち上がって、そのまま崩れていなくなつて、どうしていいかわからなくて風都の友達や施設の先生に電話したの…セン兄のケータイも、使つて……」

少女の声は無機質な雰囲気から弱々しく、不安定なものになる

ぼろぼろ、と溢れた雫が手元のアニマルカナの表面を濡らす

「……みんな、みんな…セン兄のこと…知らないって…覚えてないって…私は、私は昔から一人っ子だったって……」

ほとんど表情を変えていなかった八七やしち 希のぞみが表情を崩し、泣きじやくりながら告げる

「セン兄が…本当はいなかったかもつて…思つちやつた…そんな、そんな私が…いやで、どうしようも…なくて……ッ」

涙を拭いながら一回り小さく見えた少女がスカルを見る

「スカルが、セン兄を助けてくれて連れてきてくれて……セン兄はまだ、いなくなつてなかつた……つて……」

震える少女の背を支え、スカルがさする

『しばらくはオレのこと離してくれなかつたよ。そうなつても仕方ねえことだがな』

2人の顔を見た十三じゅうぞうが重い口を開く

「キミらが言っていた『復讐』つてのは、そのナイフのノーワンに対する復讐、なのか？」

『まあ、半方正解だよ』

「半分？」

『スカル、アレ手に入れてくれたか？』

泉いずみの問いにスカルが答える

『さっきの今で無茶言うよ全く。まあ、それでも用意するのがオレの仕事なんだがな』

取り出したのは2枚のチケツト。それをスカルは十三じゅうぞうとキャンドルに差し出す

「これは……綺羅星きらほし ヒカリのライブ？」

チケツトの正体は明日開かれる綺羅星きらほし ヒカリのライブのチケツトだった

『悪いが、ここからは見てのお楽しみでサプライズだ。オレたちの「復讐」がなんなのか

…見せてやるよ先輩』

アニマアルカナに表示された顔の口がニヤリと持ち上がった



綺羅星きらほし ヒカリはどんな明るさの中でも輝くものを持つ、それこそどんな街明かりの中

でも輝く北極星のような存在だった

吐いて捨てるほどアイドルが溢れる中でも、彼女は特別だった

同じステージに立つ、なんて烏滸がましい言い方だがだからこそ私には彼女の特別さと価値が痛いほど理解できた

なのに、世間はその宝石に泥を塗った

事務所の社長が言い寄り、突っぱねた彼女のありもしないスキャンダルをでっち上げた

彼女を疎ましく思う事務所の先輩アイドルがそのスキャンダルを更に悪様に拡散し

聴衆小ハエどもは鬼の首を取ったように何の罪もない彼女を攻めた。攻めて攻めて攻めて壊

した

いつか一度だけ顔を合わせた時に、聞いたことがある

何故アイドルを続けるのか、と

彼女は簡単なことだとはにかみながら答えた

「歌うことが好きだから。私の歌でみんなが笑うのが好きだから

ああ、敵わない。と思った

こんな、こんな彼女のささやかな幸せも、身勝手な連中が奪っていった。一つも残らず

「綺羅星きらほし ヒカリは、最高にクールに死んだわ」

突然現れたゴスロリ風の女は愉快そうに笑いながら私にそう告げた
クールな死？

飛び降りて、高圧板に落ちて感電して死んだあの死に方が？

怒りが湧いてきて私はその女の首を絞めていた
ちつとも苦しそうな様子も見せないその女は笑みを絶やさず続ける

「綺羅星^{きらほし} ヒカリを死なせたくなかった？」

当然だ。ヒカリは、死ぬべきじゃなかった

死ぬべきなのはーあのバカ^{害虫}どもだ

クスクスと笑った女は私をビルの屋上に案内し、へりから下を指差して告げた

「じゃあ、あんたも最高にクールに死を見せなさいな。そうすれば、あんたの死は生を曲げる力を得る」

女は私に歩み寄り、肩越しに笑う

「ー本当に死ぬべきヤツを殺すのも、簡単なくらいの、ね」

へりから下を見下ろす

そこには真つ黒な板がバチバチと電流を放って浮いていた
答えなんか、考えるまでもなかった

私は笑顔でビルから飛び降りた

その日から私は、『綺羅星^{きらほし} ヒカリ』になった

ヒカリの星を絶やさないために

ヒカリを落としたヤツらを殺すために

バカな先輩アイドルは殺した

事務所の無能も殺した

なら次は

星に群がる聴衆^{きゆうしゆ}を、殺さなきや



『みんなー!!?来てくれて、ありがとうー!!!』

ステージに立つアイドル綺羅星きらほし ヒカリの言葉に観客席が沸き立つ

それを出入り口近くの観客席から十三じゅうぞうとキャンドルは見下ろしていた

「中々いい曲じゃないか。たまにはこういう暇つぶしも悪くない」

ヒカリが歌い上げる曲を聴きながらキャンドルが愉快そうに笑い、指でリズムを取る

「……………」

十三じゅうぞうは落ち着きなく周囲を見渡し、ステージ上に立つ綺羅星きらほし ヒカリを見る

『死から蘇ったアイドル』

十中八九昨日取り逃したノーワンが彼女なのだろう

死からの蘇りなどあり得ない

あり得るとすればそれは、死がなく生きれない体にされただけ

隣に座るキャンドルを見やる

その横顔むつみに六美の顔が重なった

十三じゅうぞうはかぶりを振り、前を向く

「……………あり得ない」

「何だ？辛気臭い顔をこちらに向けといてため息は失礼だろ？」

「知らん。こちらの話だ」

素っ気ない態度を取る十三じゅうぞうにキャンドルが愉悦の笑みを漏らす

ライブがヒートアップする中、ステージ近くの観客席に希はいた

《もうそろそろオンエアだ。行けるか？》希のぞみ

手にしたスマホからスカルの声が響き、希のぞみが頷く

希の様子をパーカーの胸ポケットから見ていた泉いずみが口を開く

『心配すんな、希のぞみ。オレもスカルも一緒だ』

泉いずみの言葉を聞いた希のぞみが胸ポケットに触れる

『オレたちはチームだ。オレという「仮面」、スカルっていう「目」それに加えて…』

「私という『手足』」

『そうだ、オレたちは3人で1人。風都の都市伝説であった街を守る2色のヒーローになぞって、派手に名乗りをあげてやろうぜ…!!?』

泉いずみの言葉を聞き、希のぞみは微笑んで力強く頷く

「うん。『仮面ライダー』オンエア」

希のぞみはスマイリーフェイスのマスクを被り顔を隠した

「そう、また私たち」

挑発的な怪人の様子にギリ、とヒカリが歯軋りを鳴らす

「何しに来たの……ここは、ヒカリのライブステージよ!!？」

ヒカリが胸を張ってそう告げる

怪人は肩にかけたギターケースを置き、その中から左利き用の大きなギターを取り出し、それを肩にかけヒカリを指差す

「道場破り。この私、怪人カラベラーナがあなたを『歌で負かす』」

怪人カラベラーナ^{のぞみ}の宣言を聞いたヒカリが唾然とした表情を見せるがすぐに笑みに戻る

「笑わせないで。この会場にいるファンは、ヒカリを観にきてるのよ？」

ヒカリが手を振ると、ことの次第を見守っていた観客たちが歓声を上げる

「この観客たちを、素人のあなたが満足させられるって？」

ヒカリが得意げに笑ってマイクを渡そうとするが、^{のぞみ}希はそれを受け取らず、ギターの準備をしてイントロを弾き始める

『わかってねえなあ、どれだけ心が向こうむいてようと意味なんかねえよ』

とん、とん、と希が脚でリズムを取り、すうと息を吸う

『うちの自慢のキー子は、歌じゃ負けやしねえ』

瞬間、掻き鳴らされたギターと共にカラベラーナのシャウトが会場を震わせる

マイクなど持っていない希の声のぞみが、大きな会場を丸ごと揺らした

「:Finger on the Triggerでいいよね、セン兄」

『お前の十八番だろ？当たり前だ』

希が頷くとギターをかき鳴らしながらマイクも無しに歌い始める

遙か後方じゅうどうにいるはずの十三じゅうぞうとキャンドルにもその歌声は届いていた

「ほう、あの女も中々じゃないか」

「確かに…」

十三は歌声に呆気じゅうぞうに取られながらも目を細めてステージ上の希を睨む

「なにを始めるつもりなんだ…」

希のぞみが歌い終え、荒い呼吸で肩を揺らす

会場が静けさに包まれる。が、その静寂は一瞬で破られた

ーオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!

割れんばかりの歓声が観客から上がり、希のぞみはぺこりと会釈する

その歓声は自分が歌っていた時のものより大きいことにヒカリは気づいていた

「な……んで……!?」

呆然と立ち尽くし、辺りを見渡すヒカリに希のぞみが向き直る

いつの間にか2人の頭上にはスカルのの撮影ドローンが浮かんでいた

『確かに、綺羅星きらほし ヒカリの歌は大したもんだ。「本物」だったならキー子でも勝ち目はなかったなあ』

どこからか聞こえてきた言葉にヒカリがびくり、と体を揺らす

「ヒカリどころか、『本物のあなた』にも多分勝てない。私は、ただの『歌の上手い一般人』だから」

希のぞみがパーカーのポケットから1枚のCDを取り出して見せる

CDショップで売られているようなものではない、作りの粗い地下アイドルのシング

ルCD

そのジャケットでは黒い長髪の少女が歌っていた

『お前の敗因を教えてやるよ。綺羅星^{きらほし} ヒカリ、いやー』

『新月^{にいづき} ヨミ』

!?!?
」

観客たちがどよめくと共にヒカリと名乗る少女がよるめく

「……誰よその子……ヒカリは、綺羅星^{きらほし} ヒカリよ!?」

「綺羅星^{きらほし} ヒカリの一人称は、『ボク』」

『ヒカリ』って一人称を使わないんだよ、本物は』

のけぞる『ヒカリ』を見据えたまま希^{のぞみ}が自分の耳を指差す

「それに、歌に乗る『魂』が違いすぎる。今のあなたの歌は、無理やり違う魂を型にはめ込んでるからノイズが酷い」

『魂の乗ってない歌に、うちのキー子の歌は負けねえのさ』

「……………」

『ヒカリ』は立ち尽くしたまま俯く

『観念いずみしな。こと音楽でうちのキー子は騙せねえ』

泉の言葉いずみを聞くが早いか、『ヒカリ』は肩を震わせる

ふふふ、と震える笑い声が漏れ出していた

「違う、違うわ!!? ヒカリは『綺羅星きらほし ヒカリ』!!? 死から蘇ったアイドルなの!!? 歌い続けて、みんなにこの歌を届けるために。そして—」

『ヒカリ』の瞳に灰色の炎が揺れ、その姿がノーワンのものと同じ異形に変じていく

「一星に群がる害虫を、駆除するためにツ!!」

変貌したエレクトリック・ノーワンが放つコードが電撃を放ちながら観客席に襲いかかるが、希のぞみがギターを振り回してそれを弾く

呆然と眺めていた観客たちも異常事態に気付き、悲鳴を上げながら逃げていくが、出入り口が何故か開かず詰め寄せたままパニックになる

「あの女と、プロデューサーと社長は殺した…あと駆除すべきなのは、ヒカリに寄り添っておきながら真実を見ようとしなかった観客どもだ!!!」

エレクトリック・ノーワンの顔面表示が真っ赤に染まる

「逃がさない、逃がさない逃がさない逃がさない逃がさない!!! みんなみんな殺してやる!!!」

ヒステリックに腕を振り回しながらエレクトリック・ノーワンが叫ぶ

それを見据えていた希は足元のせみのギターケースを裏返し、デスサイズドライバー・ガロツトを取り出して装着する

「させない。ヒカリの、あなたのためにも」

『おうよ!それがオレたちの「復讐」だ!!』

《セブン：チャリオット》

起動したアニマアルカナを装填し、左手で首を掻き切るポーズからコルナポーズに繋げる

「変身」

『変身!!?』

《エクスキューション・アップ》

《アッパー・チャリオット》

希のぞみの首に大型のリングが現れ回転

そこから吹き出した炎に包まれ、その体が仮面ライダームエルトのものに変化する

【お前も死ねえ!!!】

エレクトリック・ノーワンの電撃鞭を両腕の銃から放つ弾丸で撃ち落としていくが、今回の鞭の勢いは格段に上がっており、勢いを殺しきれなかった数撃がムエルトに命中し火花を散らす

『ぐうつ!??大丈夫かキー子!??』

《:ツ、これくらい、平気》

希のぞみの体を使った変身故か痛みを共有しているらしい希のぞみが返答する

『やせ我慢はやめろよ。オレの宝物はお前なんだから』
希のぞみを励ましながらムエルトは電撃鞭をいなす

が、いなすのに精一杯で近づくことができない

『クソツ…!!? これじゃあ罅があかねえ…!!?』

《エクスキューション・アツプ》

《リバース・デビル》

「ハッ!!!」

後方から飛び出した黒い人影がエレクトリック・ノーワンとムエルトの前に割り込み、鞭を黒紫の炎を纏う一撃で薙ぎ払う

「大丈夫か？」

振り返り、手を差し出した怪人ー仮面ライダーレクイエムの手をムエルトが見てその顔を見上げる

『…どういいうつもりだ？』

「どういいうも何もないさ」

レクイエムは当然のことのように答える

「キミらの『誠意』を信じてみる。それだけだよ」

その言葉を聞いたムエルトはレクイエムの手を取り立ち上がる

『オレらはオレらの好きにやらせてもらおうぜ？先輩』

「結構。俺も俺のやりたいようにすべきことをするだけだ」

ムエルトが豪快に笑う

『ガツハツハ!!? 敵わねえなあ!!?』

2人のライダーが並ぶ前でエレクトリック・ノーワンが体を震わせる

【邪魔するなあ!!!どいつもこいつもお!!!】

その言葉にレクイエムが一步踏み出す

「ー恨むといい。憎むといい。あんたの黒いものは全て俺が持つていつてやる」

「ー俺の名は『レクイエム』。お前たちの生も死も白黒付けて送り出す鎮魂歌だ」

レクイエムのセリフを聞いたムエルトがヒュウ、と口笛を吹く

『いいねえ。そういう決め台詞、サイコーにロックだ』

《たしかに、イカす》

ムエルトは傍らに置いていた大型ギターを手に取り、右手に構えてエレクトリック・ノーワンを見据える

『オレの生も、アンタの生も、忘れられるには惜しい生だ』

《死して屍拾うもの無し、でも歌って騒いで弔う者はここにいる》

『オレたちはカラベラでマリアッチ。アンタの死を弔い、最期の最期のバカ騒ぎに招待する歌う骨!!』

《『さあ!!? 真つ暗闇のパーティータイムだ!!!』》

【ほぎけえ!!!】

エレクトリック・ノーワンが新たな電撃鞭を振るうが、レクイエムがグルートマホークで撃ち落とす

『スカルの作ったご機嫌なコイツ、試してみるか!!?』

ムエルトは大型ギター、否ー専用武楽器ギターラ・デ・カラベラのボディをネック上でスライドさせる

《ロックアックスモード》

飛び出したネックからギターヘッドが、ボディから刃が展開され、それは大きな戦斧のような形状のギターに変わる

『行くぜえ!!!』

ムエルトがギターをかき鳴らし、エネルギーを迸らせた斧が振るわれる

一撃目が電撃鞭を振り払い、二撃目がエレクトリック・ノーワンの胸部電光板を叩き

割る

「ぐ、あああああ?!?!?」

エレクトリック・ノーワンが悲痛な悲鳴を上げながらよろめく

『スカル!!?』

《なんだ?》

『やれんだよな?』

《ーッ》

泉の言葉にスカルが返答を詰いすみまらせる

側で見守っていたレクイエムはその沈黙の理由に気づいていた

(アニマの完全分離に成功してるのは、デスサイズドライバー・ギロチンだけ…あつちのシステムはまだ試したことすらない…)

レクイエムが見守る中、通信機越しにスカルが告げる

《ーああ、やれるはずだ。頼む》

『……待ってたぜ、その言葉ア!!?』

ムエルトがギターを一節かき鳴らし、レクイエムに視線をよこす

『今回は悪いが、オレらがキメるぜ？先輩』

レクイエムは少し思案する素振りを見せるが、一步退く

「キミらを信じると決めたからな」

ムエルトはその言葉にコルナポーズを返し、ギターラ・デ・カラベラを突き立ててド
ライバーのバックルを二度回す

《ラスト・エクスキューション》

『はあっ!!』

ムエルトがワンツートと左右の脚を蹴り出すと、そこから放たれた車輪のようなエネルギーがエレクトリック・ノーワンを拘束する

『ロッキンロールに、決めるぜえ!!!』

踏み出した脚ともう片方の脚先にオレンジのスパークを纏う黒い炎のエネルギーを具現化させ、ムエルトが疾走

一発、二発と打ち込まれた蹴りでエレクトリック・ノーワンの体がスパークし

三発、四発と続く連続蹴りがその体を打ち上げる

【ぐっあああああああああ?!?!?】

打ち上がり、自由落下を始めるエレクトリック・ノーワンの下でムエルトの背後に黒い炎の車輪が出現。高速回転するそれに飛び乗り、射出されたムエルトの右脚に最大級の炎が纏われる

『おらアアアアアアアアアア!!!』

オーバーヘッドキックのような縦回転蹴りがエレクトリック・ノーワンを穿つ
くると縦回転しながら着地したムエルトが頭のソンプレロ型の装飾の鏢に指を
当てなぞる

『アアディオス!!? アミーゴ…』

墜落してきたエレクトリック・ノーワンがムエルトの背後でバウンドし、スパークを
散らしながら灰色の爆炎と共に爆散する

固唾を飲んで見守っていたレクイエムの前で灰色の爆炎は渦を巻いて白い火の玉と

黒い火の玉に分かれて浮遊する

「成功した…!!?」

『うしっ!!? 大成功ってヤツだな』

会場のロックが解除され、観客たちが逃げ出していく

観客席から傍観していたキャンドルがヒユウ、と口笛を吹く

「やるじゃないか。スカルとやら」

画面越しに中継を配信しながら見ていたスカルも安堵の息と共にソファに背を預ける

『成功した…オレたちの「復讐」の一步目は大成功だな』

と、何かを思い出しパソコン画面に戻る

『いけね。そろそろ切り替えないとな…』

沸き立つコメント欄を横に中継画面が切り替わり、アイドルが歌を歌いながら踊る映像になる

荒削りながらも光るもののあるそのステージ

最初困惑していた視聴者もコメントを止めて魅入られ始めていた



ふわりと浮かぶ白い火の玉ーアニマが揺らめき、その姿を人の姿へと変貌させる
現れたのはジャージ姿の長い黒髪の少女だった

ムエルトが変身を解除し、希の姿に戻ると仮面を取り、その少女に近づいてしゃがみ込む

『何よ……がっかりでしょ……？綺羅星^{きらほし} ヒカリだと思つてたヤツが、こんな、こんなただの地下アイドルで……』

泣き崩れる少女ー新月^{にいづき} ヨミの前で希は彼女にマイクを向けた

『……え？』

「…歌つて。新月^{にいづき} ヨミ」

希の言葉が信じられないといったようにマイクと希の顔を見比べるヨミ

『なんで、なんでよ……私の歌なんか……!?』
希は静かに首を振り、一枚のCDを取り出す

それは先程も見せた新月^{にいづき} ヨミが唯一出したアルバムだった。よく見ると開封されていることに気づく

「心に響く、いい歌だった。とても好きな歌」

微笑みながら告げる希のぞみの胸ポケットから泉いずみも微笑みながら告げる

『観念しなつて言つたら。こと歌で、キー子は騙せねえよ』

ヨミは力無く首を振る

『そんな、そんなことない…私の歌なんか…!!?』

『ーヨミちゃんの歌、最高でしょ!!?』

ヨミの肩が背後から掴まれる

その肩を掴んでいたのは綺羅星きらほし ヒカリ

アニメの残滓から姿を現した本物の綺羅星きらほし ヒカリの意志だった

『え、綺羅星きらほし ヒカリ…!!?…なんで…!!?』

『なんでつて…前にライブ一緒にしたことあったでしょ?あの時、あなたの歌を聴いてずっと、すごいなあつて思つてたの。CDも買つてたんだよ』

『嘘…嘘だ、そんな訳ない…私の歌なんか…!!?』

首を振りながらパニックになるヨミをヒカリが抱きしめた

『あー』

『私の歌なんかって、言っちゃダメだよ。ヨミちゃんの歌のこと大好きなみんなを、裏切らないで』

ヒカリの言葉を聞いたヨミは目を見開き、大粒の涙を流し始める

泣きじやくるヨミを抱きしめ、ヒカリは希^{のぞみ}たちを見据える

『ありがとう。ヨミちゃんを止めてくれて』

『ボクのために怒ってくれたのは、正直嬉しかったけど、でもそのためにヨミちゃんが歌を忘れちゃうのは苦しかったから』

微笑むヒカリを見据え、希^{のぞみ}は親指を立てて見せる

「私は、忘れない。ヨミの歌も、ヒカリの歌も。私以外にも、きつともつとたくさんの人も」

『水臭い言い方やめろよキー子。そこは、「オレたち」だろ?』

「ん、そうだった」

希^{のぞみ}と泉^{いずみ}のやりとりにヒカリが吹き出す

『あなたたち、とても愉快な人たちだね』

泣きじやくつっていたヨミが顔を上げ、希のぞみに近づいてその手に持つマイクに手を添える
そして希のぞみに柔らかない笑みを向けた

『ありがとう、カラベラーナ』

そう告げたのを最後に、2人のアニマの残滓は消え去り、その足元にアニマの遺灰が積もった

風に流されながら飛んできた残り火を希のぞみは手にした2体のカラベラー人形のキーホルダーで受け止める

「アディオス、アミーゴ」

希のぞみは大切にそのカラベラー人形を抱きしめる

隣に立つレクイエムは遺灰を壺に納めて静かに祈りを上げる

「2人は、俺の霊園でも弔う。いつでもお参りにきてくれ」

そう告げるレクイエムに希のぞみが頷く

『これにてオレたちの「復讐」は一つ完了だな!!?』

「復讐……？これがか？」

レクイエムの問いに泉は笑いずみいながら答える

『怪物たちのせいで歪む死や、覚えてもらえない死が増えるなら、オレたちがそうさせねえ。歪んだ死も、覚えてもらえない死も、全部オレたちが馬鹿騒ぎして弔って、生きたヤツの記憶に焼き付ける』

ハハツ、と笑いながら泉は締めくくる

『元々オレたちには湿っぽいのは似合わん。最高にロツクに行った方が、オレたちらしいのさ』

「そう、最高にメタルなやり方」

希のぞみがコルナポーズを作ってみせる

それを見たレクイエムは静かに頷いた

「おかしな連中だな、本当に」

そのやりとりを見ていたキャンドルは観客席のバーに腰掛けながら脚を組んで微笑む

「いやはや、面白くなってきたじゃないか」

懐からタブレットを取り出し、ある画面を映し出す

そこにはアニマアルカナの一覧表があった

何個かは黒く暗転しているその中をスクロールし、末端まで到達する

そこには5枚のアニマアルカナが黒枠で囲まれていた

「……何やらランタンやら埋葬部隊も怪しい動きが増えてきたし、そろそろこいつも解明しないと、つまらん終わりになるかもな」

キャンドルは画面を再びスクロールし、その中で2枚のアルカナをタップして拡大する

一つは《恋人》ラバーズのアルカナ

何故かこれだけは紫の表示になり、LOSTと表示されている

そしてもう一つは

ウィール・オブ・フォーチュン
《運命の輪》のアルカナ

「…考えておくかな、《恋人》らしいプレゼントでも」

―夜明けの晩に、鶴と亀が滑った

歌声が響く

「窓」の奥の空間

たくさんの本が積み上げられ、乱雑にノートや筆記用具が散らばる部屋の中央で体育座りのようにして座っていた小さな人影が、その歌を紡いでいた

―後ろの正面、だあれ？

ぐるりと、人影が振り向く

白銀の頭髪を揺らす、銀の瞳の少女

その手に握られたアニマルカナには《21》の数字が刻まれていた

第11話 「8の正位置：泉の友達大作戦」

特殊車両ハーミット・ダイザーに戻ってきたとみや十一宮 正義せいぎが椅子に腰掛け大きなため息を吐く

「市民の記憶洗浄、完了した」

「お疲れ様、正義せいぎ」

正義せいぎたち埋葬部隊はエレクトリック・ノーワンの事件を目撃したであろう人々の記憶を操作する作業に従事していた

アニマ干渉技術の応用により簡単な記憶操作が可能になっており、大多数の市民にノーワンが目撃された場合はこうした作業により市民の記憶からノーワンの情報を消去するのだ

そこにもう一人、隊員が戻ってくる

「こちらも終わりました。隊長」

機材を片付けながら告げる女隊員―逸羽いつは 五月さつきを見て正義が表情を曇らせる

「お疲れ様、五月さつきちゃん」

「お疲れ様です。九く留美るみさん」

九く留美るみに五月さつきが敬礼で返礼する

「怪人の…ノーワンの姿を中継するなんて…そんなパニックを誘発するようなことをするなんて…」

証拠物件として保存されていたムエルトのライブ動画をタブレットで見返すさつき五月
その手に力が入り、タブレットが軋む

「……この非死者も、ノーワンも、あたしが止めないと」

どこか冷たい瞳でそう告げた五月さつきを正義せいぎは力無く眺めることしかできなかった



昼下がりひつぎのみやの棺ひつぎのみやノ宮中央学園 中庭中央庭園

「おじさん、いちごクレープ一つ!!?」

『あいよ、いちごクレープな』

「こっちはタピオカ!!?」

『タピオカ一つな』

訪問販売に訪れていたキッチンカーの前に生徒が群がり、クレープやらタピオカやらコーヒーやら注文している

実食している生徒たちの反応から相当美味しいらしく、その人だかりも何の誇張でも無いことがよく分かる

「おじさん…なんでそんなマスクしてんの？」

生徒の一人が無邪気にも問いかける

確かに店主の格好はだいぶ珍妙だった

黒いジャケツトとジーパンに黒手袋をはめ、更に顔はレスラーが被るような黒い虎のフェイスマスクで隠されていた

全身黒づくめな上から大きな赤いハートのアプリケが付けられた黒いエプロンを付けたその姿は正直だいぶ不審だった

『あー…まあなんだ…おじさんは恥ずかしがり屋だな。あんまり素肌を見せたくなえのさ』

店主はばつが悪そうに頬を掻きながら答える

生徒は「そうなんだ」と興味なさげに返すと案外それ以上の追求はしてこなかった。よっぽど軽食が美味しいらしい

最後の生徒の対応をした店主が手を振り見送ると、キッチンカーのカウンターに置い

てあったカードデバイスから声が響く

『大人気じゃねえか、スカル』

『正直だいぶびつくりだよ。イマドキの高校生だし怖がられるかもとも思ったが、案外すんなり受け入れてくれるもんだ』

泉の声にカウンターに寄りかかりながら店主ースカルが頷く

「…一体どういうつもりでこんなことしてるんだお前ら」

キツチンカー前のテーブルの一つに腰掛けたキャンドルー六黒がタピオカを啜りながら問う

『まあ色々あるのよ、こちらにも』

ひらひらとスカルが手を振るのを見て六黒はつまらなそうにため息を吐き出す

「なあ、スカル。お前は私のことについて何も思わないのか？」

『……あんたが六美博士から生まれたことについて、か？』

スカルはシュー…と息を漏らし、答える

『何も…ってわけじゃないが。今すぐどうにかしてやるとか銃を向けるとかはしねえよ』

スカルの答えに六黒が片眉を上げる

『俺たちのしたい「復讐」は、感情任せでやるもんじゃない。何よりも…』

『ーあんたへの「復讐」をする資格があるとすれば、それは俺じゃないだろうからな』

その言葉を聞いた六黒むくろはふう、と息を吐き心底つまらなそうにタピオカの残りを啜すすつた

『で、コレがお前の作戦にどう繋がるんだ、泉いずみ?』

カウンターに立てられたアニマルカナを指でつつく

『まずは下見が重要だろ。どんな作戦でもな』

泉いずみが自信満々にそう返す

『何より、あいつオープンスクールとかすら行ってねえから一応ここの生徒なのにこの学校のこと知らねえだろうしな』



時は数日前に遡る

『なあ、キー子』

テーブルの上に立てられたアニマルカナから泉いずみがソファにうつ伏せに寝転がる希のぞみに声をかける

「ん……何？セン兄」

眠たそうな気怠そうな声で希が顔を上げる

『学校そろそろ行かねえか？』

希は少しムツとした様子で眉を寄せる

「……行かない」

『なんでだよ……俺だつて帰つてきたんだし、もう心配ごと無いだろ？』

起き上がった希が泉を睨む

「……あるよ。また……セン兄がいなくなったら嫌だし」

『キー子……』

自身の肩をギュツと抱きながら辛そうに答える希を見て泉も思わず言葉を詰まらせる

『……でもよ、やっぱキー子にはフツの生活もというか……ちゃんと勉強もして欲しくてだな。ダチだつて増えるぞ？学校なら』

「勉強ならやってるからいい」

希は床に散らばるチラシの中から何冊か参考書を取り出しながら告げる

「それに、ダチなんかいらぬ。セン兄がいれば、それでいい」

そつげなくそう返した希に泉はむう、と不満げな息を漏らした

「おい、お前は変身しないのか?」

『俺だけじゃ変身できねえんだよ。キー子がいなきやムリだ』

スカルの胸ポケットに収まる泉が悔しげな声を漏らす

そうこうしているうちにノーワンが3人を見つける

【キミたちも、僕と一緒にいてよ!!?】

腕のユニットを向けるがそこに黒い怪人が蹴りを浴びせ吹き飛ばす

「お早い出動じゃないか。レクイエム」

3人の前に降り立った黒い怪人ー仮面ライダーレクイエム・リバースデスが肩越しに振り返る

「そりや学校の中なら嫌でも気づくさ。というか…」

スカルと泉たちの方を見たレクイエムは頬を掻く

「…別に色々ツツコミたい所はあるが後だ」

ノーワンの方を向き直る

【なんなんだよ…僕は1人になるのが嫌なだけなんだよ!!?】

「だからって殺す必要はないだろう!!?」

【殺さないの意味ないだろ!!? 一緒に、死んでもらうんだから!!?】

七輪ユニットから凝縮した煙を弾丸として放つが、レクイエムはそれを手刀で叩き落

としながら組み付く

煙に包まれた生徒たちの側にスカルたちが駆け寄り、りんね 輪音も駆けつける

「じゅ、レクイエムさん!!?」

「りんね 輪音ちゃん!!? 襲われた人たちを頼む!!?」

「わかりました…!!?」

りんね 輪音は頷いて倒れた人々に駆け寄り、まわりつく煙を制服の上着で扇いだりして振り払いながら助け起こしていく

が、手作業だけでは振り払える煙が少ない

手こずっている中、突如吹いてきた突風が煙を大きく吹き飛ばす

「ここ、この風は!!?」

「りんね 輪音ちゃん!!?」

声の主の方を向くとそこにあつたのは大きな扇風機

その背後から顔を覗かせたかなえ 鼎が手を振る

「体育館から借りてきたよ!!? これなら煙も吹き飛ばせる!!?」

「かなえ 鼎先輩…ありがとうございます—!!?」

風に煽られながら輪音が鼎に御礼を告げる

「その黒い人らが怪物なんとかしてくるなら、ボクにできるのはこれくらいだろう

「からね」

輪音りんねと鼎かなえが生徒や教師を助け起こし、避難させていくのを見た泉いずみは感嘆の息を漏らす
『中々肝が座ったヤツらだなあ…いいね、ロツクだ』

ノーワンは煙を肩や両腕から噴き出し、それを振り回しながら攻撃に用いる中レクイエムは煙をアニマライターの炎刃で振り払いにかかると、煙に触れたアニマの炎は弱まり、掻き消える

「な、煙だから炎消しちゃうのか…!!?」

アニマライターの攻撃は不利と判断してレクイエムは徒手空拳に切り替えて組み付くが、体の各所の発煙筒から噴き出す火花を纏う煙がレクイエムの体を焼き、怯んだところを煙の薙ぎ払いが襲いかかる

「僕は一人で死にたくないんだ…そんな寂しいのは嫌だ…!!?生きてくのも疲れたんだ!!!」

腕の七輪ユニットから火花を含む煙を火炎放射のように噴き出してレクイエムを吹き飛ばす

「思ったより厄介なヤツだなこいつ…!!?」

反撃に移ろうとするレクイエムとノーワンの間に突如灰色の炎に包まれた蠟の塊がボタボタと何個も落ちてくる

蠟の塊は灰色の炎を噴き上げながらシンプルな人型に変化し、ゾンビのようによろめきながら立ち上がる

「いっつらは…!?」

『ドロウよ。あたしたちの忠実なシモベ』

灰色の炎を噴き出し、炎の中からシャンデリアが現れる

「シャンデリア…!!?」

カツカツ、とヒールを鳴らして苛立たしげにシャンデリアが吐き捨てる

『なんだあいつは出てきてないのよ…あたしのお気に入りを、クールじゃないとか言つたあいつは…!?』

苛立たしげにシャンデリアが炎の鞭を地面に叩きつける

「あいつ…?」

しばらく思索したレクイエムだがあることに気づき、ハッと顔を上げる

その視線はスカルと、泉いずみに向いていた

『あたしの彩る死は、選ぶ死は!!? 最高にクールだつてのに…!!?』

シャンデリアが鞭を振り回す

レクイエムはそれを弾きながら後退、返す刀でアニマライターから炎の弾丸を放つ

「動くな」

シャンデリアの声が響く

その言葉に従うかのように弾丸が空中で止まる

「なっ…!!?」

レクイエム自身も身動きできなくなっているのか、アニマライターを構えたままに驚愕の声を上げる

『能力を使ってもいないあたしに一度土を付けた程度で思い上がらないでよね?』

「ひぎまづけ」

シャンデリアの言葉が重圧となりレクイエムとスカルたちに降りかかる

たまたらず皆ひぎまづくようにうづくまる

『くっ……!??!』

「なに……これ……!??!」

身動きを封じられたレクイエムをシャンデリアが蹴り飛ばし、倒れ伏すその胸をヒールで踏みつけにする

「がっ……!??!」

『あつはははア!!?! いいザマねえ。あんたもあたしの芸術品だったハングを葬ってくれたからこれくらいしないと、ね!!?!』

グリグリとレクイエムを踏みにしりながらシャンデリアは手を広げる

『見てんでしょ? 新しい仮面ライダー!??! 早く出てこないと、お仲間が死んじゃうわよ? まあ、お仲間じゃないなら関係ないかしら? あつはははははア!!!』

シャンデリアの哄笑を聞きスカルがぐっ、と声を漏らす

倒れ伏す輪音が顔を起こす

「ハング……彩奈さんと沙彩さんの、死が……芸術、品……?」

『ああん……?』

シャンデリアを睨みながら輪音は言葉を絞り出す

「あの2人の死が……芸術なんて、ふざけたこと、言わないで!!?!」

シャンデリアの肩がびくり、と震える

『……あんたも、あたしのクールを否定するのか…!!?』

「クール…?人の死は、キャンバスなんかじゃない…!!?」

『黙れ、黙れ黙れ黙れえええ!!!』

シヤンテリアは炎の鞭を振るう

しなる炎の一撃が輪音に迫る

「輪音ちゃん!!?」

「ーッ!!?」

必死に手を伸ばすレクイエムの前で虚しく炎の鞭は輪音に迫り、輪音は目を閉じる

「はあッ!!!」

が、その鞭は輪音の目前で叩き落とされる

恐る恐る目を見開いた輪音の前、そこには白銀のライダーが立っていた

アンダースーツの形状や各所装甲のディテールは正義や九留美が変身するヴァジュラと同一規格だが、そのライダーの装甲はさらに軽量化され、スマートなシルエツトを形成していた

X字型の緑の複眼が輝く

『あんた…あの白い連中と同じヤツらか!!?』

「だつたらどうするよ?」

白銀のライダーが輪音を庇うように手をかざしながら不敵に告げる

その声を聞いた輪音は眉をひそめる

(この声…どこかで…)

『生意気な…「ひざまづけ」!!?』

シャンデリアの再びの言圧にライダーが膝を突く

『さっさと消えろお!!!』

シャンデリアが鞭を振るう

ライダーは腰のベルトトヴァジュラドライバーのレバーを引いて戻す

《Re:CHARGE》

《OVER ACTIVEION》

腰のベルトからスパークするエネルギーが供給され、ライダーの体に走る緑のエネルギー

ギーラインと複眼が輝く

ライダーは急加速し、シャンデリアに肉薄してその胸を殴りつけ吹き飛ばす

『があッ!!?』

吹き飛ばしたシャンデリアを見下ろし、ライダーはその拳を握る

「あんたら怪物は、あたしが許さない。あたしが、全員滅ぼしてやる…!!?」

『クソが…あたしをイラつかせるヤツらばつか…!!? スモーク!!?』

シャンデリアが背後でオドオドしていたノーワン・スモーク・ノーワンを恫喝する

【は、はいいツ!!?】

スモーク・ノーワンは両肩のユニットから煙を吐き出してシャンデリアと共に包み込むとその姿を煙ごと霧散させた

「逃げたか…」

白銀のライダーはヴァジユラドライバーから《法皇》のアニマルカナを取り出し、変身を解除する

そこから現れたのは、輪音りんねらと同じ棺ひつぎのみやノ宮中央学園の制服を着たポニーテールの少女だった

その姿を見て輪音りんねは目を見開く

「五月…さん…!!?」

ライダーに変身していた少女ー逸羽いつは 五月は輪音りんねを助け起こし、埃を払う

「無事でよかった、輪音りんね…久しぶり!!? 今日からまた学校に通うようになっていきなりノーワンが学校に出てくるなんて…」

「ノーワンのこと、知ってるんですか!!?」

ふふん、と五月が腕組みしながら得意げに微笑む

「まあそりやあね、特例隊員として埋葬部隊に入ったから」

「……え？」

五月の言葉に輪音は思わず呆けた声を漏らす

「あたし、ちよつとした特異体質？らしくてさ。このシステムに適合してるらしいんだよね。だから特例として隊員に任命されたんだよね」

五月は頬をかきながら照れ臭そうに答える

その背後で立ち上がるレクイエムを振り返り、五月は続ける

「……非死者0号。あんたも埋葬対象だけど、学校の中だから今は見逃すよ。輪音も、かなえ鼎先輩たちも巻き込みたくないし」

どこか感情を殺した伽藍洞の目がレクイエムを捉える

「ーあんたも、ノーワンも、化け物は全員倒す。ひとりも逃さない。ひとりも、許さないから」

冷ややかにそう告げた五月さつきをレクイエムはただ黙って見ていることしかできなかつた



「そんなことが……」

希のぞみが泉いずみを前に眩くらく

「……ごめんセン兄……私……」

『謝ることじゃねえよ。無理なもんは無理だったんだから』

申し訳無さそうに頭を下げる希のぞみを泉いずみは慰める

『……まあ、こんなことになつちまうからこそ、キー子には外に出てみて欲しいんだよ

なあ』

泉いずみの言葉に希は目を伏せ、クッションをギュツと握り顔を埋める

「……理屈は、わかる……でも……」

希のぞみの脳裏に記憶が過ぎる

陰で笑われ、除け者にされ

そして何よりもー

『友達になりましょう?』

「……………」

特に売り込みをする訳でもなく立っている異様な少女に驚きながらも、クレープやタピオカが美味しかったのか、学生たちはキッチンカーに集まっていく。楽しそうに談笑する少女たちをチラと、お面の下から希のぞみが見つめる。

友達で集まって話をするごくありふれた光景

だが、希のぞみは胃がひっくり返るようなストレスも同時に感じていた。吐きそうになるのをグツと堪えながら、震える手でプラカードを持ち続ける。

『友達だったらしくしてくれてるでしょ？』

『裏切るんだ、あたしのこと』

『使えないヤツ。もういいよ』

頭に過ぎる声を頭を振って振り払う希のぞみ

「あ、あの…」

そんな中に突然声がかけられ、ビクツと肩を震わせる

そこに立っていたのは輪音りんねだった

「えつと…お話があるって聞いてきたんですけど…どこかで会ったことありましたっけ

…?」

「う、あ……ッ!?」

輪音りんねの声かけに大きく後退り、希のぞみが目深にフードを被る

「え、ええと……」

怯えた様子の希のぞみに輪音りんねが所在無さげに声を漏らす

たまらずキッチンカーの奥に逃げ込んだ希のぞみと入れ替わるように、キッチンカーからマスキの人物が降りてくる

『嬢ちゃん、ちよつと話いいかい?』

ちよいちよい、と近くの席を指差すマスクの人物を警戒しながらも輪音りんねはゆつくり頷いた

席に着いて向かいあったスカルが胸ポケットから一枚のカードデバイスを取り出す。見覚えのあるそれに輪音りんねは小さく驚く

「アニマアルカナ…!?」

『やつぱこちらの事情ある程度知ってたな。なら話がはええ』

アニマアルカナに顔のような表示が現れ、その口が動くのを見て輪音りんねが思わずギョツとする

「アニマルカナが、しゃ、喋ってる!?？」

『まあちよつと訳アリだな』

スマホスタンドに立てかけられながらがっはつはつと泉が笑う

『あー……こんなナリの俺が言うのもなんだが、俺たちは怪しいものじゃない。仮面ライダーレクイエム、平坂 十三のことも知っているし、向こうも俺たちを知っている。ノーワンやジョンドウを正しく葬るための同士……とまで言い切るのは、おこがましいかもだが』

マスク越しに頬を掻きながら告げるスカルの言葉聞いて、輪音は少し警戒を緩める
「十三さんと……じゃあ、あなたも仮面ライダーなんですか？」

『俺は仮面ライダーのサポート側。変身するのは、こいつとその妹の方なんだ』

スカルが立てかけられた泉をつんつん突く

「妹さん……?」

『さっきのお面娘だよ。話はそこなんだが……嬢ちゃん名前まだ聞いてなかったなそういうえば』

「あ、えつと……十 輪音です」

『輪音か、オーケイ。オレは八七 泉。訳あってこの見た目が一応人間だ。あと、このマスク男はスカルって呼んでくれ』

『よろしく。輪音ちゃん』

泉がディスプレイの顔を笑みに変えて告げる

『輪音、キー子…オレの妹の友達になってやってくれないか?』

「…友達、ですか?」

思ってもみない言葉に輪音が首を捻る

『ああ、そうだ。うちの最高の妹、キー子なんだが…親が早くに亡くなってからオレがずーっと面倒見てきたからか、オレにべったりでな…オレとしては嫌な気は、しないが

…』

泉が微笑みながらも真剣に言葉を続ける

『あいつ、昔学校でいじめにあつてから1人でオレ以外の人間と話すのを極度に嫌うんだ。そのせいで、まだ16なのに学校も通つてねえ』

「そうなんです…」

輪音が目を伏せる

『…中々キー子のヤツ話さないから、なんかあつたのはわかるんだが、このままじゃダメなのにも違いねえ。だから、学校でもオレたち以外に支えになってくれる…友達って

ヤツが必要と思つてな』

スカルが腕を組みながら頷く

『俺たち側に込み入った事情があるから、ただの学生だと希も色々気を使うかもと思つてしまつてな。そんな時に輪音ちゃんを見つけた訳だ』

『仮面ライダー側の事情とかがわかる、輪音ならキーン子の友達に申し分ないと思つただよ。それ以上に、中々クールなヤツと思つたからつてのもあるがな』

泉の言葉に輪音があはは、と照れ臭そうに小さく笑う

「あ、じゃあ今朝下駄箱に入つていたこれつて…」

輪音が取り出したのは小さなメモ用紙

書いてある内容は『昼休憩に裏庭に来て。話がある。お面とプラカードを持つてるのが私 八七 希』とあつた

『俺が書いたニセモノだ』

『まあオレは書けねえからな』

何故か誇らしげに言う泉に乾いた笑いが漏れる輪音

そんな輪音たち以外にも、様々な人々が行き交う中庭をふらふらと一人の男子学生が猫背で歩いていく

キョロキョロと辺りを見回すと、談笑する生徒やらボールで遊ぶ生徒、雑誌で何かを

一緒にチエツクする生徒が目に映る

「……………み、みんな、羨ましい…友達たくさん…」

男子学生は掻きむしるように頭を抱える

「……………僕も、友達が欲しい……………で、でも僕には、友達が作れなかった…声かけるの…苦手だし……………し、趣味も得意なことないし……………」

「……………だから、し、死ぬ時くらい…みんなと一緒に死にたかった、のに…!!？」

男子学生の脳裏に先日の光景が思い出される

ひつぎのみや
棺ノ宮中央学園の裏掲示板。そこで募集されていた「集団自殺」

これだと思った。死んでしまいたいほど孤独で、そんな孤独なのに友達を作る才能も無い自分でも、これなら死ぬ時は孤独でなくなる。最高の死に方だと

「げほっ、げほっ、げほっ…!!？」

思っていた

密閉した廃バスの中で炊いた練炭から発生する一酸化炭素の煙に大きく咳き込み、朦朧とする意識の中で周りを見る

周りの者たちは皆、既に眠るように息を引き取っていた

死んでいないのは、自分だけだった

(……僕は、死ぬ才能も…無いのか…)

『…いいえ、あなたは抜群のセンスの塊よ?』

朦朧とした意識の中、高慢そうな女の声が響く

現れたのは灰色のドレスに豪華なシャンデリアのような飾りを纏う怪人
その怪人が手を振るうと、周囲の死者から黒い炎が飛び出し、煙のように渦を巻きだ
す

【本当に死ぬなんて思ってたなかった】

【興味本位だったのに】

【俺、もう死んだの…?】

【こんなはずじゃなかった】

【ああ…】

【死にたくない】

『見なさいな、こいつらは無様にも死ぬことを受け入れてないのにこんなことをした。』

でもー』

怪人は男子学生ー灰谷はいたに 冬利とうりを指差す

『ーあなたは違う。自ら死を選んだ。まあ、今の死に方は…あなたの望み通りでは無さそうかしら？』

その言葉に冬利とうりは朦朧とした意識の中でも頷く

(そうだ…僕は、僕は…僕を残して死んでほしくなかった…!!?)

(こんな一人で死ぬのは、嫌だ…死ぬ時くらい、孤独は嫌なんだ)

『アハツ、最高にクールな願いじゃない』

パチン、と怪人が指を鳴らす

黒い煙となつて渦を巻いていた死んだ生徒たちのアニマが一斉に冬利とうりの口に入り込み、冬利とうりが体をのけぞらせながらのたうち回る

苦しみ悶えるその体から灰色の煙が大きく吹き出し、中央に杯の描かれたカードが現れると、その煙が新たな怪人の姿を形作る

【あああああ!!!】

現れた怪人ースモーク・ノーワンに近づき、シャンデリアがその肩にキスをする

『ハッピーバースデー、スモーク・ノーワン♪』

「あああああ!!!」

とうり冬利が叫ぶと共に、その体が灰色の炎に包まれて燃え上がり、中央に現れた杯のアニマルカナが取り込まれると共にスモーク・ノーワンへと変貌が完了する

突然現れた怪物に悲鳴をあげだす生徒たちに向けてスモーク・ノーワンは腕を振り回して煙を放つ

放たれた煙に頭を包まれた生徒たちは息苦しそうな様子を見せ倒れていく

「一人にしないで……一人で死にたくないだけなんだッ!!!」



美術室で片付けをしていた十三じゅうぞうが中庭から灰色の煙が噴き上げていることに気づく

「!? ああのノーワンか!!?」

美術室の扉を開け、周囲に生徒たちや教師がいないことを確かめてデスサイズドライブバー・ギロチンを装着する

《サーティーン・デス》

起動したアニマルカナをセット、右手で首を掻き切るように、祈るように一文字を切り、親指を下に向ける

「変身!!？」

《エクスキューション・アップ》

《リバース・デス》

ギロチンにより落ちて燃え上がった頭を軽く蹴り飛ばし、黒い炎を纏いながら疾走。ライダースーツのような姿に変身して頭をキャッチしながら窓を開けて身を乗り出して跳躍する

ヘルメットのように頭を装着し直し、レクイエムへと変身が完了した十三は中庭じゅうぞうに足を向けるが、その視界の端を横切った何かに目を向け、驚愕に目を見開く

少し背の高い眼鏡をかけた細身の男

見間違はずがない。零楼院れいろういん 咲夜さくやージャック・ランタンが鼻歌を歌いながら闊歩していたのだ

レクイエムじゅうぞう十三の視界が途端に赤く、怒りに染まる

「ジャック・ランタン!!?」

悠々と歩くその前にレクイエムが割り込む

ヒュウ、と口笛を吹きながら咲夜は笑った

「おやおや、仮面ライダーレクイエム。こんなところで奇遇だね」

「なんでお前が……ここに……?」

「べえつにイ? ただの探し物、サ。昔作った『オモチャ』がここにあるらしいからね」

「探し物だと……」

レクイエムがギリ、と拳を握る

「ーふざけたことを、ぬかすなあ!!!!」

《ワン・カウントダウン》

ドライバーのレバーを一度下ろし、腕に出現させた黒炎のギロチン刃を回転させながら拳を振るう

咲夜の姿が黒炎の中に掻き消え、レクイエムがその姿を探すと、背後にジャック・ランタンへと変貌した咲夜が立っていた

『酷いことするなア、キミは』

帽子の鏢をなぞりながらランタンがやれやれと肩を竦める

「酷い……だと……!?」 六美を殺したお前がほぎくなあ!!」

『殺したア? バカ言わないでくれヨ。ワタシは彼女を次のステージに導いてあげたのサ!!?』

ランタンが芝居がかった仕草で腕を広げながら笑う

『そもそも、彼女ほどの天才はワタシがどうこうしなくとも遅かれ早かれ殺されていただろうヨ』

「なんだと……!?」

杖をくるくると回しながら道化は続ける

『彼女みたいな「出る杭」を憎むにせよ、我が物にしようとするにせよ、どのみち彼女は人らしくは死ねない。ならば!!? その頭脳が褪せることなく残せる今の方が彼女は幸せだろうよ!!?』

『彼女を「殺した」のがワタシの責任とは、勘違い、言いがかりも甚だしいよネエ? クックク』

レクイエムが笑い続けるランタンの顔を殴りつける

『大体キミもさあ、未練がましい男だよネ』

背後から現れたランタンがレクイエムの肩を杖で打ち据える

「がっ!?」

『彼女を愛せなくなったなら、別の女を探せばいい』

『「繁殖相手」に拘り続けてワタシに八つ当たりとか、いいメイワクだよねえ?』

ねえ?と2人のランタンが顔を見合わせ、首を傾げて嗤う

「おかしな能力を…ッ!!!」

アニメライターで2人のランタンをまとめて薙ぎ払うと新たなランタンが2人校舎の影から姿を現し、杖から放つ光弾でレクイエムを前後から撃ち抜く

「ぐあっ!?!」

『キハハハハ!!?そのおかしな能力に手も足も出ないじゃないか』

『《死神》というのも名前負けかな?』

『おいおいワタシ?それは流石に言いすぎだ、ぞ?』

と自分の頭を指で弾き、ケラケラと3人に増えたランタンが笑う

分身と合わせた数が1人足りなくなっていることに気づくレクイエムをもう1人のランタン頭が黒くのつぺらぼうになった分身が羽交締めにする

「くっ!?!」

『あのノーワン、やはりここの生徒か何かか……』
 輪音も警戒しながら立ち上がり、辺りを見渡す

そんな3人が座る席にお面パーカー姿の少女ー希がずんずんと歩いて近寄ってくる

『おう、希!!? オレたちではーんんツ!!?』

希は泉の宿るアニマルカナを乱暴に鷲掴みにし、お面を外して睨みつける

お面の下の顔に思わずスカルと輪音もたじろぐ

普段表情の変化がわかりにくい希だが、この時ばかりはほぼ初対面の輪音ですらわかるほどの激怒を見せていた

『え、えーと……希、サン……?』

『……セン兄、私を、騙してた』

ギクウ!!?と聞こえそうなほど泉がアニマルカナの体を震わせる

『……どこから?』

『キー子の友達になってやってくれないか、から』

『ノウ!!! ほぼ全部!!!』

希が泉を掴む手に更に力を込めて握りしめる

『……セン兄とスカルは、信じてたのに』

どこか悲しそうな声で呟くのに輪音が気づく

が、それを泉たちいずみに話すより早く希のぞみがアニマルカナを振りかぶる
 『ちよつ、キー子のぞみ? 希さん!!』

「ーセン兄なんか、知らない」

ぶんつ!!?と思いつきり泉いずみの入るアニマルカナを放り投げて捨てる

『キー子オオオオオオオオオ!!?』

『い、泉いずみ!!?』

放り捨てられた泉いずみを追いかけて駆けていくスカル

取り残された俯のぞみく希のぞみに何か声をかけようと手を伸ばす輪音りんね

【ああ、ああ!!?死んでよ、僕と一緒に死んでくれ!!】

そこにスモーク・ノーワンが現れ、体のユニットから灰色の煙を噴出してくる

発生した煙を避けることもできず、輪音りんねと希のぞみが煙に巻き込まれてその姿がかき消され

た

『ホウ、あのノーワン中々逸材じゃないか。シャンデリア、今度はいい素材を使ったみた
 いだねエ』

渦巻き、ドーム状になっていく黒みがかつた灰色の煙を見上げてランタンが感嘆の声を上げ、ふうむと顎をなぞる

『これはひよつとしたらひよつとするかなア?』

ランタンを睨む十三じゅうぞうがぼろぼろの体を無理矢理に立ち上げらせる

『その体で何ができるんだい? 万全でもワタシに及ばなかったのにイ?』

「黙れ…ツ!!? 俺は…俺はお前たちのような悪魔を許さない…俺は、俺は…ツ!!」

《死神》デスのアニマアルカナを構える十三じゅうぞうにやれやれと肩を竦めながらランタンが杖を向ける

瞬間、背後から飛来してきた炎蝶の爆発がランタンをよろめかせる

ぱち、ぱち、ぱちと拍手を鳴らしながら十三じゅうぞうの側にジャクリーン・キャンドルが近寄る

『いい啖阿だったぞ、十三じゅうぞう。そういう言葉が聞きたかった』

「何の用だ…キャンドル!?!」

怒鳴りつける十三じゅうぞうの右手を掴み、《死神》デスのアニマアルカナを取り上げると、別のアニマアルカナを握らせる

今までのアニマアルカナとは違う金色の複雑な装飾が施されている新たなアニマアルカナを

『たまには《恋人》らしくプレゼントしてやるってことさ』

その言葉に十三^{じゅうぞう}が苛立たし気にその手を振り払う

十三がその新たなアニマアルカナを掲げ、スイッチを入れる

《テン：W・O・F》
ウイール オブ フォーチュン

普段よりも歪んだ音声が響き、黒いエネルギーパークと赤い波形を放ち、アニマアルカナが起動する

「変身ツ!!!」

それをドライバーにはめ、十三^{じゅうぞう}がレバーを下ろす

《エクスキューション・アップ》

《ディサイド・フェイト》

ドライバーからいつものとは違う黒い稲妻と赤黒い炎が吹き出し、十三^{じゅうぞう}が苦しみだす

「ぐっ、があああああ……ツ!!!」

獣のような唸りと共に十三^{じゅうぞう}が立ち上がり、天に向けて吠える

首に2つのギロチンが現れ、乱雑に落とした首を拾って乗せなおす

炎が体をライダースーツ状のスーツとして覆い直し各所に赤いラインが走っていく

と共に赤い鋭い爪を持つ手を作り出す

赤黒い炎が頭部をなぞり、黒い仮面となると共にその両側にギロチン型のバイザーが2つ降り、竜のような禍々しいマスクを完成させ、バイザーの奥から真紅の眼光を輝かせる

《リバース：ウイール・W・オブ・O・フォーチュン・F》

「ーはあああ……ッ!!!」

息を吐き出しながら肩を震わせるレクイエム

『だから何度来てもムダー』

「グルアアアアアアアウウウツ!!!」

獣じみた咆哮と共にレクイエムが腕を振り回して前方を薙ぎ払うと、赤黒い炎の車輪が出現してランタンを抉り裂く

『グゲあつ!?!』

吹っ飛ばされたランタンに一步、一步と歩んでいくレクイエム

「フウーツ、フウーツ……!!!」

その周囲に赤黒い炎の車輪が渦を巻き、背には後光の如き車輪が姿を現す

